



* 0010819000 *

0010819-000

319.2-Sa132k

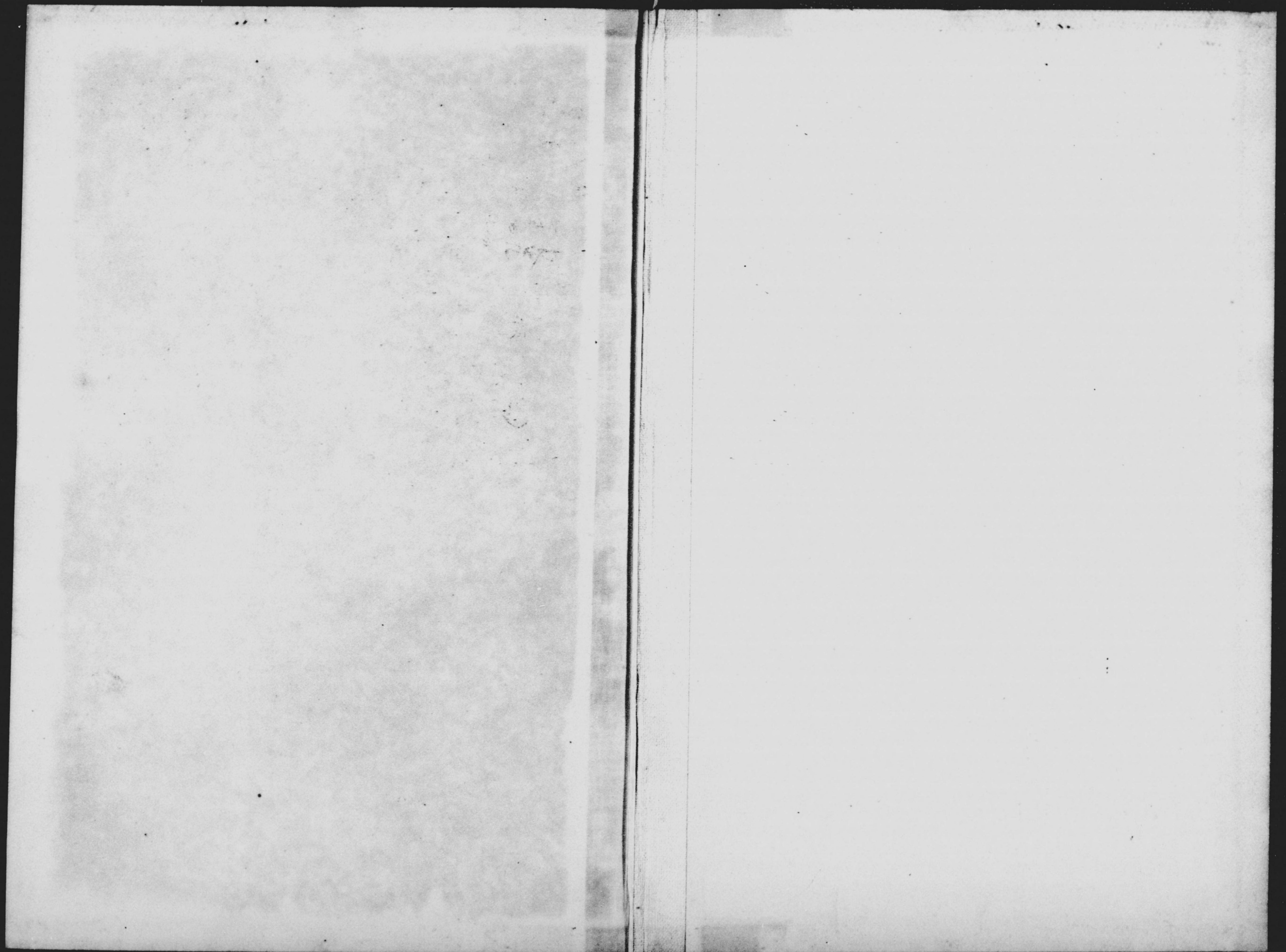
極東外交論策

三枝茂智・著

斯文書院

1933

ABJ

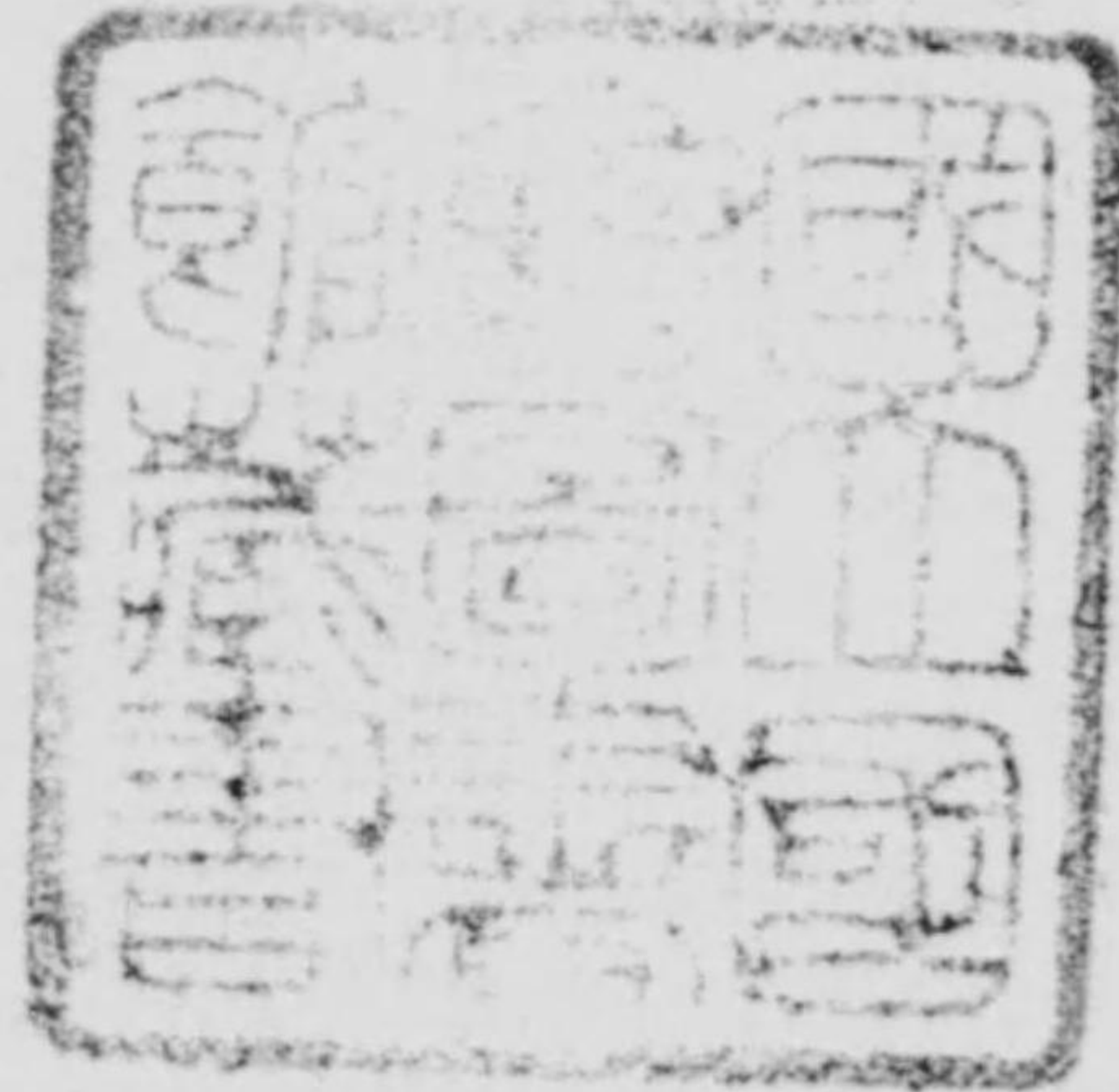


法學博士 三枝茂智著

極東外交論策

東京斯文書院發行

319.2
Sa 132 k



30956

自序

世界大戦の反動として國際聯盟生れ、平和主義軍縮思想が高調せられ、其の波及するところ帝國に於ても亦國軍の輕視、風を成した當時、余輩は斯くの如き飽和國英米に内在し、従つて彼等が誇りを以て提唱する一種の國際主義（普遍）が、實に未成年帝國主義國として必然的に軍國的傾向を帶ぶべき帝國の特殊性を克服し、滿蒙支配權拋棄を決意せざる限り、漸次帝國を驅つて顛落の深淵に急がしむべきを惧れ、倫敦會議前敢へて流俗の所見に反し、『直接軍備制限と政策』なる一文を草し、軍縮問題と滿蒙問題とが一全不可分の死活的政治問題たる所以を力説し、帝國海軍の三大原則を支持して置いた。爾來四年有半、余輩が世俗的閑日月を筆に托し、外交時報、國際評論、東亞、支那、國際知識、經濟往來、國本等に寄稿したる論文は今や積んで二十餘篇に達するに至つた。今日之を通讀するに滿洲事變の勃發は豫言せられ、滿洲國承認を敢へてするならば聯盟脫退は論理上同日に於て之を行ふべきものなることは提言せられ、聯盟脫退の場合に於ても所謂合法性否認政策の漸進

的解消の爲め、殘餘の協調は之を繼續すべきものなることは力説せられ、規約第十六條は超國家の憲法たるべきものにして、社團ソサエティに過ぎざる聯盟に依りて活用せられざるべきことは斷言せられ、和蘭に不可侵を約するの妥當なることは示唆せられ、帝國外交更生の一路は太平洋國際帝國主義を基調として日英米の共生を策するに在りとなして、光榮ある平和への一路を開拓するの條件は示唆せられ、權威ある特使の派遣は要望せられ、國際的孤立脱却の爲めに日露不可侵條約締結の希望に堪へざることは提唱せられてゐる。

前述の鄙見は帝國外交が觀念界に於ける戰爭の壇の浦に立ち、遂に聯盟脱退を餘儀なくせられたる直後、畏くも煥發せられたる大詔に於て、「今や聯盟と手を分ち、帝國の所信に是れ從ふと雖、固より東亞に偏して友邦の誼を疎かにするものにあらず、愈々信を國際に篤くし、大義を宇内に顯揚するは夙夜朕が念とする所なり」と宣はせ給へる聖旨に副ひまつり、齋藤總理が告諭に於て、「國際平和の増進と世界文化の發達とに貢獻するは帝國の傳統にして且つ不動の國策なり、向後も猶依然として人類の安寧福祉を目的とする國際事業に參與協力するの方針を一

貫して何等渝はる所なし、又敢へて東洋に跼蹐して偏安を事とするものにあらず、益々友邦の誼を敦くし、正義公道を世界に宣布せむことを期するや固より言を須たず」と述べられたる趣意に適ふものと思惟するのであつて、我が傳統的民族精神を具體的に演繹するならば前述の余輩の外政方略大綱に頗る近きものあるべきは余の敢へて自信する所である。最近一年有半の如き内外國策轉倒時代に於て克く大局を揣摩して過つこと尠かりしは、余輩が「常に來るもの」を把握せむと努力して過半の成功を收めた結果に外ならぬ。斯くて余輩の把握した原理の總體は客觀的妥當性そのものであるから、想像し得る限りの如何なる消極的協調外交も積極的自主外交も其の功罪を清算することなしに此の原理の前より逃避することを許されない。古人曰く「歲寒くして松柏の凋に後るゝを知る」と、余輩の文章の謂ひにあらざるなきか。即ち頃者斯文書院主の希望に依り、是等に今迄筐底に藏せられた舊稿數篇を合せ、第一編極東外交、第二編國際政治、第三編軍縮問題、第四編文化外交の四編三十四章に分ち、極東外交論策と題し、敢へて世に問はむと欲する所以である。

第一編極東外交、第一章國策の復興は非常時局の意義に關する余の見解を披瀝したものであつて、後世史家をして十全の認識に把住せしめむとし、且つ國民の覺悟を促したものである。第二章滿蒙問題に就ては柳條溝事件の必然性を説き、第三章滿蒙に於ける生命の躍進は社會現象が其の根柢を神秘的なる生命に置いて居ることを説いたものである。第四章門戶開放主義論、第五章門戶閉鎖主義論は特に支那學者等の著書に基き是等の外交上の慣用語の意義を闡明し、帝國外交戰略の一端に迄論及したものである。第六章聯盟に於ける日本の自己清算及び第七章「リットン」報告の教訓は聊か世の俗論に聽從する能はざる余輩の判斷を卒直に表明したものである。第八章理想主義の顛落は現實曝露の直後に於ける驚くべき幻想の流行を戒しめたものである。第九章國際危局匡救の原理及び第十章更生外交の原理と術策は「アングロサクソン」聯盟が世界に布かむとする平和制度に對する留保の煩累より脱却して、帝國の特殊性に内在する普遍たる國際帝國主義特に太平洋國際帝國主義か然らざれば純正國際主義を標榜して起たむことを提唱し、帝國外交の爲に「光榮ある平和」の一路を想定したものである。

第二編國際政治、第一章恒久平和の謎及び第二章列強を動かすものは國際協同社會の結成せられず、民族國家が最終自然的實在體たる所以を論證したものである。第三章國際平和の實踐的原理は最も實行性に富める平和案を提唱したものである。第四章排外教育論は支那の排日運動を民族心理學的の立場から検討したものである。第五章動搖する坤輿は現下の國內不安が社會主義の限界の不明なるに在り、現下の國際不安が法と力との乖離に在ることを示したものである。第六章英米關係の再認識は英米間の本質的紐帶が華府會議の前夜より漸次具體化して、英米聯盟の形式を採るに至れる所以を力説し、第七章日露支關係と不可侵條約は四圍の情況判斷より條件付に日露不可侵條約の締結の望ましき所以を主張し、第八章聯盟脱退と委任統治は聯盟脱退に拘はらず委任統治國たる帝國の晏如たる法律上の地位を力説したものである。

第三編軍縮問題は拙著「國際軍備縮少問題」の姉妹篇であつて、第一章軍縮問題概説は右拙著内容の通俗化を圖つたものであり、第二章直接軍備制限と政策、第三章陸軍制限問題の歸趨、第四章極東軍縮史と一般軍縮會議、第五章一般軍縮會議の

動向、第六章一般軍縮會議の歸趨、第七章帝國海軍の禁令、第十二章歐洲の危機と列強首領の大計畫は前記拙著の判斷の妥當性に對し更に新なる實證を集積したものである。第八章「ウィリアムス」著「米國と軍縮」批判、第九章「ルフエブール」著「科學的軍縮」批判、第十章獨佛の軍縮論、第十一章國際安全保障問題は本問題に側面より光明を投ずる讀書餘録である。是等拙著論文が我が智識階級をして軍縮問題の第一義の國際政治問題にして、滿蒙問題の歸趨は勿論、廣く極東領導權の歸屬が軍縮問題と絶對不可分に結付けられたることを冥解せしめるに役立ちつゝあることの心證に接すること屢々なるは余の欣幸とする所である。

第四編文化外交は世界の文運に貢獻し、泰西の貧困なる精神的文明を匡救すべき日本學即ち渾一東洋學の把持者としての帝國の無双の文化的地位（カルチュラル・ステータス）を外交政治の上に利用せむことを提唱し、尙之を補ふに獨佛の文化外交技術に關する概説を以てしたものであつて、後進の研讀に資すると同時に、以て篤學報國に志す帝國智識階級の奮起を促さむとするものである。

惟ふに現下の非常時は夙に約束せられたる帝國の宿命であつて、皇國の特殊性

に根を張れる武力が國際平和機構——よしや除外例や留保を求め得たとしても猶足らぬ如き——に依りて封ぜられ、帝國が條約文面上の過熟文弱國となり、無政府状態の下に天下に武を布き米國流國際主義の潮に乗れる以夷征夷政策の成功に漸く陶醉せる隣邦封建將領の蔑視を招きたる秋、不可避の情勢に置かれたるものである。而も天下に活眼達識の政治家ありて牖戸を未雨に綢繆し、先憂後樂の士ありて狂瀾を未倒に制するの籌略全からざりしは實に浩嘆に値ひし、本書の世に出づる民族的使命は實に茲に在る。願くは此の小著が大和民族を乗せて非常時の怒濤を凌ぐ大八州の羅針盤となり、帝國の特殊性と普遍性とを齊しく生かす自主的協調外交に依り帝國の國際的安全の大道を標識し、昭和維新の聖業を翼賛する立正安國論として全國の歡迎を克ち得むことを。因に背文字は余が父翁の書である。記して謝恩の意を表す。

昭和八年六月二十日

極東外交論策 目次

序

第一編 極東外交

第一章 國策の恢興

第一 國策(二)——第二 民族的生命の躍進(八)——第三 國家平等の原則(九)——第四 不平等片務條約(一〇)——第五 不平等條約の脆弱性(一一)——第六 不平等條約に對する外部の脅威(一二)——第七 不平等條約の脆弱性と同條約の外部的脅威との合作(二六)——第八 助成的原因(二八)——第九 滿洲事變を契機とする國策の恢興と列強(二九)——第十 國策恢興の前途(三五)——第十一 國民の覺悟(三八)

第二章 滿蒙問題に就いて

第三章 滿蒙に於ける生命の躍進

第四章 門戸開放主義論

..... 四六

第五章 門戸閉鎖主義論

..... 六二

第六章 聯盟に於ける日本の自己清算

..... 七三

第一 認識不足の所在(七二)——第二 聯盟の本質(七三)——第三 米國の自己清算(七四)——
第四 聯盟に於ける類冠り日本(七七)——第五 聯盟に於ける自主的の日本(七九)——第六 日
本自己清算の應接(八〇)——第七 日本の聯盟脱退(八一)——第八 聯盟可塑性の擴張(八四)

第七章 「リットン」報告の教訓

..... 八七

第八章 理想主義の顛落

..... 一〇一

第九章 國際危局匡救の原理(太洋國際帝國主義論)

..... 一〇九

序説(自然の理法と人爲法)(一〇七)——第一 自然現象としての國家の分類(一一一)——第
二 未成年帝國主義國日本の退轉(一一三)——第三 宿命の滿洲事變(一一六)——第四 國際
危局と日本の外交困難(一二七)——第五 現實の保障なき平和の原理(一二二)——第六 國際
帝國主義(一二四)——第七 太洋國際帝國主義(一三三)——第八 人種主義又は東洋モンロー

第十章

帝國誕生外交の原理と術策

..... 一八

主義又は絶對的若くは準絶對的帝國主義の排撃(一三八)——第九 太洋國際帝國主義の應用
(一四八)——第十 支柱としての國際帝國主義(一七九)——第十一 結論(一八二)
第一 正義と事實(一八八)——第二 日本外交蹉跎の所在(一九四)——第三 帝國誕生外交の
基調(一九八)——第四 誕生外交の指導精神に關する世論(二〇一)——第五 帝國誕生外交の
旗幟(二一四)——第六 帝國誕生外交の術策(二二六)

第二編 國際政治

..... 三五

第一章 恒久平和の謎

..... 三五

第二章 列強を動かすもの

..... 三五

序説(二三五)——第一 宗教の傳播(二三六)——第二 覇制政策と平和案(二三七)——第三
第一回及び第二回海牙會議(二三九)——第四 佛、伊、獨の舉措(二四一)——第五 勞働階級の
國際主義(二四三)——第六 英國の傳統的政策(二四六)——第七 米國の金融資本主義(二五
〇)——第八 國際聯盟のモザイク(二五五)——第九 諸權威の鐵案(二五七)——第十 理想
的平和論者の所説(二五八)——第十一 結論(二六一)

第三章 國際平和の實踐的原理

四

第一 四海同胞主義的民族主義(二六三)——第二 純正國際主義(二六四)——第三 現實に適用せられつゝある民族主義(二六五)——第四 現實に適用せられつゝある國際主義(二六七)——第五 純正國際主義の實現を阻止する要素(二七一)——第六 國際帝國主義、結論(二七六)

第四章 國際政治と教育(排外教育論)

三九

第一 教育と國家社會(二七九)——第二 國際主義(二八一)——第三 國際主義と教育(二八三)——第四 民族主義、帝國主義、人種主義(二九一)——第五 民族主義と教育特に排外教育(二九三)——第六 結論、世界に於ける日本と其の教育(三一一)

第五章 動搖する坤輿(世界の過誤は何處)

三四

第六章 英米關係の再認識

三一

第七章 日露支關係と不可侵條約

三四

序説(三四一)——第一 露國國情の把握(三四二)——第二 露國提議の不可侵條約(三四五)——第三 露支關係の回復(三四八)——第四 日露關係と英、米(三五一)——第五 日、滿、蘇關係(三五三)——第六 日、滿、蘇不可侵條約の利害(三五五)——第七 技術的問題(三七一)——

第八 結論(三七二)

第八章 聯盟脫退と委任統治問題

三七

序説(三七三)——第一 條約に於ける立法と適用の齟齬(三七四)——第二 法律としての聯盟規約と政治的術策としての聯盟規約(三七五)——第三 委任統治條項について(三七六)——第四 ウェルソンとスマッツ(三七七)——第五 併合主義、ヴェルサイユ條約第百十九條(三七九)——第六 聯盟至上主義、聯盟規約第二十二條(三八〇)——第七 併合主義の勝味(三八二)——第八 共同領有權に關する公正的解釋について(三八三)——第九 聯盟主權説排撃論(三八四)——第十 非聯盟國と委任統治(三八五)——第十一 委任と解任、五大國の全會一致(三八七)——第十二 結語(三八八)

第三編 軍縮問題

三九

第一章 軍縮問題概説

三九

第二章 直接軍備制限と政策

四〇

第一 軍備の存在と戰爭の原因(四〇六)——第二 軍備制限の二方法(四一一)——第三 間接方法に依る軍備縮少(四一三)——第四 直接軍備制限と政策(四二一)

第三章 陸軍制限問題の歸趨……………四三九

第一問題の所在(海軍制限との比較)(四二九)——第二ヴェルサイユ條約に於ける陸軍制限
條項(四三一)——第三軍縮會議準備委員會に於ける陸軍制限の諸方法(四三二)——第四露
國委員の一般的軍備即時撤廢案(四三五)——第五一般的軍備制限條約案の内容(四三七)——
第六對獨方策とヴェルサイユ條約の功罪(四三九)——第七ペーカー教授軍縮協定案の是非
——(四四三)——第八獨逸國際聯盟協會陸軍軍縮案(四四七)——第九フォン・クル博士及
びハンス・ガルケ氏の所説(四五四)——第十エッシャー卿の先見(四五六)——第十一軍縮
會議の内實暴露(四五七)——第十二問題の歸向(任意的制限)(四六〇)

第四章 極東軍縮の回顧と一般軍縮會議……………四六三

序説(四六二)——第一國內的任意的軍縮史觀(四六二)——第二論議と實際(四六六)——
第三帝國代表に望む(四七〇)——第四軟弱輿論の反映(四七五)——第五帝國の特殊的地
位、安全保障の提唱(四七八)——第六杞憂か否か(四八四)

第五章 一般軍縮會議の動向……………四八六

第一軍縮運動の今昔(四八六)——第二軍縮問題に於ける國際聯盟の功績(四八七)——第三
現在軍備の固定化(一般軍縮會議に於ける第一の動向)(四八八)——第四質的軍縮(第二の

第六章 一般軍縮會議の歸趨……………四九六

序説(四九八)——第一軍備現状の固定化(四九九)——第二獨逸の軍備平等權の要求(五〇
二)——第三質的軍縮(五〇八)——第四量的軍縮(五一五)——第五佛國の新安全保障案(五
一七)

第七章 帝國海軍の禁令……………五三〇

第八章 ウイリアムス著「米國と軍縮」批判……………五三〇

序説(五三〇)——第一第一編「史的海上霸權論(五三一)——第二第二編「米國に必要な
る海軍力(五三四)——第三第三編「諸海軍會議(五三八)——第四第四編「國際聯盟との協
力(五四〇)

第九章 レフェブリア著「科學的軍縮」批判……………五四八

序説(五四八)——第一戰爭、軍縮及び軍縮の前提條件(五四九)——第二技術的問題として
の軍縮(五五三)——第三過去に於ける諸提案の検討(五五七)——第四結論(五六〇)

第十章 獨佛の軍縮論

第一節 フォン・エルツェン著

「是が軍縮」(E. W. Von Aertzen: Das ist die Abrüstung.)

五六三

第一敗者は禍なる哉(五六二)——第二 顧維鈞の微苦笑(五六三)——第三 英國の理論と佛國の實際(五六四)——第四 死者の人蔭(五六五)——第五 佛國の軍備擴張に奉仕し一般軍縮を怠業する社會主義者(五六六)——第六 シニカルな殘酷(五六七)——第七 パナマ帽の男(五六七)——第八 壽府に於ける當惑(五六八)——第九 デカシター新聞記者(五六九)——第十 ミンヘルン・ヴァン・ポインテンゲンの蒐藏物(五七一)——第十一次の戦争の幽霊(五七二)——第十二 虚言の終末(五七四)

第二節 チャック・リヨン著

「軍縮問題」に就て (Jacques Lyon: Les Problèmes du Désarmement.)

五七五

第三節 二書に對する批判

五八一

第十一章 國際安全保障問題

(Raafat: le Probleme de la Sécurité internationaleの批判)

五八三

第十二章 歐洲の危機と列強首領の大計畫

五九七

第四編 文化外交

六三三

第一章 對外文化政策論

六三三

第一 文化及び文化事業の意義(六二三)——第二 各國對外文化事業の概説(六二八)——第三 文化事業の必要性、物理的闘争より智的闘争へ(六三四)——第四 文化立國策の提唱(六三六)——第五 文化事業即ち外交(六三七)——第六 日本に於ける文化事業の重要性(六三九)

第二章 日本學及び東洋學提唱(對外文化事業の指導精神)

六四五

第三章 獨逸の對外文化政策

六五六

第四章 佛國の對外文化政策

六五六

目次終り

極東外交論策

法學博士 三 枝 茂 智

第一編 極東外交

第一章 國策の恢興

大統領の榮冠を掛けて野に下り、閑雲野鶴を友として居つたポアンカレ氏が佛國學國一致の標徴として敢然立つて内閣を組織し、賠償義務の前に逃避せむとする獨逸を取り押へむが爲めに「ルール」地方に兵を進めた時に、佛國の或る論策家は直に鐵筆を柯して「外交政策の恢興」なる一書を著はした。國策は夢幻と消えたる後、民族的生命の動向を想定する能はずして、明瞭に群團を叱咤する第一種の英雄—ナポレオン、シーザーの如し、ワシントンの如きは群團を引附ける第二種の英雄に屬す—を求めつゝある大和民族を發見するに當り、ポアンカレなき我國に於て、余が今、國策の恢興を説かむとするは雲雨風雷を呼ぶの術なくして入雲龍公孫勝に學ばむとするの謗を免かれずと雖も、基督に對するバプテスマのヨハネの役を演ぜむと期するに外ならず。問題は灼熱せる時事間

題である、然れども余の時局考察は飽くまで科學的、客觀的であらねばならぬ。

第一國 策

近時漸く國策なる語を聞くに至つたのは黨略の熾なりし我國に時局の及ぼした影響と見得るも、亦彼の不戰條約中に國策の具としての戰爭を拋棄云々とありしにも緣由する。該條約締結に關する一件書類は國策なる文字の定義を示さず、僅に佛國側の公文中に「自己の内部より自ら發する獨立政策」なる解釋を發見するに過ぎない。余は到底完全とは云ひ難いが、國策とは一國が國際社會に在りて其の現在及び未來の存立を全うせむが爲めに執れる種々なる措置の根本的指導の方針を云ふと定義せむと欲する。恐らく佛國人の大政策、獨逸人の世界政策なる語は國策の概念に略近いものであつて、外交政策を前驅とし、國防政策を中堅とし、財政經濟政策を後陣として、國際的無政府狀態將また群團間の自然的生存競争の怒濤を蹴破らむとする民族の戰時隊形の基調を構成するものが即ち國策である。國策は觀念上一全の全部でなくてはならぬ、部分部分だけでは斷じて國策ではない。

一人に一日、一年、一生の計があり、一家に家計がある如く、一國に國策なきを想像することは不可能である。運動性、生殖性、感受性、新陳代謝性に表現せらるゝ生命は、個我に在りても民族我に在りても本質的に増大の法則に依り支配せられ、此の法則に吻合する動向なしには何等の勢力を發揮し得るものでない。國策の把握せられざるは民族が烏合の衆に墮したるの證左である。列強に斯くの如き國策の認むべきものありやと云ふに、余は先づ英國の歐洲大

陸に對する「分裂せしめて支配せよ」てふ歐洲大陸の民族主義支持政策を挙げむと欲す。英國の此の國策は今日も尙ほ現實政策の内に躍動して時にロカルノ條約を結ばしめ、時に獨、伊を擧げて佛を抑へしめて居る。次に二國標準と云ふ海軍政策も歐洲に關する限り嚴正に維持せられて居る、第三に飽和國たる英國が平和政策軍縮運動に熱中し大英國の豫備的紐帶たる國際聯盟を支持し、歐洲大陸以外の領土を平穩裡に開發せむと欲し、英米不戰のアングロサクソン連帶保障に世界的帝國の安全の鍵鑰を發見せむとして居るのは英國々策の中核である。次に米國々策の一面は對歐洲不干渉主義、南北兩米大陸植民地化排除政策を内容とするモンロー主義にして、他の一面は、最惠國待遇及び不可侵を内容とする門戶開放主義である。佛國々策の大黒柱は一般的及び特殊的安全保障である、此の立場を棄てたならば佛國は如何なる深淵に引摺込まれるか知れたものでない、是れ佛國が今日の軍縮會議にも國際警察の組織等を執拗に提唱して止まぬ所以である。英國のボルドウインは世界的強國は他國の軌道に捲込まれてはならぬと説いて居るが、國策の確立は一面自國の安全の軌道を敷設するものであつて、他面他國の安全の軌道に迷ひ込まぬ用意を藏するのである。

我國に國策ありや否やは、最近國政に或種の龜裂を生ぜしめたるの事實に鑑み、頗る議論の餘地を存するのである。夫にも拘はらず、我輩は國策の存在を確信し、敢て其の復興を説かむと欲するのである。而して右國策とは他なし、傳統的にして民族生活の需要に即し、國防上重大意義ある我が東亞大陸發展の政策である。

日本の大陸發展策は第一に傳統的である、仲哀天皇の九年神功皇后の新羅征伐があり。垂仁天皇の三年鹽垂津彦の

巴汝に駐劄するあり、神功皇后の攝政四十九年設置せられた任那府は欽明天皇の二十二年新羅の爲めに滅さるゝ時迄存続し、豊臣秀吉の朝鮮征伐を経て明治六年の征韓論否決は國內戦争を誘致し、明治十五年朝鮮暴徒の日本公使館襲撃及び明治十七年親支那派たる事大黨—日本派たる獨立黨に對す—の日本居留民殺害日本公使館焼打を契機として日支天津條約—共に兵を置かざること、出兵は知照したる後に於てすることを約す—の締結あり、東學黨の亂より日清戦争を経て朝鮮に覇權を確立し、日露戦争に於て國命を賭し多大の犠牲を支拂ひたる自然の結果として南滿洲及び東部内蒙古に顯著なる特權を獲得し勢力範圍を劃定した。

日露戦争終局後我國の帝國主義は飽滿の青年期に近接した、政治家が國策を忘れ、國民が向ふべき目標を失ひ、上下等しく滿蒙に於ける未完成帝國主義の危險なる状態に關心しなくなつた。此の傾向は巴里平和會議以降一層助長せられ、聯盟規約、九ヶ國條約、不戰條約の締結、支那關稅問題、治外法權撤廢問題に關する専門委員會の開催に依り激成せられ、邦人識者中米國政治家の輩に倣ふて特殊權益を以て門戶開放主義に隸屬依存するものと解する連中を生じ、或る内閣の下に於ては「滿蒙拋棄苦しからず」と論ずる學者を生じた。然らば我國の傳統的大陸發展策は棄てられたるや、決して然らず。其の證左の第一は石井・ランシング協定（之は余が石井子爵に確めた所に據れば石井・ウィルソン協定と呼ばれるべきものである）の締結に依り、門戶開放主義と特殊權益とを平等の立場に置き、其の間の無政府状態を緩和することに依り、我が特殊權益及び勢力範圍の存在を確認せしめた事である。其の證左の第二は所謂二十一箇條の要求に依り寧ろ世界の狀勢に暗かりし外交政治家と平凡なる外交技術家との合作に依り山東出兵の効果を寡少となし、

華盛頓會議に於ける我が外交に累を及ぼしたるに拘はらず、兎に角我が滿蒙の權益存続期間二十五箇年を九十九箇年に延長したることである。其の證左の第三は華盛頓會議に於て一方九ヶ國條約に署名しながら、他方極東委員會に於ける議事の進行中に於て我が既得權益を認めしめ、九ヶ國條約の骨格となつたルート決議案に基き顧維鈞が右決議案に照し既存條約の效力を審査せむと主張したのを壓倒し、一方我が勢力範圍を否認する様な言動をやりながら、他方埴原宣言を以て既得權益の確保を聲明したることである。其の證左の第四は不戰條約の締結に當り米國のモンロー主義に於ける如く明確なる留保を爲さざりしは遺憾なるも、そは解釋上當然の次第なることを心裡に留保したることである。其の證左の第五は政友會の田中内閣以來に於ける滿蒙積極政策、特に鐵道問題に關する交渉である。其の證左の第六は民政黨内閣が畢竟口頭禪に終りたる共存共榮將また國際協調主義の旗幟を掲げたるに拘はらず、一般權益と特殊權益とを區別し、—實は完全には區別出來ないものであるが—、前者は之を時勢の進運に應じ整調するも後者は之を完全に維持せむと聲明し、軍部大臣、總理大臣が相率ゐて此の聲明を更に高調したる事實である。其の證左の第七は不干渉主義に拘はらず帝國が滿蒙治安維持の責任を執るとの聲明をなしたることである。余が國策の復興を説きて創建を云はざるは之が爲である。

此の際余は豫め斷つて置かねばならぬ重要事實の存在する事を感じる。余輩は以上の如き見解を執るが故に、滿洲事變に依りて促進せられた國策の動向を以て國策の復興なりと識したのであるが、反對に國際聯盟參加、不戰條約、軍縮條約、九ヶ國條約の締結等を以て我が徹底的協調外交政策の發露なりと觀じ、我國の國策は勢力範圍を拋棄し、特

殊權益を時勢の解消するに任ずりたりと判断するに於ては、此の滿洲事變の勃發は國策の復興にあらずして國策の顛落又は動搖と見做すべきものである。此の後者の見解は特に濱口、若槻兩民政党内閣の抱く見方であつて、此の後者の見方にも相當の根據あることは如何に日本の最高國策が放任せられてだらしなき状態にあつたかを示すものと云ふべきである。

第二に日本の大陸發展策は國家の需要に即し、他の便法を以て代用品となし得ざるものである、ノヴィコフの言ふが如く一民族の生命を新陳代謝の一大旋風に譬ふれば一葦帯水の滿鮮こそ該旋風の工作地域に編入し得られる。

石井・ランシング協定に地理的テリトリアル・プロベネキエチ近接は特殊權益を孕むと云ふ句がある。之は自然界の原則の一部を記述したに過ぎない、移住に多額を要する南米諸國を除き、概して門戸閉鎖—排米親日傾向の墨西哥人は滿洲事變後米國を擲擲して彼方では門戸開放此方では門戸閉鎖と書き立てた—せられたる後、人口食料問題の解決、工業立國策の發展、原料品及び市場の獲得は—吾人がサンガー夫人に聞き液狀人間を鑿殺するを肯ぜざる限り—滿洲を措て他に求め得ざることは自明の理である。朱少軒の調べた通り中國市場に於て日本の對支輸出品中六十乃至六十五パーセントは支那本部に、三十五乃至四十パーセントは東三省に仕向けられ、支那よりする日本の輸入品中六十パーセントは東三省より、四十パーセントは支那本部より日本に齎らされ、滿洲の大豆、油粕、高粱、石炭、鐵礦は日本に依り掌握せられて居る。勿論華客先は問屋筋よりも大切なりと主張し得るやも知れないが、買ふ品こそ不足品であつて賣る品は國民經濟の過剰品であるとも主張し得る。特に今日我が特殊權益の比較的に安全なる今日に於てさへ、我國の經濟生活は

窮迫憐むべきものであつて、右權益より生ずる果實の失はれ、滿洲にすら經濟絶交の波瀾が洶湧するの日、我國民經濟の窮迫は想像することすら困難である。國際聯盟が通商の衡平待遇を議しようが、各國に於て第二インターナショナルに緣故ある政黨が擡頭しようが、國內市場を國內産業の爲に確保せむとする經濟的エコノミック・ナショナルリズム民族主義は今日其の絶頂に達して居る。國際聯盟の軍事専門委員會は自給自足には米國の如き一大陸を必要とすると斷定した。人口食料問題に悩む島帝國が大陸に向つての經濟單位擴大化は「明白なる運命」として肯定せられねばならぬ。

第三に我國の大陸發展策は國防上重大なる意義を有する。生物が感觸肢を以て危險を豫知し、中堅艦隊が前哨艦を廣く前面に配置して進行するが如く、一國の國防第一線は遠く前進して居らねばならぬ。英國が空軍の發達後獨逸に對する國防第一線を白耳義よりライン河に進め—之れロカルノ條約の成立する所以—埃及、波斯方面にモンロー主義を布き、米國が兩米大陸にモンロー主義を布き、共に之を戰爭網の中核と宣明せる所以である。本質に於て民族主義を國際政治の究極的統一原理となし、國際無政府状態を基調とする今日の國際情勢に於て、合法性レガリティを説き得るや否やは余の疑問とする所である。さあれ一見朝鮮、臺灣を維持せむが爲めには聯盟規約其の他の所謂客觀的正義に依頼することが出来るやうである。されば我國の高價なる陸海軍の存在理由は是非とも滿蒙であらねばならぬ。此の事實を看取せるが故に余輩は倫敦會議の前夜「直接軍備制限と政策」なる一文を外交時報に寄せ、滿蒙に於ける特殊權益の確認即ち地方的安全保障の要望の實現と海軍力七割の要求の全民族的支持とを提唱したる所以であつた。加之我國の前進陣地の北進する程、背後に廣き糧食供給地を得るのであるから此の點より考ふるも亦滿蒙は今日に於ける—人口

三千萬の時はいざ知らず—我邦の生命線と云ふべきである。

以上の如く傳統的にして國家の經濟的需要に即し、國防上重大意義ある滿蒙は我民族の永遠の命の綱たる生命線であつて現代人は逝ける無限大の菩薩、來るべき無限大の衆生の負託に反くことなくして右生命線を拋棄することを得ない。此の理を「排外教育を論ず」に於て大膽にも「國策轉換不可能の原則」に高めた。蓋し幼稚なる思索家「マルキシスト」の説に聞きて、植民地を拋棄して國際水平運動に出發せむか、其の成功を期し得ざるのみならず、成功せる場合には反つて我が國運を逆境に立たしむべく、現實の存在は其の儘既に妥當する眞理であり、「Was ist, das ist recht」なるが故に、我國の宿命は所謂「白人の重荷」を分擔して國際帝國主義を堅持するに在るを確信したるが故である。嘗て我國に「東洋の安定力」たる地位を約束した米國其他の外交政治家が我が國策の自然的なる進展に倒行逆施するのは著しき認識不足の結果であつて、吾人は實に一切の特權先進國、帝國主義國の爲めの戦を戦ひつゝあるのであつて、勝敗は國際帝國主義と國際水平運動又は半植民地の打倒帝國主義運動との興亡に係り、若し萬一日本顛落せば全世界は無制限の混亂に陥るを我輩は虞れるのである。

第二 民族的生命の躍進

アナトール、フランスの短篇集「眞珠母の箱」^{エチオピアスナックル}の内に悲戀に一生を終へた戀人の爲めに謂はば比翼塚を立て二本の木を植ゑた所、双方の根が抱き合ひ絡み合つて墓石を覆したと云ふ様な話を讀んだことがある。勿論物質に宿る生

命の玄妙不可思議の力を禮讚したものであらうが、吾々は現實に日常右の力を感得することが出来る。東北の地、盛岡に有名な石割櫻がある、繁茂せる老樹は扁平となりつゝ巨岩を打ち砕いて立つて居る。余は或日我家の軒端に植ゑた一株の竹が床下に根を延ばし、數本の筍が槍の如く垂直に床板を突いて居るのを見たことがある。其の威勢は床板腐らば必ずや筍は室内に頭を出すであらうことを偲ばしむるに充分であつた。黨人が狂奔しても微動だもせざる寺内内閣が、米俵の出荷を阻止せむとした漁師の女房達の直接行動を導火線とせる米騒動で倒れたことは尙吾人の記憶に存する所である。

民族的生命は所詮一つの運動と觀察せられる、此の運動に動向を與へ、計畫的溝渠に誘導するものが國策の任務であらねばならぬ。政治家は百練の騎士の如く適確に此の國策の手綱を把握し、アンテナの如き敏感さを以てベルグソンの所謂「生命躍進の過程」を注意し、危険なる躍進は双葉にして之を摘取り、有利なる生命は之を助長し、不可抗力は之を計畫的溝渠に導き、其の氾濫を防止せなければならぬ。斯くの如き用意と自信となくして、天皇輔弼の重責に任ずる者は、必ずや我が國體の尊嚴を冒瀆するに終ることを余は斷言して憚らぬ。

第三 國家平等の原則

國家平等の原則は國際法の鼻祖グロチウス之を唱道し、一六四九年ウエストファリアの條約に依り略々確認せられたる所に屬する。世界の現勢に於て、此の原則は實質的よりは寧ろ理論的效果を有するに過ぎないけれども、尙ほ此

の原則が實際に貫徹せられて居る場合もある。彼の一般通商條約上に現はれたる相互主義、將また國際聯盟總會に於ける一票主義の如き其の標幟と目すべきものである。

斯くの如き絶対平等無差別に立脚する條約が勞せずして其の尊重を克ち得、事情變更の原則等に依り顛落するが如きことなるべきことは容易に之を想像することが出来る。

第四 不平等片務條約

之に反し不平等片務條約がある、締約國の一方が權利のみを得、他方が義務のみを負担するが如き條約之である、吾人の經驗より歸納し得ることは、斯くの如き條約が戰爭又は積弱の曝露等戰爭類似の原因より生ずると云ふことであつて、戦後の講和條約の如きは其の著例である。孫文が賣身條約と名附けた對支不平等條約が外國に與ふる特權は、其の之を享有する國の數に於て一般的であり得る、又其の行はるゝ地域が全領域に跨る點に於て一般的であり得る。之に反し右特權は其の行はるゝ地域に於て特殊的であり、其の之を享有する國の數に於て特殊的であり得る。尙ほ一般國が特殊の地域に於て特權を享有して居る場合もある。然し一國が全領域に跨る様な特權を有する場合は發見せられない。列強が支那に於て有する特權は一八四二年の阿片戰爭、英佛聯合軍の支那攻略、長髮賊の亂、日清戰爭、一九〇四年に八ヶ國の國際聯合軍が北京の圍を解いた北清事變、日獨戰爭等に依り幾分擴張せらるゝ所があつた。之等の集積せる外國の特權は租借地、租界、領事裁判權、内水航行權、稅關管理權、鐵道鑛山の經營管理權等である。

我國は條約改正以前外國と不對等條約關係に置かれたのであるから、當初支那とは平等關係に立つて居たのである。然るに日清戰爭後先づ列強が支那に於て享有したる一般的特權即ち領事裁判權、居留地行政權、内水航行權等に均霑し、次に日露戰爭後、露國が南滿洲に於て享有したる特殊特權たる租借地に關する權利、滿鐵、撫順炭鑛の經營權等を相續し、最後に一九一五年に、有名なる所謂二十一箇條々約に於て前記の特殊特權の存續期限二十五箇年を九十九箇年に延長し、商租權等を強取した。勿論米國の干渉、交渉の幾分の拙劣等にも依るが、隨分犠牲を拂つた山東還附の代償としては實に空祖の所得であつた。茲に吾人の看過すべからざる一大緊要事がある。夫は我國の今日有する特權は孰れも其の大宗であつて、特に華府會議後の狀勢より論ずれば一切の諸外國の特權は我國の夫に寄生せるものである。支那の民族運動が戰略上の公理とも云ふべき各個擊破の策に出づるとき、挺身して狂瀾を既倒に挽回すべく宿命づけられたものは勿論日本である。南京事件に於ける英國との不合作、關稅會議に於ける部分的且つ不徹底の自由主義等が聊か生命躍進の動向を把握せざる認識不足の蠢動たるや識者を俟つて後知るべきでない。

第五 不平等條約の脆弱性

平等條約は當事國双方に妥當するが故に安定し永續する可能性がある、之に反し不平等條約は腕力行使の直接の結果なるが故に一方に特權を與へ他方に負擔を課する、此の事實の内に、「不平等條約の脆弱性」とも云ふべき原則が宿る。之が國際法上の *Rebus Sic Stantibus* の原則の存在理由であつて、直接聯盟規約第十九條に現はれて居り、一般

的に平和の要求たる現状の維持固定を支援する規約第十條の規定と對立して居る。現今世界に條約の改訂を要望する獨逸、支那の二國があり、彼等は國際聯盟に於て規約第十九條の活用を主張し、獨逸の學者は軍縮の條件として「ヒト將來の發達を阻碍せざることを」を提言して居る。變化は生命の實相である、一本の脫毛は孤立せる事件にあらずして禿頭への行進である。故に名將片桐且元は「桐の一葉」に豊臣家の末路を見抜いたのである、余輩が外交史は流轉する不平等條約の織物なりと云ふ所以である。之等の事實は不平等條約に内在する脆弱性を明徴にするものであつて、事實上學者の計算する所に依れば國際條約の平均壽命は二年内外である。

今一例を挙げれば、セーブル條約は戰勝國たる同盟側と獨逸に味方した土耳其との間に締結せられた平和條約である。該條約は署名せられたが批准せられなかつた、即ち青年土耳其黨は驟起してスルタンを追ひ、國內を廓清し、新興の餘勢を驅りて希臘軍をスミルナ地方より驅逐し、其の際英、佛等は拱手傍觀せるが故に、セーブル條約は平等條約に接近せるローザンヌ條約に依り置き換へられたのである、斯くの如くにしてセーブル條約は死産に終つたのである。彼の外交史上イレデンチズムの代名詞に用ゐられたアルサス、ローレーン二州は普佛戰爭後フランクフルト條約に依り佛國より獨逸に割譲せられたのであるが、世界大戰後ヴェルサイユ條約に依り再び佛國に復歸した。即ちビスマルクの偉業を語るフランクフルト條約の存續期間は長きも尙ほ約半世紀に過ぎなかつたのである。不平等條約の平均壽命が長からざる、毫も怪しむを須ひないのである。

第六 不平等條約に對する外部の脅威

本質的に脆弱なる支那の不平等條約に對し之を外部より脅威する有力の原因が世界大戰以後地平線上に現はれた。

第一は國民黨の民族主義であり、第二は列國對支共同戰線の破壊であり、第三は國際主義の進展である。

甲、國民黨の民族主義

孫文の三民主義は毫末も彼の創造と認むべきものにあらずして、近世國家建設の根本精神たる民族主義、社會改良主義又は共產主義の意義に於ける民生主義、及びルーソーの民約說以來の民權主義に外ならぬ。而してカラハンの浦鹽宣言以來支那に瀰漫した共產主義的思想に基く土豪劣紳の征伐及び黨部の跋扈等を除けば、民權民生兩主義は紙上の存在たるに過ぎぬ。然るに地理的單一、人種の同一、言語の共通、宗教の一致、同一王室の推戴、經濟上の共通利益、共通の傳説及び互に共鳴する傳説の爲に團結せる民族てふ群團が民族國家を形成すべしとの主張は正統主義、排チナシヨナル民族主義帝國を炸裂せしめて、現今の歐洲の諸國家を創建した餘威を以て、支那人群團本能の暗示感性に訴へ、四億の支那人の熱情及び忠誠と云ふ一大蓄電池を完全に動員し、遂に亞細亞の嵐を捲き起した。加之民族主義の伸張は唯外國政府外國人の負擔に於て其の特權を放棄せしむることに依りて實現せられ、而も支離滅裂の支那を統一するに、極めて有利の媒介なるが故に爲政者に於て有意識的に利用せられ、本質的に根強き運動たる利權回收運動、不平等條約撤廢運動として發現した。民族主義を口號とする民族總動員の思想的方面は黨化教育にして、約法中三民主

義は教育の根本方針と宣言せられ、教科書には排外記事横溢し、其の日本に關するものは日本帝國主義が臺灣、琉球、朝鮮、關東州等を奪つたことを指摘して、仇を報じ辱を雪ぐべきことを提言し、教員學生は學堂の内外に於て排外工作に従事し、排日ポスターは倭奴を屠り其の肉を食ひ、其の血を啜り其の皮に寝むと激語し、軍隊は蔣介石、馮玉祥、張學良、劉峙等に依り毎日、輕日毎日教育を授けられた。以上の如くにして用意せられたる思想を實行に移す爲めには第一にガンヂーの不合作主義に倣へる經濟絶交の方法に訴へ以て日本を屈せしめんとし、第二に革命外交に訴へて、條約の改訂を促進せむとし、國民黨政府の對外宣言に於て（イ）一切の不平等條約即ち外國人の租借地、領事裁判權、外國人の税關管理權其の他外國人の中國領土内に於て行使し、中國の主權を害する一切の特權は之を取消し新に平等相互主義の條約を締結すべきこと（ロ）中國は總て自ら一切の特權を拋棄し、中國の主權を傷くる條約を廢止する國を最惠國と認むることを聲明し、第三に直接行動に訴へて強力を以て漢口、九江の英國租界を回收し、治外法權の一方的廢止を聲明するに至つた。

乙 列國共同戦線の破壊

歴史上比類なき八ヶ國の國際軍が支那を膺懲したる北清事變以降、全體として見れば列國對支那の關係は不平等の關係に在つた、然るに世界大戰後此の事態に此の不平等關係に一大動搖を與ふるに至つた。

イ 獨、澳、露の顛落 獨逸及び澳地利、洪牙利は列國と等しく支那と不對等の特權を享有し、特に獨逸は青島を根據地とし、膠濟鐵道及び津浦線北段を手足となして、北支に虎視眈々たる有様であつた。然るに米公使ラインシュ

の活躍で、日本の寧ろ好まざりし支那參戰は實現せられ、其の結果巴里平和會議に於て支那全權の七次要求は實現せざりしも、獨、澳等は一切の特權を失つて支那と平等關係に立つに至つた。茲に列國對支共同戦線の一角は崩れた。ソヴィエト露西亞は、爾餘の諸國と國家成立の根本義を異にし、階級闘争とプロレタリア專制と生産手段の共有とを要望して民族の對立を否認するものである。故に不干渉主義より干渉主義に轉じた露國が、カラハンの前後二回の宣言を以て「吾人は支那國民を外國の銃劍と黄金の羈絆より解放せむと欲す」と説きてより、中國共產黨と國民黨との合作となり、排外社會教育は民族主義と共產主義的打倒帝國主義運動とにより鼓舞せられるに至り、尋で露支協定の成立に依り帝政露國時代の露支間條約協約等の廢棄、露國と第三國との條約協約等にして支那の主權を害するもの、廢棄、外蒙の還付、東支鐵道の露支平等合辦經營、租界其の他一切の特權の拋棄、團匪賠償金の拋棄、治外法權の撤廢等が約束せられ、露國は任意的に支那と平等關係に立つに至つた。之また列國對支共同戦線の破壊に大いに役立つた。

ロ 殘餘の諸國間の不一致 若し獨、澳、露が顛落しても殘餘の諸國間に利害の一致あらば、支那を壓するに足る共同戦線は不可能でなかつたかも知れぬ、然るに事實は全く之に反した。

米國は廣東に於ける通商時代より支那及び朝鮮は勿論日本に對して通商上の最惠國待遇を受くるを確固不拔の方針とし、政治上の特權を得ることを棄權した。此の主義は後日租借地の發生に依る範圍劃定時代に入りて門戸開放、機會均等の主義となり、日露戰爭直前、日本に依りて露國の南滿進出牽制上支持擴大せられたとは云ふもの、大體租

借地の如き特權に隸屬し、其の下位に立つ意味に於て列國に依り承認せられた。此の米國の外觀上の愛他的對支政策は佛國と同一の密度で五億五千の人口を養ひ得るを以て領土慾を持たず、フィリッピンを獨立せしめて之より手を退かむとする米國の國狀に鑑みれば怪しむに足らぬ。右政策が支那人の好尚に投じて市場を獲得せむとする金融資本主義に發することは米國論策家の告白する通りである。米國の此の對支政策は、之と立場を異にする我國として極力追隨せむと欲して最後迄追隨する能はず、其結果謂はば九ヶ國條約の顛落を結果するに至つたことは後述の通りである。

日本は當初門戸開放主義を歓迎し、露國の滿鐵及び撫順鐵山經營は此の主義に反すると主張した、然し之は便法であつて我國の傳統的宿命的國策の發現とは見るべからざるものであつた。生命の一つの相たる新陳代謝性は隣地より榮養を攝るやう人間を宿命づける、日露戰役に國命を賭した後、日本が露國の權益を相續するやうになつてから日本の掩大にして喫緊なる特殊權益と極東門戸開放主義とは頗る矛盾の關係に置かれ、相互的に無政府狀態に置かれ、所謂二十一箇條條約の締結後は此の不兩立は一層助長せられた、此の事實を看取した日本政府は相前後して辛くも石井・ランシング協定を締結して右無政府狀態を除去するに努めたが、成功は部分的にして且一時的であつた。即ち九ヶ國條約の締結、石井・ランシング協定の破棄に依つて前記の無政府狀態は尖銳化せられたのである。

凡そ外交政治家的眼孔を以て事物の根幹を直觀し得る者には門戸開放主義と特殊權益との矛盾對立は明白の事實である、機微の論理を弄して兩者の矛盾を蔽ひ、其の一方を他方に依存せしめむと欲するも實際的效果は期すべからず、該矛盾は英國との不合作、感情的對支迎合政策等の屑々たる小細工を以て解消し得べきでない。對支日米合作は破綻

に終るべく宿命づけられて居つたのである。

日米の對支方針の不調和は日米間に於て調整せらるべき問題である。之れ吾人が倫敦會議の前夜「直接軍備制限と政策」なる一文に於て滿蒙問題に關し意義ある安全保障を創設するの必要を提唱した所以である。日米兩國國民は數十年數百年數千年後に萬一戰ふか、夫れとも右安全保障を條約上將又慣行上創設するか、必ずや其の一方を選ばねばならぬことを私は豫言する。軍縮は無意義に近い、不戰條約は無意義に近い、九ヶ國條約は無意義に近い、有意義な平和の支柱は現勢より論ずれば右の地方的安全保障あるのみである。兎に角今まで日米對支協同戰線は存在しなかつたのである。

英國は米國と同様支那に於て最惠國待遇を以て満足したる時代もある、然し香港、九龍、威海衛、上海、廣東、天津、漢口、其他の租借地及び租界を獲得し、揚子江流域に經濟的に蟠居しては、自ら米國と異りて特權の維持伸張に傾くは必至の勢であつて此の一面に於て日英同盟の誼を溫め、支那に於て協力するの可能性がある、英國が南京事件の際我國に協力を求め、日本が其の後英國に向つて同様の打診を試みたのは該可能性が現實に存在するの證左である。然るに他の一面に於て華盛頓會議に於ける日英同盟破棄、賣藥程の效目すらなき四國協約の締結以來、英米の接近は余輩の目には顯著である。余は嘗て世界大戰の最大の結果は三大帝國の覆滅にあらずしてアングロサクソン(英、米)霸權の確立なりと斷定したことがあるが、此の英米協力はマクドナルド、フーパー二氏の「英米不戰」てふ經世家的雄圖及び爾後の倫敦條約に依り一層強化せられた。最近英佛等の新聞紙中に、該協定及び條約並びに滿蒙事變、上海

事件に關する英米の協力に鑑みれば、文書こそなければ、英米諒解は現實の實在なりと論ずるものあるは余輩の主張を裏書するものである。夫は兎に角、英國は日、米の中間にありて稍々米に傾くと認め得べく、労働黨の無氣力と國際主義、在支英國民の特權把持の要望等との間に彷徨しつゝあるのであつて、日、英、米三國の對支共同戦線は曾ても現在も殆んど空想に屬すると云ふべきである。

丙 國際主義の進展

第三に不平等條約の存続を外部より脅威するの原因としては國際主義の進展を擧ぐべきである。而して世界大戰後此の主義は聯盟規約、不戰條約、九國條約となつて發現して居る。尤も労働者は祖國を有せずとか資本は國籍を有せずとか云ふ余輩の所謂階級的國際主義を除き、四海同胞主義コスモポリタン・ナショナルイズム的民族主義—六十有餘の民族に普遍的に妥當するやう一民族一國家主義を適用せむとするもの—を裏返した余輩の所謂「純正又は超越的國際主義」は今日尙ほ空想に過ぎないのであつて、茲に云ふ國際主義は卑俗な國際主義的民族主義—國際主義の法衣を纏ふた民族主義の意—を意味するに過ぎぬことを斷つて置く。

イ 聯盟規約 聯盟規約は理想的平和主義、余輩の所謂、超越的國際主義の著しく中和變容せられて出現したものである。一八九九年以來軍縮に反對した獨逸が顛落した後、飽和國にして徵兵制度を布き得ず、逃亡兵に苦しめる英、米の平和運動、佛國の安全保障の要求等が織込まれて出来上つた國際主義的民族主義の所産である。而して米國はモンロー主義は聯盟規約と兩立すとの條項を規約第二十一條として挿入し得たるに拘らず、人種は不平等にし

て移民問題は國內問題なりとの條項を規約第十五條中に挿入し得たるに拘らず、ロツチヤランシングの民族主義はウィルソンの國際主義を克服し、米國は結局聯盟に加入しなかつた。日本は暗中摸索、人種平等案が一層大なる國際政治問題の中核—世界的門戶開放主義又は世界的水平運動又は四海同胞主義—の部分問題たることを覺らずに之を提出して破れたにも拘はらず、聯盟に加入して忠實、几帳面に協力した。規約第二十一條に掲ぐるモンロー主義は例示であつて、石井・ランシング協定も同條に含まるゝと解せられ、従つて我が滿蒙の權益は規約との關係上保留されて居た、支那は同條を改正してモンロー主義文を「シングル、アオト」しようとした。日本は力爭して支那の提案を却けた。而して華府會議後石井・ランシング協定は雲散霧消した。余は外交の聖諦第一義は主觀々念の客觀々念化に在り、內在的需要の國際的當爲化にありと主張するものである。若し英國の掣ひ、米國の鼻息を窺ふことに多少の意義があるとすれば、日本としては米國が止めを刺した聯盟から脱退した方が論理的ではなかつたらうか、又滿蒙に於ける特殊權益又は石井・ランシング協定と名乗を掲げて規約第二十一條中に保留をなすべきではなかつたらうか。

夫は兎に角、聯盟規約は當面すべき日本の死活問題に如何なる影響を與ふるものであるか。聯盟は平和の機關たるが故に本質に於て現状維持に墮する。従つて規約第十條及び紛争の平和的處理は聯盟機構の重心である。然らば日本が特殊權益の充實に何等の關心を有せず、其の未完成なる現状に満足し、五、六十年後右特殊權益の期限到來の節は潔く之を吐き出すの決意ある場合に限り、規約に加入して特權伸長又は特權永續の旗幟の前に鐵の扉を立てることに協力してもよい筈である。聯盟規約は特權の不伸長及び一定期限に於ける消滅を約束するものであつて、規約第十九條

のレプス・シツク・スタンテプスの原則と合作して我國特權の地位を彌が上にも不安定ならしむるものである。

勿論國際聯盟はウィルソンが規約第十條は道德上の義務を課するに過ぎずと上院議員に説明して以來、五、六の點に於て薄弱となり、事件毎に其の本質を曝露し、今や League of Nations より調停機關たる Association of Nations に顛落したけれども、兎に角、解釋上ルクサンブルク等の微小國すら滿蒙問題に干涉し得るに至り、我が死活問題は形式上聯盟の調査委員に依つて裁かれむとしてゐる。日本は聯盟に忠勤を盡したるが故に支持せられたりや、十三對一を如何、支那は分擔金すら納付せざりしが故に救はれざりしや、理事會や總會の連續開催を如何、特に米國が啐啄の機を捉へて聯盟を指導しつゝあるは奇怪事にあらずして何ぞ。觀じ來れば聯盟規約が我國の傳統的國策に、時に尺害ありとするも寸益なきは略明瞭なりと云ふべきである。此の意義に於て聯盟規約も亦不平等條約の存立を脅威するものである、疑ふ者は乞ふ、支那が規約第十九條の適用を要望して止まざるの事實に徴せよ。

ロ 不戰條約 義務を負ふ聯盟規約は、自己の道德的優越を過信する米國に妥當しない、同一の國際主義には基調を置くが、義務を負ふことなき不戰條約は内政上も外政上も米國に妥當する。「國策の具たる戰爭」を排除して「國策の具たる條約」を掲ぐるは何等の矛盾であるか。不戰條約御批准の前後我國朝野は「人民の名に於て」なる字句に關し置々たる論難攻撃の火の手を擧げた。然し斯る字句の米國に妥當して我國に妥當せざることは議論の餘地はない、検討すべき問題は斯る條約が日本の需要に應ずるか否かの實質問題である。同じ帝國主義でも飽和國と未成年期の帝國主義國とは著しく相違せる立場に在るのであつて、米國はメキシコや中米に於ける特權擁護の爲め嘗て強

取した「法律上の力」に據り得るけれども、日本は我が特權擁護の爲め「物理力」に據らねばならないことになる可能性が多い。何故と云へば右特權が未完成の状態にあるからである。而も米國は明瞭にモンロー主義を留保せるに反し我國は遂に明確なる留保を爲さず、解釋上同一の結果となると云ふ説明に満足した。斯くの如き條約の存在は一面可能性ある我國の實力の發動を阻碍し、他面支那の革命外交を容易ならしめ、輕日、侮日思想を煽動し、我が權益を蹂躪せしめ、結局に於て不平等條約の存在を危殆ならしむるに過ぎない。恐らく不戰條約締結の効果は戰爭と云ふ名を避けて「自衛權の發動に依る戰爭状態」と云ふ名の下に戰爭を繼續せしむるに過ぎない。夫は恰も絶對安全保障と云ふ理想的解決案に依らざる軍縮條約が概して量的軍備競争を質的軍備競争に轉化せしむるに過ぎないと同一である。

ハ 九ヶ國條約 門戶開放主義が大體通商の衡平待遇を意味するに過ぎないことは米國々務卿ヘイの公文書中に看取せられ、門戶開放主義は特殊權益の低位に在つた、日露戰爭後には此の兩者は不用意の内に略平等の關係に立ち、石井・ランシング協定も兩者間の無政府状態を全部救済して居らないことは前述の如くである。

然るに我國は除外せむと欲した極東問題を華盛頓會議の議題に供するを餘儀なくせられ、門戶閉鎖主義者の極東門戶開放主義に格別の抵抗をなさずして降伏し、ルート決議を経て九ヶ國條約を結び、主權、獨立、領土及び行政の不可侵並びに特權を獲得せざることを約束した。然し此の約束は全然虚偽であつて、嚴格なる意味に於ては右約束の内容をなす事項は一つとして支那に存在しない。例へば四國、九州が日本の領土たると同一の意味に於ていかでか南滿洲が支那の領土であり得るか。最近帝國政府の公表文は九ヶ國條約の右約束が擬制に過ぎないと云ふことを聲明して右の事

實を認め、而して右の事實は今始まつたことではなく、民國成立以來繼續的に存在した事實である。けれども此條約の成立した結果、日本の特殊權益は動搖せざるを得ない。條約の明文上何處に特殊權益の留保があるか。外交上の最少限度の智識を以てするも右の留保又は石井・ランシング協定の内容と云ふものは九國條約に織込まるべきものであつたと思はるゝのに、何等喫緊の措置は執られて居ない。加之九國條約が出来たと云ふ理由で石井・ランシング協定は廢止せられた。茲に於て華盛頓會議の議事録中に既得權留保の發言はあるが、九國條約の明文上特殊權益と云ふものは雲散霧消して存立の餘地なきものとなり、早晚清算せらるべきものとなつた。ウィロービー等の所説は明瞭に此の我輩の判斷を裏書して居る。従つて門戶開放主義と特殊權益とは今や其の順位を顛倒し、後者が前者に隸屬し、下位に立つやうになつた。

以上の如き意義を有する九國條約の成立と同時に、滿蒙に於ける借款優先權、顧問警官等の應聘權、廿一箇條の希望條項の拋棄は約束せられ、南滿及び東部内蒙古が帝國の勢力範圍たる事實は抹殺せられ、日本も爾餘の諸國も理論上は滿蒙に於て同一の立場に立つに至つた。若し余輩が卷頭に述べた如く、世界大戰後に於ても我國に於て依然として大陸發展の傳統的政策が維持せられたと解するのが至當であるならば、此の九國條約は驚くべき退轉であると云はねばならぬ。形式上平等であつて實質上斯の様に不平等な條約が世界中何處にあり得るか。此の九國條約を實質上平等のものとなすには墨西哥及び中米諸國に門戶開放主義を布き、米國が滿蒙に干渉すると略同一程度に於て我國も右諸地方に干渉しなければならぬ。九國條約の如きは内容上戰敗國が城下の盟を爲したるに近似せるものである。海軍

側の現有勢力の計算に依れば七割に近き現在海軍力を六割で我慢する爲めに斯くの如き讓歩を爲したりと解することは困難であり、九國條約と海軍條約と關係なきことの適確なる事實たることは曩に帝國政府聲明の通りである。佛國政府は戰後の疲弊及び負債國たるの地位を以てして海軍條約の一部たる潜水艦に關する協定の批准を拒絶した。而して日本は比類なき實質上の不平等條約を唯々諾々として批准した。無識空腸を暴露せるものと見るは僻目であるか。余は斷言する、滿洲事變は頗る多く華盛頓會議に於て胚胎せられたるものなることを。

今次の滿洲事變に依り國策の復興し來るや、米國政府は不戰條約と九國條約、特に後者を楯として我國の所爲を攻撃し、昭和六年九月十八日以降の事態の合法性を認めずと主張し、米國新聞は日本の所爲が正義に合するや否やの問題ではない、唯日本が條約に違反するを攻むるのみと云つて居るのである。而して我國政府は一方、九國條約違反事實の存在を否認すると同時に、他方其の風向試験用輕氣球は問はず語りの間に於て九國條約の改訂を要望して米國の反對に會して居る。世界に條約改訂を要求する國が二つある。夫は獨逸と支那である、爾餘の國は條約の尊重をのみ要望して居る。茲に唯日本一國ありて條約の尊重と條約の改訂との二者を合せて要求して居る、何たる自家撞着ぞ、國策に違算を生じ、今日に至るも尙匡救し得ざる程の國政の龜裂を生じたるは決して偶然でなく、全然豫知し得たる事項である。

斯くの如き巨大なる矛盾撞着を除去する爲めに我々は余輩の今執りつゝある立場の如くに「國策の復興」を語るべきではなく、巴里平和會議以降昭和六年九月十八日迄我が政府（過去十五年間續きし政府なければ責任の歸屬は不明である）

は何等明白に聲明する所はないが、大陸發展策の拋棄、滿蒙特殊權益の拋棄を決心して居たのである、即ち國際和平主義の氣運を利用して余の所謂傳統的國策を轉換し、國民を特殊權益拋棄てふ既成事實の前に立たしめむとしたのであるとの見解を採用することも出来る様である。余輩は生命の「増大の法則」^{ロッセオの法則}に考へ、大和民族の生命躍進は「國策轉換不可能」の原則を指示して居ると確信するのであるが、マルキシスト等の考ふる如く、特殊權益を棄て、自ら「國際帝國主義」の圈外に立ち、國際的水平運動に出發すべしとの主張を爲す餘地は確に存在する、然し若し我國の指導者が此の主張を肚裡に藏して居つたと假定するならば、彼等は何故に彼等のリーダーシップを失ひ、外國政府より自衛權の範圍を超えたと批評せられた時に軍部を抑制し、若くは九月十八日余の所謂「國策の復興」が始まつた時に決然として責任を明かにしなかつたか、聊か諒解に苦しまざるを得ない。

過去約二十年間に存立した日本の超然内閣將又政黨内閣に於て舊朝鮮の事大黨などの様に外力を曳いて國內紛争に於ける反對派例へば軍部等を制壓せむと企圖したる明證は之を認め得ない。國策の遺失は既に日露戦争の翌日—或る發育段階に達した民族主義の危険期—超然内閣に依りて爲されて居るので、藩閥と政黨との争及び後者の勝利は右遺失の傾向を強めたかも知れぬが、其の直接の原因とは認められない様に自分は觀察する。大正十一年の服役期間一年四ヶ月經費節約額四千萬圓の衆議院軍縮勸告案は提案者の説明に依るも國防の經濟化を標語とし、爾後の日本の任意的軍縮も寧ろ軍備の動力化を目的として居るのであつて、餘り日本政府が半植民地たる附庸國政府がやる様に外力を曳いて軍閥や藩閥と其の帝國主義とを抑へ様と企圖したとは想像だにするを欲しないのである。

觀じれば余輩が「國策の復興」を云ふのは、九月十八日以降政府が存続し、國論が略歸趨を得たのに鑑み、客觀的事實に一致する。然らば曩日の軍部大臣が他の國務大臣と等しく聯盟規約、不戰條約の無保留無改竄御批准奏請に左袒したと云ふことも稍不可解な出來事と云はねばならぬ。

二 軍縮諸條約 余輩は過去三、四十年間の軍縮運動を揣摩して、軍縮條約は必然的に保守主義に轉向する飽和國を領導者とする似而非國際主義の產物なりと斷じ、現存の軍縮條約の意義は左迄大ならず、安全保障なき軍縮會議に臨むに當りては只管比率の有利なるを期すべく、倫敦會議に於ける政府特に海軍當局側の七割の要求は全民族的に之を支持すべしと主張したものである。然るに世の中には輕薄な雷同者が多いのであつて、軍縮が時代の風潮となれば何國が何の爲に左様な風を吹かすかも知らずに、一部の論策家や政治家は軍閥を呪咀するを以て優等なる智能の標徴なるかに解し、特に財政經濟に重きを置く人々は「日米は戦はず、戦はず日本必ず敗れむ、三割でも宜敷からずや」と説いたものである。其の無識空腸は昨日迄マルクスの唯物辨證法を昇ぎ、階級闘争を力説して居たインテリゲンチヤの一部が今日卒然としてフシズムを説き、ムソソニーを禮讚して居るに似て居る。實に困つた風潮と云ふべきである。余輩は進歩的國粹主義者にして訓練を尊ぶフシズムに勿論賛成であり、真正固有のフシズムは寧ろ日本が本家本元たるを信ずると同時に、マルクス以前の古典的社會主義、基督教的社會主義、孟子の王道社會主義には勿論賛成で、希臘の物活論以來唯物論は尠くも五十パーセントの眞理を持つと考へて居る者である。序でに内政問題に就て云へば共產露國が或る程度の私有財産を認め、國家社會主義に復歸し、英國の勞働黨の社會主義が進み過ぎて

マクドナルドが退轉を餘儀なくせられたと云ふ二個の経験の内に健全な中道——自由と統制との間の——を發見し得ると思ふものである。餘談は暫く措き余輩の潜心省察した後の確信に従へば、生命線を守るには七割の海軍力で充分である、(責任ある海軍當局は七割を要すと云ひ 六割では不足だと云ふ) 感情的理想主義金融資本主義より出づる門戸開放主義の御題目を守るには十割の海軍力を以てするも猶危惧を感じる。若し我國の海軍力が三割であつたならば夙に我國の特殊權益は雲散霧消して居るであらう。夫は兎に角華盛頓海軍條約以下の諸條約、及び國內軍縮風潮及び其の軍人精神に及ぼす影響は、支那人の侮日心に非常の拍車を加へて居ることは間もなく述べる通りである。

第七 不平等條約の脆弱性と同條約の外部的脅威との合作

以上述べ來りたる處を概括すれば、巴里平和會議以降我國の外交問題に關し爲されたことは一切殆んど適確なる目標を缺いて居る、余輩は外交の聖諦第一義は主觀々念の客觀々念化に在り、內在的需要の國際的當爲化に在りと信するものであるが、規約、不戰條約、軍縮條約、九ヶ國條約悉く根本に於ては外國の提案を受動的に受諾したものであり、其の結果聯盟を通じて微小國も亦滿蒙問題の解決案を提示し、十三對一の悲劇を演じ、何時果つるとも見えず、九ヶ國條約、不戰條約を楯に米國の迫撃は誠に急である。外交が果して斯くの如きものなれば、誰人も寧ろ其の存在の意義を疑はずには居られまい。

一方不平等條約に本質的脆弱性あり、他方外部より支那民族主義、對支共同戰線の破壊、國際主義の進展 (規約

不戰條約、九ヶ國條約、軍縮條約の締結) 等の不平等條約を脅威するあり、之等の合作に依りて不平等條約の動搖は必至の勢となつた。而して此の事實を國際問題に明敏なる支那政治家が看過する筈はない。既に巴里會議に七次要求、華盛頓會議に十大要求を提起した支那の識者は以夷征夷策の鋒銜を現はし、過去十年間特に濟南事件後の支那に於ける著述は、一樣に日米開戰説を高調し、日本の國內に階級鬭争尖锐化に因る共產革命の必至を説き、日本財政經濟の行詰りを力説して、日本は六ヶ月乃至三ヶ年を超ゆる持久戰に堪えずと説き、日本軍人精神の消磨せることを説き、其實戰練磨の支那兵に及ばざることを力説し、特殊權益を守らむが爲に、日本若し實力に訴へなば日本は忽ち規約、不戰條約、九ヶ國條約に違反し、米國、聯盟の干涉を招き孤立に陥るべきを高調し、露國の尠くも中立維持に出づべきを豫斷し、排日思想の普及に伴ひ輕日侮日思想は其の極に達し、中村大尉事件、萬寶山事件に至る迄數百件の日支交渉懸案は山積して解決するもの尠く、龔德柏の征倭論の如きは日本の以上の弱點に鑑み斷乎日本を膺懲すべしと説くに至つた。日本が戰はずして滿蒙より退き、支那人の望む儘に朝鮮、臺灣をも棄て、島國に盤居せざる限り寺内内閣以降の日支親善、共存共榮、協調主義と云ふが如き不徹底の方策が何等意義ある効果を齎らさずして、今次の實力發動滿蒙事變となつたのは、實に絶對不可避の出來事であつた。戰爭の宣言や戰鬪の有無に依て戰爭ありや否やを論ずるは規範科學としての國際法學上の論である。社會學、政治學より云へば反對の方向に動く二個以上の民族意思の存在が既に戰爭である。發砲とか宣戰とか云ふ事實は慢性的戰爭を急性的戰爭となす徴候に過ぎず。政治家は豫見をなし、生命躍進を安全の溝渠に導かねばならぬ。夫れが出來ぬならば政治家ではないのである。豫言者たら

ざる政治家がいかに輔弼の重責を果たすことが出来やうぞ。

第八 助成的原因

孫文の容共政策以降、支那人間に共產主義思想が瀰漫し、支那の論策家が滿洲事變を以て日本第三期資本主義が斷末魔の苦悶として内争を國際戦争に轉ぜむとするものと云ふ様に説くのは怪しむに足らぬ。然るに日本に於て一部の學者將又左傾論者の如きは該事變を以て軍閥が軍縮運動の壓迫より免がれむが爲めに故意に作爲したるものと看做さむとして居る。此の議論を肯定せむが爲めには今次の事變の原因として余輩が今迄縷々述べ來つた顯著な事實を悉く否定しなければならぬ、而して軍人は純粹の職業意識を以てマルキシストが無産階級の爲に説く様に、自分の利益に専念して居ると斷定しなければならぬ、然らば他面軍人が今度の様な事件を起して一命を國家に捧げるのは愚の骨頂と云ふべきで、日本の軍人精神は到底マルキシズムで説明出来なくなる。余は軍人が其の職責上夢想的平和論者の軍縮呼ばはりや統帥權縮少呼ばはりを苦々しく思つたことを疑はぬけれども、前述のマルキシストの考へは、彼等の先入主たるイデオロギーを牽強附會するものであつて、假に一步を譲つて、軍人精神にマルキシストが貸す様な意識の痕跡があつたとしても、之は決して事變の究極的要素と看做すべきでないことを確信する。

嘗て滿洲に南下を策し、李鴻章・ロバノフ條約を結び、日露戦争を起したる露國が共產革命後新經濟政策に依り國家社會主義に復歸し、對外不干涉主義を経て孤立主義に復歸した後、重工業特に兵器製造—飛行機、毒瓦斯を含む—

に銳意するに至れるは注目すべきで、露國の頭部が歐洲に在り、國內に自由なく革命運動の萌芽あり等の理由を以て全然安堵することは出来ぬ、爲めに露國を萬一の可能的假裝敵國位に見る人もある様である。然し今回の事件を露國に對して機先を制せむが爲に日本が計畫的にやつた様に説く人ありとせば夫は日本が過去數年間隱忍自重の後、今度の宿命的事件に直面したことを無視するものと云ふべきではなからうか。

第九 滿洲事變を契機とする國策の復興と列強

余輩は國策復興の見地より滿蒙と滿蒙以外とを峻別すべきことを先づ高調せむと欲する。従つて本論に於て上海事件に論及することを寧ろ避ける、帝國軍隊の疾風迅雷の上海引揚は政府の方針を物語るに充分であつて、余は帝國が平津に事を構へるを避けるべきを信じた、蓋し一般權益と特殊權益とを峻別するの困難は勿論であるが、支那本部と滿蒙とを一體とするときは非常なる混雜を來し、時として彼の二十一箇條問題の如き蹉跌を招徠すべきを虞るゝが故である。借て宿命に従つて昭和六年九月十八日の事變は勃發した、殘されて居たのは唯時期の問題であるが意外に早く勃發した、而して軍部の成功は疾風迅雷的であつた。遺忘せられて居つた國策は「斷じて行へば鬼神も避く」との勇猛心の靈感に依て蘇生した。

此の蘇生したる國策が頑健に成長し、吾人の所謂「國策の復興」が金剛不退轉の盤石の基礎の上に置かれむが爲めには前述の軍部の物理力に依る成功が、外交上の成功即ち既成事實を合法化し之を國際的當爲化することに依り響應

互助せられなければならぬ、然らば帝國の外交機關は此の任務を果し得たか、余曰く未だし。

遺棄せられた我が傳統的國策が飽和國弱小國に主として妥當する國際主義否國際的民族主義の反映たる聯盟規約、不戰條約、九國條約、軍縮條約等の下に埋没せられて仕舞つたことは余の縷述した通りである。故に國策復興に對する外交上の礎地は何等用意せられて居らなかつた。支那人の待望した如く、我が特殊權益擁護の爲めにする實力發動は國際聯盟、米國等より前記諸條約の違反として手痛く攻撃せられ、我國は文字通り四面楚歌の裡に陥つた。此の時帝國政府は殆んど百數十度に近き方向轉換を爲した、而して國際主義的容諾に縛せられて聊か雪隠詰に陥つた状態の下に於て驚嘆すべき智略と膽勇とを發揮し、處女は脱兎の如く變つて賞讃すべき健闘を續けた。唯夫れ雪隠詰の立廻りである、望ましき限り効果的でなかつたのは止むを得ない。誰か我が外交機關に人才なしと云ふ、最負目かも知れぬが該機關中には比較的多数の俊才が居る、光は闇きに照つて居たのだ、唯「遺失せられた國策」と云ふ闇さが之を覺らざりしのみ。以下大體豫想せられた外交戰の跡を迅速に弔つて結論に導進しよう。

米國は自愛の擴張たる愛他的對支政策即ち門戶開放主義に把住し、華盛頓會議に於て強化せられたる對支自由主義的政策を以て極東問題清算所を氣取り、我國を制壓し、一九二七年對支自由主義宣言を以て關稅會議連開憲憑、條約改訂の爲めにする商議の應諾、治外法權撤廢の考慮等を約束し、對支感情的理想主義を以て列國を領導するの概があつた。従つて滿洲事變の勃發するや、米國は檢察官の眼光を以て我國の舉措を監視し、兵變の齊々哈爾、錦州に波及するや、敢然「紙の彈丸」を以て反復我國の不戰條約及び九國條約違反を詰り、間接に支那の抵抗を獎勵し、自由主

義者、平和團體、婦人團體、宗教團體等の自國の發意に依て出來た條約の尊重を要望する輿論に動かされ、二十一箇條の交渉以來の先例に従ひ滿蒙の新なる現狀將又新條約等の合法性を否認すとの斷案を下し所謂「スチムソン」主義を宣明して紙の抗議を中止した。之は初めより略豫知されたことであつた。滿洲事變以後の日米外交文書は、兩國の用ふる不戰條約尊重、九國條約尊重、門戶開放主義の尊重、自衛權等の言葉は同一でも日、米兩國が頗る異なる意味を之に賦與して居ることを立證して居る。條約の規律する事項に付てさへ國際無政府状態は實に此の程度に及んで居るのである。

米國の極東政策に關し吾人が知らむと欲した一事は、米國海軍當局が門戶開放主義の維持には攻撃的海軍力を要すと説き、米國大海軍の存在理由が門戶開放主義の擁護に在ることを説けるに鑑み、我國の特殊權益擁護の措置が如何なる程度に達した時、米國は果して實力に訴へるやと云ふ問題であつた、此の問題は米國政治家すら事前に答へ得ざる問題で、勿論外國人に揣摩を許す問題でなかつた。然しながら(イ)ビュエル、ウィリアムス兩氏等の認むるが如く華盛頓海軍條約特に太平洋諸島防備の現狀維持に關する約束は、米國が極東問題に不干渉の約束を爲したるものと解し得るの餘地あること、(ロ)倫敦會議以降我國に極東の安定力たる地位を約束したること、(ハ)米國金融資本主義に取り日本は稍々金の卵子を産む家鴨に類すること、(ニ)米國の日本に對する反對干渉は自家の「カリビアン」海政策を困難なる地位に陥らしむること、(ホ)國際聯盟に呼掛け其の協力を求むるは薄弱なる決意を示すものたること、(ヘ)對獨宣戰の當時に比し米國輿論の相當の激化に拘はらず米國外交文書が尙餘裕を存すること、(ト)米國は「フィ

リッピン」より退却し極東に覺醒し來る民族主義の前に「フイリッピン」てふ目星しき攻撃目標を置かざらむとする國柄たること、(チ)日本は米國に挑戦するの意思を毫末も有せざること等に鑑み、米國が容易に劍を抜いて起つことを我々は信ぜなかつた。問題の中核は人間が其本質上門戸開放主義と云ふ様な南無阿彌陀佛に等しい御題目の爲めに死線に突入し得るか否かの問題である、若し萬一日本の海軍力が三割であつたら或は吾人は干渉せられ、撃破せられて居たかも知れぬ、六割七割の問題の重要性は此の見地に於てのみ適確に把握せられる。結局最後の腹を決める瞬間に米國の輿論のみならず米國政府部内の議論も分裂し狼狽した様に見える。米國內に於て吾人は世界の主人公でない、米國の青年の血を滿蒙の爲めに流すのは愚の骨頂だ、經濟封鎖は自國をも傷け戦争に導くものであるとの論は感情的理想主義の上手を占めた、米國の仕事にあらざること口出するが如き政策を止めよ。日本の支那征服は米國の通商上の利益に反するも、日本が米國民に對し熱慮的且繼續的迫害を加へざる限り米國としては紛争に捲込まるべきでない、在支米國の權益擁護、東洋に於ける米國の國威維持、神聖なる條約擁護を名として日米戦争を主張する者あるも之は思ひもよらないことである。斯様な新聞紙の理性の聲は感情的理想主義の焦燥を大に鎮靜した様である。結局米國は日米戦争に引込まるゝことを避けつゝ、智的手段で米國の生命と利益とを擁護せむと努め、英、佛、伊、聯盟と協力し、外交戦の限度内に於て不戦條約の尊重を求むる様努力し、日本の動かさざるや一九一六年二十一條の時代に立返り、滿蒙の現状及び今後の條約の合法性を認めずとの立場を固執する點に定着した。

英國は世界政策に於て廣く米國と協力し之に追隨する、二月十日の「エキスプレス」は條約又は文書としての英米

同盟なしと雖も極東に於ける英米の共同動作、壽府に於て發表せられたる英米兩國の軍縮會議に關する提案の合致は右同盟の存在を立證すと論じた。此の英國の米國追隨は滿蒙問題にも儘に片鱗を示して居る。加ふるに労働黨内閣の外政に無氣力なる漢口、九江の租界を失ひ、而も一九二六年及一九二七年の對支提議を以て支那の關稅自主權を承認すること、治外法權を一部の撤廢すること、支那の條約違反を大目に見て強て之を抑制せざること、緊切利益のみに付保留し條約違反行爲あらば抗議するに止むること等を聲明して居る。大英帝國の面目何處にか在ると嘆ぜざるを得ない。されば(イ)英國の米國追隨、(ロ)日本との對支共同戰線拒否、(ハ)長江一帶商權の伸長、(ニ)一般に對支迎合政策、(ホ)英國の國策に役立つ一面を有する國際聯盟の支持利用等は英國の舉措を滿蒙方面に關し日本に不利に傾かしめた。けれども他面之に反し、(イ)在支英人の既得權執着、(ロ)對支日英共同戰線の可能性(南京事件の時英國は日本の協力を求む)、(ハ)國民黨政府の過去及び將來に於ける香港、九龍等諸租界に對する脅威、(ニ)打倒帝國主義運動半植民地民族解放運動に對する恐怖、(ホ)印度等に關する憂慮等は英國の舉措を上海方面に關し寧ろ日本に有利に展開せしめた。英國が上海事件に關し必ずしも米國に追隨せず、聯盟に在りて聯盟の面目を維持せむとし、而も英代表が、聯盟は調停の機關に過ぎずと云ひ、聯盟理事會及び總會の通牒として合法性否認政策を表明するに止めたるは、英國に實力干渉等の意志毫末もなきことを證明するに充分である。

露國は(イ)内政整理の不干渉時代、(ロ)波蘭、洪牙利、土耳其、支那、蒙古に對する干渉又は援助政策、(ハ)新經濟政策、新々經濟政策、五年計畫の採用に依る國家社會主義への轉換を経て、重工業の獎勵、飛行機毒瓦斯の製作等

に鋭意し、嘗てプロレタリアート武装の爲め軍備全廢案を提唱しながらも、陸軍兵力百三十萬人を養ひつゝある。頭部が歐洲に在りとは云へ、東亞進出南下政策の復活に轉するなきを必することは出来ない。従つて稀に邦人論策家中、露國を假裝敵國の一に數へむとする傾向を示す者なきにしもあらず。然れども(イ)共產露國に自由なき事實、(ロ)國內革命の種子なきにしもあざること、(ハ)五年計劃は資本及び労働心の缺乏等の爲め全幅の成功を望み難きこと、(ニ)第三インターナショナルとしては階級對立を認めて民族對立を認めぬ傳統なること、(ホ)聯盟に於て平和政策を高調し軍備全廢又は徹底的縮小案を提出せること、(ヘ)露國の頭部は歐洲に在ること、(ト)日本が支那と露國とを同時に敵にする様な愚舉に出づる筈なきこと等に鑑み、最近露國政府が日本兵の北滿に於ける活動、白系露人の策動、日本勢力の北滿進展等に敏感なるものありとは云へ、露國の方から日支抗争を利用して日本の所爲に干渉する事は期待出来ない。寧ろ白系露人の策動及び日本兵の北滿進出に刺戟せられて、主として自衛の爲め兵力集中を行へるも防禦的にして我國に干渉するの意志にあらざるものと認めらる。但し露、支、米の三國又は其内の何れかの二國間の反日合作の可能性に就ては吾人は如何程嚴重に監視しても其の足らざるを惧るゝのである。

國際聯盟は一九二〇年以來次第に聯盟リイグ・オブ・ナーションより協アシエーション會に顛落した。余は滿蒙事變に關し日本としては六割の注意を米國に、二割を英國に、一割を露國に、一割を聯盟に向けるべきだと思つて居る次第であつて、事變以來帝國外交が聯盟を滿洲事變の清算所の様に思ひ込み、之に全勢力を傾倒して他を顧みるに暇なき如きは余の不満足とする所である。此の聯盟が又米國を頼むのは無氣力の標徴だ。如何にも我國は事態不擴大、撤兵の約束を爲せるに拘はらず十三

對一の憂目を見、滿蒙干渉排除の根本方針に反し遂に聯盟の調査委員を現地に迎へる様になつた。然し日本は他面聯盟に對し多大の讓歩を餘儀なくせしめて居る。即ち匪賊の討伐を認めしむること、軍事占領を其の儘にして置いて外交交渉に入らしめないと云ふ原則を日本の爲に拋棄せしめたことである。

日本が華盛頓會議に於て我が勢力範圍拋棄の聲明をなして後十星霜、聯盟の方から滿蒙の特殊地域たることを認めたるのは一奇と云ふべきで、之も日本國策の乖離を物語るものである。夫で迂餘曲折を経た後聯盟理事會も總會も現狀合法性否認政策と云ふ米國の政策に追隨するに止めた、之が列國干渉の暫定的總決算である。

國策復興てふ宿命の潮は津浪の如くに寄せて來た、其の時期は多分日本に取り最も順なる時の一つであつたらう、大和民族の潑刺たる生命の躍進する處、輕日侮日の魑魅魍魎は四散し、其の順風に惠まれて滿洲國は呱呱の聲を擧げるとに至つた。秩序を産み出す第一事實最少限度の國法は完成したのである。

第十 國策復興の前途

前述の外交上の暫定的總決算を見て、吾人は一見案じるより産むが易いとの諺を思ひ出すものである、然しながら過去六箇月間の出來事は日本程の實力を具備した國が人力にて想像し得る限りの外交國難に逢着したものと云はねばならぬ。

兵を動かすこと尠少なりと雖も時局の重大性は國命を賭した日清、日露兩戰役に優るとも劣らない。吾人の心眼に

映する久遠實成の日東帝國は屋臺骨迄揺らいで居ることを吾人は看取出來る。過去六箇月間の外交は焦眉の急を排除したのみであつて、積極的建設的方向には未だ成就する所極めて尠ない。永久に存続すべき規約、九國條約、不戰條約と云ふ偽善的要素の尠くない國際主義の鐵鎖は吾人に纏ひつき、列強は之を解かむとせぬ。余は歌舞伎座一月狂言で幸四郎の宗任を見た、宗任は亂行飽くなき公卿達に依りて三重に縛せられて梅の木に繋がれて居た。彼は起ち上つた、彼は繫いだ繩を切つて不自由ながら立廻りを開始した。似而非國際主義てふ三本の鐵鎖に縛されて起ち上つた日本と云ふ宗任よ、何處に行く。

「現状の合法性否認」と云ふことは如何なる意味を有するか、有效なる安全保障とか平和組織とか云ふ言葉は結局聯合國家、超國家を探索する運動に過ぎぬ。超國家の出現に依つて國際無政府状態が除去せられぬ以前に於て、契約に該當する條約しか存在しない國際社會に於て、^{レガリティ}合法性と云ふ様な言葉を用ひ得るや否や頗る疑問である。然し列強や聯盟が此の言葉を用ふるが故に一應其の意義を探究して見る。法治國內に於ては物理力に依る生存競争が知的生存競争に變り、合法の權利は「法律上の力」に依りて安全保障されて居る。自分の不動産は自分が占據せずとも、自分の動産は自分が實力で占有せずとも、原則として法力に依り平穩に自分の支配下にある。非合法であるならば實力に依つて占據占有する期間に限り動産不動産を自分の支配下に置くことが出来る。即ち朝鮮、臺灣なれば高枕安臥して居ても尙日本の領土であるけれども、滿洲は我が實力我が物理力の現實に働きかけて居る期間に限り吾人の勢力範圍であり滿洲國である。之は不斷の緊張を必要とする事柄で頗る苦痛と云はねばならぬ。然し現實に吾人は斯くの如き状

況に置かれて居る。尙ほ考へて見れば、世界上の強國は程度の差こそあれ斯くの如き負擔を持たないものは一つもない。又「敵國外患なきものは國常に滅ぶ」との諺を玩味して見るならば、斯かる負擔こそ大和民族を惰眠より覺醒し、光明の前途を望んで邁進せしむるの拍車であるのだ。

滿蒙と云ふ新國家は生れた。吾人は名譽にかけて其の健全なる發達に貢獻しなければならぬ。然し此の嬰兒に對し列國は一部の軟論に拘はらず現状合法性否認政策を以て對抗し、大體法律上の承認を與へる傾向が見えぬ。寧ろ與へないと云ふ決意さへほの見える。支那本部の要人中には對日宣戰を主張し、(イ)日本の軍資缺乏せること、(ロ)英米の加擔を期待し得ること、(ハ)日本は長期の國際戰爭に堪へずして大局上敗るべきことを説き、長期抵抗を敢てせば日本に社會黨、共產黨、朝鮮獨立黨蜂起し、士氣弛緩し、日本は遂に土崩瓦解すべく、機に乗じ、吾人は臺灣琉球の奪回、朝鮮の解放、一切不平等條約の撤廢、賠償金の獲得を期し得べしと説いてゐる。然し吾人の既に述べたる如く客觀的現實は其の儘妥當する真理である、滿洲國は現實の存在である、規約第十九條はレプス、シツク、スタンチプスの原則を認め、法が現實の事實に追隨する様調整せらるべきの主義を認めて居る。列強の一部には滿洲國の不承認が惹起すべき困難を怖れて承認を主張する論者も多少はある。吾輩の見た早川雪洲の第七天國と云ふ芝居で私生兒の主人公シコウは世界大戰に當り佛國の役場に招集される、役人はシコウに向つてお前は法律上生れて居らないお前は存在しないと云ふ、夫れにも拘はらず役人は頑健なるシコウを見て隊伍に編入し、之を戰場に送りて戦功を立てしめる。滿洲國が健全に成長して行くならば何時か此のシコウの様に、國際社會に依て認めらるゝに至ることを誰が否認

し得よう。

然し夫は期待であつて未だ現實ではない、差當り日本と滿洲國の進む前途には合法性不承認と云ふ鐵の扉が降されて居る、政治法律的眼孔を以て近く見れば見る程此の扉には抜け穴がない、吾人は此の扉の開かれる以前に於ては、地球人類の絶滅する時迄も滿蒙の現状を實力に依つて支持して行かねばならぬ。

第十一 國民の覺悟

クーデンホーフ、カレルチーの如き海外の友人が日本の爲めに滿蒙に關し、モンロー主義を認めよと叫ぶ聲援の下に、吾人は門戸開放主義、内外人安住の地、不戰條約、九ヶ國條約と云ふ様な論争の種子となるべき國際主義的の「テーズ」を克服し、特に九ヶ國條約に關して滿蒙を其の適用より除外するか、門戸開放の意義を通商上の均等待遇の意味に限定するか、兎に角特殊權益と門戸開放との間の無政府状態を却却するか、何れかの措置を講じ、遺失された國策の破片たる石井・ランシング協定、埴原宣言、既得權尊重の約束、滿蒙特殊地位を認めた聯盟の決議等拾ひ集め、滿蒙を帝國の政治上の緊切利益範圍、國防上の賭戰地域、經濟上の最少限生活保障地域にして、我國の戦争網^{ウオリアンネット}の中核を形成するものと聲明し、此の國策を支持する客觀的軍備が外交國防即ち現状の合法化と云ふことに依りて裏書せらるゝ迄、此の國策を翳して一路勇往邁進する外はない。余は今迄専ら國策の前驅たる外交に付き論じたが、産業其他の方面に於てもユートピアを去り現實を直視し、經驗的法則に従つて建設をなす必要がある。モンゼンの銃劍に依り

て得たるものは銃劍に依りて失はれ、鋤鋤に依りて得たるものは永久に失はるゝことなしとの句は馬上天下を取るも民族の土着的發展なければ功業は一朝にして挫折するとの理を教へたに過ぎない。然らば事の成否は特に移民問題に繋るのであつて、時局の建設的方面は必死の戰鬪と同一の犠牲と大才の雄略とを必要とする。日本の人口増加數年百萬に近いのに十年を期して五十萬人を植付けむとするが如きは百パーセントの成功を収めても尙ほ失敗に等しい様な卑屈な案ではなからうかと余輩は慮れる。余が「國策轉換不可能の原則」は今迄理論であつた、滿蒙生命線の主張も今迄は理論であつた、然るに今日此の兩理論は既に現實の事實となつた、若し吾人にして現状合法性否認政策と云ふ鐵扉を前にして退かむか、朝鮮、臺灣すら之を保つことが困難となつて來る虞がある、政治は勢だ、滿蒙なくしては日本國內の既に徵候ある不調和は必ずや社會、經濟生活に龜裂を生ぜしめ、經濟的變革其の他百般の混亂は相繼いで起り、世界的勢力として日東帝國は―よしや大和民族は滅びずとするも―茲に終焉を告ぐるであらう。

四海同胞主義的民族主義、純正國際主義に則つて、一切の飽和國、帝國主義國が自國と其の富とを全人類に捧げる迄滿蒙は是非共吾人民族生活の保障でなければならぬ。

吾人は歴史上の如何なる時代よりも死生の線上に彷徨して居る、國命に迫る危険は眞に致命的だ、身を捨てゝこそ浮ぶ瀬も見附かる、大和民族たるものは勤勞者と雖も祖國を有しブルジョアと雖も國籍を有する、同胞よ腕を組みて前進せよ！ 護國の鬼と消えた將士の心を心として。(昭和七年四月)

第二章 滿蒙問題に就て

肅啓 ノヴィコフは生命を營養攝取、老廢物排泄の旋風に譬へ居り、時に民族的生命の外延たる邊疆に葛藤の起るは人爲の過失よりも寧ろ生命物理学の原則かとも被考候。千餘人の生命と二、三億弗とを支拂ひて六州を合併せし例あるに對比し、自衛に出發し、最大の勞費を拂ひて最少の効果を收めたる日本の所謂特殊權益は心理的に貴重のものたり得べく、稀に滿蒙拋棄論を聞くも諸原料等他に依存する所多き日本の決意は曩日の帝國首相及び外相の演説に徴するも随分明瞭と被存候。然らば何卒東京も大連も惰眠せず、一切の現存國際容諾を遵守し、且目的的に變容し、正當權益を損傷せぬ心掛肝要と存候。此際小生の特に指摘したきは政治的紐帶の背景ありてすら尙ほ經濟的透徹は容易の業にあらざること、近世經濟學理論の重點たる勞働主義從つて民生主義は小作人借地人の利益を不在地主の夫の上に置くこと等に有之候。以上の日本民族の内在的當爲が世界大戰後に於ける支那の抱負と扞格し、平穩の滿洲がオーシスとなりて其の支那本部化行はれ、四五の民族の糧秣採集場フユツテルブラツツに於て紆紛の頻屢なるありて、同胞明鏡止水の心境を搖るものあるは故なきにあらず、貴誌（雜誌支那昭和六年八月號）の本件關心も此の片鱗と拜察致候。想ふに滿蒙問題其の他類似問題の純正國際主義的有機的解消は悠久の未來に於て或は可能なる世界の聯邦組織化、生存權問題（人口、原料、食料、市場問題）の超國家的社會政策の對象化の内に發見せらるべく、然らざる限り、現状と實力關係の平衡を失ひたる場合に於ける痙攣的解決は、超邁の外交手腕を以てするも常に倫理的なるを得ずして、諸國際平和機關及

國際輿論の干涉を殆んど餘所に、國勢流轉の後を追ふべきやに杞憂せられ、一部人士の緩衝國建設論將又吾人の退讓を出發點とする國際水平運動論の如き新要素の加はらざる限り實行力乏しきやに被存候。夫は兎に角這般の嚴肅なる本質的事態の十全の認識の上に立つ超政黨的大政策の創建と之と調和する當面善處とを要望提唱して止まず候。敬具

（昭和六年八月）

第三章 滿蒙に於ける生命の躍進

人間が天上より降下せる天使なりや。將又地上に湧出でたる生物なりやは開闢以來の、然しながら完全には未解決の問題である。余は今之が解決を企てる程大膽になることを見合せるであらう。處女出生の如き奇蹟は信ぜられないとしても、基督は彼自身の心に描いた天父に近く、佛陀は有餘涅槃の内に安住して居た。然し彼等は非常の例外であつて、菩薩、沙門、十二使徒、オーガスチン、トーマス、アキーナスたることは既に難く、一般衆生は有漏の穢身に百八煩惱を充せる凡愚である。矛盾の様に見えるけれども卑近な例として感化力を有した希望社長や聖勞院主が活力に富める生物人（文化人に對す）であつたことは暗示を我々に與へる。

國家は最高の道徳なりとは國內的に云はるべきことで、他團體に對立する國家の道徳が高くないと云ふことは既に諺となつて居る。單に一例を挙げれば一七八九年にフランクリンはアレキサンダー・スモールに次の如く云ひ送つて居る。「余輩の信する所に依れば、諸國政府の正直の程度は大體同一程度であつて、一國政府は自己の誠實さが隣國政府の夫に優ることを尤もらしく誇稱し得べきでない」と。「明白なる運命」とか、「正しからうが正しくなからうが我國」とか、甚しきに至りては「神我等と共に在り」と唱へて天國に自國の徵兵制度を延長する等隨分勝手なことをするものは即ち民族的國家である。集團生活に特殊な愛國心をニコライは個人の高き道徳的要素の結合に歸し、戰爭及び平和に關する民族心理學的研究を遂げたトロツキーは愛國心を單純なる群團本能に歸した。余の眼には後者の假

説がより多くの場合を説明する様に見える。

原始法律が、家長の其の婦女を守らむが爲めに發したる他の男性に對する禁令であつて、家長其の人の實力に依りて維持せられたと云ふことは吾人に多くの暗示を與へる。今日何人も欣然として表現歸一の關係に立つことを辭せざる久遠實成の民族的國家すら有機的に發達し、民約論的に成立したことは稀で、寧ろ物理力の行使に依り建設せられた例が多い。況や一度成立せる國家すら又物理力即ち諸外國に見る如き革命に依つて更生を強ひらるゝに於ておや。絶對の距離視角より見れば、源平の争も、政友、民政の争も、本質上略々相似たるものであつて、差異は憲法と云ふ様な形式の上に乗つて居ると居ないとの相違、従つて智力に依ると物理力に依るとの相違に過ぎない。

然らば人爲を以て吾人が國內的將又國際的平和に貢獻し得ることは個人間又は集團間の競争を、無政府的物理的より合法的智力的と爲すこと丈けである。對立せる民族的國家の間に「平和組織」を創設し、國際的無政府狀態を除去すること丈けである。此の平和組織は聯盟規約では足らぬ、仲裁、相互援助、軍縮を経緯とする所謂平和議定書にても足らぬ。各場合に生きた正義を、超越的當爲を産出し、之に歸依を逼り得る全人類的世界國家でなければならぬ。然し勿論之は假設であつて將來實現し得るや否やは、人間改造を経ざる限り頗る疑問である。若し出来れば滿蒙問題の如きは自然に有機的に解消するであらう。

翻つて現實の滿蒙問題は如何、不平等條約とか政治條約とか云ふものは大抵實力行使の結果であつて、其の實行性は之を産み出した實力の存する期間に限らるゝものである。之れ歴史上國際條約の平均壽命が二、三年にしか足らぬ所

以である。滿蒙に於ける固定せざる今の事態の如き、物理力の保障に依らざれば一瞬と雖も維持し得ざるものであつて、如何なる平和論者と雖も亦之を認める。勿論當事國の一方が主我主義より没我主義に、Self-expression より Self-repression に、轉換するならば、夫は自ら別問題である。

國家には少年期壯年期老年期のものあり。時と處とに於ける生物の増大の法則の現はれと見るべき帝國主義の完成し飽和國となるものあり、然らざるものがある。望月の缺けたることもなき飽和國の平和運動に於ける地位は弱小國と略同一である。英米が大體轉を列べて平和問題に乗り出し、佛國が活力ある獨逸を前にして安全保障と云ふことを高調しつゝ、之に共鳴する所以である。けれども其の英國すら不戰條約に對しては保留を爲し、米國は不戰條約に對しても聯盟規約に對しても、外交政策に過ぎないと定義することも出来ないモンロー主義を、明確に特に正文を以て保留して居る。獨逸以上に立ち遅れた日本の海外發展は、辛ふじて壯年期にありて未だ英米の域に進んでは居らない。活眼達識の指導者なき憐むべき我等の日本は、世界大戦中の好期に遊蕩兒の如く目標なしに蠢動し、滿蒙問題の清算を忘れた。世界大戦後華府會議後にすら外界より強いられた政策の轉換を忘れた。確立せざる滿蒙權益とは不調和な聯盟規約、不戰條約に無保留で加入し、埴原留保ありとは云へ、兎に角右權益とは兩立し得ざる相互に無政府状態に在る九國條約に加入した。此の矛盾、此の迷妄、此のデレムマこそ實に先日我が全權が壽府に於て十三對一の袋叩きに遭つた所以の素因である。

此の現實の事實の前に第一に吾人の想起することはミルトンの失樂園にある "To be weak is miserable" の一句で

ある。舉國一致國難に當る外ないと云ふことである。第二に以上の矛盾を、出来れば整調することが外交の任務でなければならぬと云ふことである。

今日は英僧日蓮が立正安國論を書いた時と同一の國難來の時である。此の環境に在りて吾人國民の任務は果して何等の變容を受けざるべきものであらうか。余は信ずる、今や倫理的帝國主義やマキアヴェリズムにあらざれば、即ち感情的理想主義に過ぎざる王道等は極東に用ふべき餘地極めて尠なく、學國、教團等は當に經典を棄て、劍戟を磨き、ナポレオン戰爭を餘所に哲學の著述に耽つたヘーゲルよりも、寧ろフューメの英雄ダヌンチオに學ぶべき時であると。余は筆を驅使して大綱を述べるに、努めて眞に科學的であり客觀的妥當性に把住せむことを求めた。然し夫にも拘はらず讀者が余の説を科學的證據を以て粉碎してくれるならば、最大の愉快を感じる者は餘人でなくして即ち吾輩であるであらう。(昭和七年一月)

第四章 門戸開放主義論

門戸開放主義に關しては、本邦に於ては學者の小論文又は外交政治史に於ける一、二章が之に費さるゝの程度であるが、外國に於ては専門的に此の問題を取扱つた文献が多少ある。其の内、支那學者の著書としては Ban: The Open Door Doctrine in relation to China. 及び En Tsung Yen: The Open Door Policy. を擧ぐる事が出来る。筆者は今簡単に其等の書に就て論評を加へつゝ聊か所見を述べることとする。

鮑明鈴君（別に支那外交關係論の著あり）の門戸開放主義論は華盛頓會議後一九二三年、米國に於て出版せられたものであつて、爾來昨秋の滿洲事變勃發迄門戸開放主義に關し新たな發展なかりしが故に、本書は今日に於ても尙ほ充分參考の價値がある。著者は序文に於て、米國の支那に對する外交關係は門戸開放主義の一句に従つて處理せらるゝが故に、此の政策の正確なる把握は極めて緊要なりと正當に云つて居る。

原著者は、英國人の創意に成り、將來五世紀間支那が社會上、政治上、經濟上、宗教上世界政策の鍵鑰たるべきことを誤解せるヂ・ン・ヘイに依りて具體化せられたる所謂門戸開放主義に關し、門戸開放主義は商工業上の機會均等主義と支那の不可侵なる原則 (The Doctrine of the integrity of China) との兩者から成立つて居ると主張して居る。即ち一八九九年のヘイの通牒中にあつて後稍擴充せられた商工業上の機會均等と、一九〇二年義和團事件の際主として露國に宛てられた公文に始まり、後追々に確認されて行つた領土的及び行政的保全の主義との兩者を含めて門

戸開放主義と云ふのだと主張する。其の證據には原著者は "The Open Door principle of equal opportunity" と云ふ様な文字を用ひて居る。

此の見方が非常な混線であることは明瞭である。第一に九ヶ國條約其の他の協定に門戸開放又は機會均等とあるのは此の兩者が全く同一事を意味してゐることを立證して居る、華盛頓會議の議題を見ても、其の(一)は領土保全、其の(二)は行政的保全、其の(三)は門戸開放—商工業上の機會の均等—と云ふ様に列擧してある。

第二に門戸開放と不可侵とは其の提唱された時期に先後があり、且つ前者が租借地の存在を前提として居るのに反し、後者は露國の全滿洲占據と云ふ事實及び環境を前提として居る。第三に九ヶ國條約の第一條と第三條とを比較研究して見れば明瞭である如く、第一條は支那に對する列國の政治的行動の規準を定めたものであるのに反し、第三條は從來の門戸開放主義を大いに擴充確認したものである。以上の次第であるから、門戸開放主義が不可侵と機會均等との兩主義より成ると云ふ様な解釋は全然間違ひであると斷定する事が出来る。

けれども九ヶ國條約を見て此の混線が起らなかつたら寧ろ不思議である。既に華府會議に於ける米國代表部は、ハーチング大統領に對する報告書中に於て、門戸開放と不可侵とは同一語であつて、唯其の強調する方面を異にするに過ぎぬと云つて居る。第三條の第二號は明瞭に勢力範圍の設定阻止に關するものであつて、通俗には租借地のことを利益又は勢力範圍と云つて居るから、租借地は除外せらるべきや否や不明である。従て右第二號は寧ろ政治的の協定で第一條に入るべきものであるとも解し得られる。尠くとも此の第二號が第一條第一號及び第三號と如何なる關係に立つ

かは到底明瞭でない。他の一方に於て此の第一條の第三號と云ふものは門戸開放に關する規定である。かるが故に、既に九國條約の形式から云つても、不可侵と門戸開放とが混線して居ると見らるゝのである。どの道、不可侵と門戸開放とを合併すれば米國の全極東政策となるのであるが、余輩の見る處にては石井・ランシング協定又は夫れ以前の帝國の容諾は九國條約の如き廣汎なものでも、明確なものでもなかつたと信するのである。之を要するに今迄列強間の公文交換、行政府の取極め、又は一般的條約中の偶然なる一項として規定されて居たに過ぎない主義を、支那を加へて多邊的條約となし、現實の事實に全くそぐわない程度迄に支那の保全を擴充確認し、一八九九年のヘイの公文とは全く内容の異なる門戸開放主義を容認し、此の保全と門戸開放の二主義を合するときは支那の主權を害する様な權利の一木一草だも残り得ない様な規定を設け、而も之を無窮に存続する條約となし、支那學徒に徹底的利權回收の希望を抱かしめ、而して米國が之を鼓舞した爲め、滿蒙は動搖して來たのであつて、帝國を縛する三本の繩の内、日本を禍すること九國條約の如く大なるは無しと余は斷言するを憚らぬのである。

以上の點を除く時は此の著者は支那人の立場からではあるが、大體公平妥當な検討を遂げて居て、日本其他の諸國の特權が如何に不可侵の原則に違反しても、支那が主權の正當なる行使に依り "ex contractu" 承認したるものは不可侵の原則に背かないと云ひ、米國が如何に門戸開放主義に熱心であるとは云へ、武力を以て支那を助けに來るものと期待するのは大なる過誤であるから、支那は國防を忘れてはならない、蓋し米國は門戸開放主義に依り自國の政策又は態度を表明し、他國の同一態度に出でむことを要望して居るに過ぎないからであると云つて居るのは、大體肯綮

に當つて居ると云はねばならぬ。

En Tsung Yen: The Open Door Policy. 此就ては筆者は以下原著者をして直接讀者に語らしむるの筆法を採用することとする。

孔子及び老子の教訓は中國をして鎖國主義に出でしむるに與りて大いに力あつた。十五世紀以來先づ葡萄牙、和蘭、次で英國、最後に露、佛、獨、日が踵を接して至り、遂に鐵道、鑛山、借款、租借地及び勢力範圍獲得の爲めにする利權競争時代を現出せしめた。従つて十九世紀末葉の問題は支那の門戸開放にあらずして、支那に占據せる列國相互間の門戸開放が問題となり、従つて支那は受動的立場に在つた。支那に割據せる列國の争覇戦は(イ)分割(ロ)租借地を中心とせる勢力範圍の劃定、(ハ)門戸開放の三者中、孰れかに依り解消せしめらるゝを要したる所、分割は英國の現状維持主義の爲め實現の見込なく、勢力範圍の劃定は一面英露協定、英獨協定、土地不割讓條約等に依りて幾分達成せられたるも、他面には分割に進む待機姿勢と看做されて之に反對する國を生じ、門戸開放は雲南、貴州に於ける英佛の共同開發、津浦鐵道に於ける英獨の共同出資に依り既に其の片鱗を示し、次第に極東の外交政策を支配する原則に高められた。英國が支那の門戸は開放せられざるべからず("the Door of China shall not be shut")と卒先して主張する所以は、英國の支那貿易が支那の全外國貿易の四割一分を占め、日、米は一割内外を占むるに過ぎざるが故に、英國は支那分割に依りて何等利益する見込なかりしが爲めである、英國は實に門戸開放主義なる思想の創造者擁護者である。

けれども英國は既に支那に於て各種の權益を有し、多數の現存容諾を持つて居たが故に、門戶開放主義に外交文書の形式を與へ、之を中外に聲明する役割は米國の爲めに保留せられた。蓋し米國は貿易第一主義の國柄なるが故に、門戶開放主義に全幅の熱情を捧げた。蓋し其處には博愛人道主義と經濟的及び政治的に自己を保存し發展させ様とする利己主義との合力があつたからである。茲に於て詩人の様な幻想を持ち、哲學者の如き洞觀力を有し、政治家の如き敏腕を有し、外交家としてチットニ、フォン・ビューロー、デルカッセ、ランスタウンを凌駕したと傳へらるゝ米國國務卿ヘイに門戶開放主義宣明の役割が割當てられたのである。

一八九九年九月六日にヘイの通牒は發せられたのであるが、其の以前に於て其の氣運は既に充分熟して居たのである。即ち伍廷芳は同年四月米國の一學會に於ける演説に於て、門戶開放政策の必要なる所以を説き、重商主義的精神は世界に横溢してゐる。支那は四億萬の人口を有し、世界最大の市場となるべきものである。支那の一省は阿弗利加全大陸に優る購買力を持つてゐる。支那は由來、人種、民族、皮膚の色、宗教等の如何を問はず外國人を平等に取扱ひ、文字通り最惠國待遇を與へてゐる。従つて門戶開放政策は正に支那の政策に合致して居ると述べた。加之露國皇帝は大連港を自由港として自由貿易を獎勵し、獨逸は膠洲灣を自由港となし、支那全體を通じても貿易自由の主義を支持し、日、英も勿論之に賛成して居たのである。かくて景園氣は正にヘイの門戶開放主義を受容れるべく熟して居つた。

原著者の解釋に依ればヘイの通牒は(一)列國が今迄に支那に打ち立てた利益範圍は之を認むるも、租借國は右範圍内に於ける第三國人の既得權益に觸れてはならないこと、(二)右範圍内に於ける支那の關稅徵收權を確認したこと、

(三)列強は他國民により高き港稅又は鐵道運賃を課して經濟上の差別待遇を爲すべからざることの三項であつた。門戶開放主義の經濟上通商上の原則に關するものであることは愈々明瞭であると云はねばならぬ。

ヘイの通牒に對し、英國政府は他國が同一の宣言をするならば、威海衛は勿論英國が租借其の他の方法に依り今後支那に於て獲得する領域及び現有又は今後獲得せらるべき利益範圍に關し、米國政府の希望する宣言を發表してもよいと答へ、佛國は、全支那を通じて他國も同一の行動に出づるならば、其の租借地に於て萬國の國民又は臣民に均等なる待遇、特に關稅、港稅、鐵道運賃に關し均等待遇を與ふる用意ありと宣言した。獨逸は通商、貿易、航海に關し一切の國民に絶對的に均一の待遇を與ふべしと約束し、露國政府は既に支那に於ける租借地に於て門戶開放主義を尊重するの意嚮を以て大連灣を自由港となした。租借地の自由港を除きたる部分に於て關稅を課する場合には外國商品に對し一律均等の課稅を爲すに止める。租借地以外の支那領土内に於て現に存在し又は將來設置せらるゝ支那の開港場に於ける均等待遇には全然賛成であると。顧みて他を云ふ様な斷然曖昧の回答を爲した。之に反し日本は日露戰爭前のこととて衷心より米國の提議を歓迎し、之に賛同した。そこでヘイは各國の承認は最終的且確定的であると聲明した。斯くて米國は平和的産業主義より割出して、通商貿易を隆盛にして自國の製造業者を安固に仕様とする利己主義を達成すると同時に、萬國の遵奉すべき一大鐵則を樹立することに依り世界に於て極東問題處理上の領導權を把握するの一石二鳥の成功を收め得たのである。吾人が彼を賞讃する所以は彼が自己と他人とに同時に正義を振舞うたからである。("We admire him more, because he did justice to others as well as to himself.") 爾來

門戸開放主義は極東に於ける國際關係の根本政策となり、通商上の差別待遇を未前に防いで了つた。

門戸開放主義は専ら經濟上の均等待遇に關係するものであるが、其の補完たる支那の領土的及び行政的保全は一九〇二年の團匪事件の際、米國に依り率先提唱せられた。而して政治上に確固たる勢力均衡を極東に樹立し、極東禍亂の源を斷つに役立つた。

支那との間の通商航海に何等重きを爲さざりし露西亞は、政治的帝國主義を以て門戸開放主義の第一の障礙となつた。即ち露國は團匪事件に乗じて、滿洲に占據し、各種の獨占的特權を得、滿洲が支那の領土であると云ふことは名ばかりの状態となつた。此の露國と日本が戦つたのは、即ち門戸開放主義及び支那不可侵の原則の爲めの戦争を日本が戦つたものであつて、米國が當時日本を支持した所以である。

門戸開放主義に對する第二の障礙は、露國權益の相續人たる日本より來つた。日露戦争後、日本は露國の權益を繼承する外、安奉線の敷設、右鐵道材料の無稅通關の權利、鴨綠江右岸の森林伐採權、吉長線に關する借款權、奉天新民屯間の鐵道建設に關する借款權、滿鐵併行線設置の禁止、奉天省内鑛山採掘權、電信電話事業に關與するの權利、開市場設置に同意を與ふるの權利、松花江の航行權等を新に獲得し、日露戦争後は露國に劣らざる努力を以て日本は其の地位を強化することに鋭意した。其の間日本は一方に於て度々門戸開放主義及び不可侵の原則を認むることを餘儀なくせられ、他方反對に日本の特殊權益を認めさせることに成功し、矛盾撞着の行動を續けた。

先づ日本は一九〇五年の改訂日英同盟條約前文に於て、支那の獨立を害せざること及び萬國民の商工業上の機會均

等を維持すべきことを約し、一九〇七年の日露協約に於ても支那の獨立及び領土の不可侵竝に商工業上の機會均等を約束してゐる。一九〇七年の日佛協約、一九〇八年の高平・ルート協約に於ても同一のことを約し、一九一七年の石井・ランシング協定に於ては同一事項を約定するのみならず、何れかの政府が支那の獨立及び領土保全に影響を與へず、他國民の商工業上の機會均等享有を不可能ならしむる様な特權を獲得することに反對する旨を宣明した。

けれども他面に於て日本は其の特殊權益を忘れず、其の存立を鞏固ならしむとして多少の成功を收め得た。其の適例は第二及び第三の日英同盟條約に於て、東亞に於ける日英双方の特殊權益を保護する旨を約束し、一九〇七年の日露協約に於ても相互の特殊權益を尊重し現狀を維持すべき事を約し、且つ之が爲めに一切の平和的手段を以て協力すべき旨を約定したのである。此の日露の協力は一九一〇年及び一九一六年の日露協約に依り強化されて行つた。一九〇七年の日佛協約にも日本の特殊權益を認める條項が含まれてゐる。高平・ルート協約、石井・ランシング協定等は殊に然りとする。

日本は門戸開放主義を忠實に守ることに依り東洋平和の擁護者となり、支那の盟友となること、及び支那を侵略して日本の利益を傷けむとする國を抑制することの二ツの利益を獲得すべき筈であつたのに、自給自足し得ないと云ふ經濟上の原因、國家根本組織に關する政治上の原因、人種不平等待遇の爲にカリフォルニア州から排斥せられて發展すべき地域を他に求めねばならぬと云ふ心理學上の原因等は、日本をして帝國主義的政策を採用せしめた。而して日本の門戸開放主義に對する忠實さが如何なるものであるかを問もなく暴露せしむるに至つた。

先づ朝鮮の例を取らむに、日本は日清戦争開始直前の宣言に於て朝鮮の獨立擁護に任じ、一八九五年の下關條約に依り、支那をして朝鮮の完全なる獨立及び自治を約せしめ、一八九八年の日露協約、第一日英同盟條約前文及び第一條、一九〇四年の日韓議定書第三條に於て同一の精神を明にした。けれども一九〇五年、日本は英露兩國をして朝鮮に於ける日本の最高の政治的、經濟的及び軍事的利益を承認せしめ、次に朝鮮に於て外交指導權を樹立し、追て内政上の指揮權を收め、遂に一九一〇年朝鮮を併合したのである。之が日本門戸開放主義の模範的實例である。(筆者曰く、咄此の無禮漢、事情變更の原則は如何)

之を要するに、日本の極東經略策は徳富蘇峰氏や小寺謙吉氏等の著述中に、所謂亞細亞モンロー主義又は大亞細亞主義の思想に遺憾なく表はれて居る。此の思想は要するに支那を開放すると同時に亞細亞を閉鎖せむとするに在る。("Opening China and Closing Asia") 此の思想は又大陸政策、新亞細亞主義、汎日本主義、極東モンロー主義と呼ばれるべきものであつて、又「亞細亞人の亞細亞」と云ふ標語で表現することも出来る。小寺氏は大亞細亞主義論に於て、日本は第一期に於て自國の國粹主義に鞏固なる地盤を提供せねばならぬ。第二期に於て白人種に征服せられたる一切の蒙古人種即ち黄色人種を其の桎梏より免がれしめねばならぬ。第三期に於て全黄色人種は大亞細亞の主權の下に團結し、統制せられねばならぬ。第四期に於て日本は一切の黄色人種をして日本の國粹主義を遵奉せしめねばならぬと云つて居る。然らば日本は現在其の第一期に在るのであつて後世誠に虞るべきものである。要するに白人種と戦はむが爲に、白人種に依る亞細亞の一層の植民地化を阻止せむが爲に、日本は自己を武装し、支那を制禦し、亞細亞

の門戸を閉鎖せむとして居るのだ。(筆者曰く、何處かに斯様な日本攻撃材料を更に支那人に提供しようとして居る善意の非愛國者はないか。)

日本が斯くの如き野望を抱いて、支那を制禦せむと試みるに絶好の機會は世界大戦争と共に到來した、歐米列國が歐洲の戰場に手を縛られて居る間に、日本は歐洲諸國の容諾を得つゝ極東に自由手腕を揮ひ得ることゝなつた。先づ日本は獨逸との國交を斷絶することに依り、其の山東に於ける租借地其の他の權益を一應相續した。第二に二十一箇條の要求に依り全支那を制禦せむと欲して其の一部丈けを達成し山東省、東部内蒙古、福建に於ける特權、漢冶萍公司に關する利益を收めた。第三に一九一五年より一九一八年に至る間、支那の内政に干渉して支那政府より新たな特權を得、支那の内亂を助長した、第四に英、佛、伊、米との外交交渉に巴里平和會議に於ける術策に依り獨逸の租借地其の他の權益を自己の掌中に收めることゝなした。以上の結果として世界大戦直後に於ける極東の均勢は破壊せられ、商工業上の機會均等は失はれた。此の際起つて門戸開放主義を再建したものは實に米國であつたのである。

一九〇五年より一九一九年に至る間に、日本は支那に於て独自の優越權を打立て機會均等を破つた、其の結果日本は對支通商航海に於て優に列國を抜き、支那の前門に立ちて其の門戸を擁塞した。支那に於て米國と其の奧國とは支那の不可侵及び門戸開放、機會均等の爲めに努力した。而して獨占權を獲得することに依り機會均等を失はしめ、門戸開放の障礙を爲したものは一八九九年に於ては露國であつたが、一九二〇年に於ては日本であつた。世界大戦中、列強は支那を日本の爪牙に委せざるを得なかつたのであるが、戦後、經濟復興の爲めに原料品及び市場を支那に求め

むとするに當り、茲に日本と爾餘の國との間に葛藤が捲起された。

其の一例は一九一九年に爲されたる米國の提案に係る四國財團、後の六國財團である。同案の目的は該財團をして支那政府の保證する産業上、行政上及び財政上の借款を獨占せしめ、日、米、英、佛をして之に均等に参加せしむること、何れかの國の現在及び將來の借款優先権は之を共同事業に移管することの二點であつた。此の秋日本は滿洲及び東部内蒙古が朝鮮に接し、日本の國防及び經濟上の存立に密接な關係を有し、過激主義の侵襲を喰止める門戶に當り、極東平和維持の關鍵と看做さるゝことを理由として、日本の經濟生活及び國防の安全に重大なる障礙をなすに至るべしと日本が思惟する如き、南滿洲に影響を及ぼす借款に關しては、日本は右の安全確保の爲め必要な措置を執るの權利を保留すると稱して、五、六の鐵道を四國財團の投資目的から除外した。之に對し米國は日本の留保を認めることは嘗てなき廣汎なる意味に於て勢力範圍主義を確認する結果となると云つて反對し、英國も之に倣つた。其の結果日本は已むなく明確なる既得權益を除くの外、其の優先権を四國財團に移すことを承諾した。

華盛頓會議に於て九國條約が締結されたのは、今迄支那以外の諸國間に双務的に協定されて居た主義を、明確なる多邊的條約に統一したものである。第一條には門戶開放主義と對立する支那の主權、獨立並に領土的及び行政的保全の尊重、その他支那に對する國際政治上の最高原則が掲げられて居る。本條約に關し、提案者ルートが、現存事實は之を承認し、現存權利を設定したりと檢討容認せられたる有效なる條約及び取極に干渉すべからざるは勿論のことながら、右權利の享有國に於て支那の利益の爲めに其の權利に變更を加ふるの自由を有することも亦、當然の義なりと

云へるは、よく當時に於ける米國の意嚮を明示せるものと云ふべきである。第三條は門戶開放又は商工業上の機會均等に關するものであるが、ヒューズ氏の説明に依りて明なるが如く、其の第一號は勢力範圍の設定禁止に關し、其の第二號は獨占權や優先權の獲得禁止に關してゐる。

華盛頓會議に於ては尙ほ、支那の關稅率に關する條約及び日支間の山東還附に關する條約が締結せられ、同時に又十個の決議が可決されたことも特筆せらるべきである。其の結果支那の關稅自主權の基礎が定められた。山東問題に關しては、大體支那の要望し米國の支持する通りに解決せられた。治外法權問題に關しては支那司法制度調査委員會が設けられて、現狀を調査した上、勸告案を起草することゝなつた。租借地外に於ける外國郵便局は撤回せらるゝことゝなつた。租借地に關しては、英國は、威海衛軍港が存在理由を失つたとなして、之を返還すると同時に、九龍は香港の防禦上是非之を保留すると聲明し、佛國が共同返還なら同意すると聲明したに對し、日本が國防及び經濟生活に緊要にして而も多大の犠牲を拂つて得たる租借地は拋棄し得ないと聲明したことを注意すべく、二十一箇條々約に關しては、日本は其の有效を主張し、同時に南滿及び東部内蒙古に於ける鐵道建設及び借款優先權を拋棄し、顧問等の應聘優先權を拋棄し、二十一箇條要求中の希望條項を拋棄する旨を聲明し、ヒューズ氏は、一九一五年五月十三日の米國の抗議は米國の傳統的政策であつて、之を維持するものであると聲明し、外觀上の一致に拘はらず内面に横はる依然たる不一致を暴露してゐる。

華盛頓會議の結果、門戶開放政策は支那を加へたる多邊的條約に依り確認せられ、勢力範圍は拋棄せられ、支那の

主權、獨立並に領土的及び行政的保全は尊重せられ、支那の統一に貢献する爲めにする列強間の協力の計畫が樹立せられ、關稅制度、治外法權、外國軍隊、外國郵便局等支那の獨立主權國たる地位を損ふ制度は改訂を加へらるゝこととなつた。けれども華盛頓會議後に於ても支那の舊狀に依然たるものがある。従つて華盛頓會議に於て表示せられた、米國を指導者とする列國の對支協調政策の實現は（一）支那が強國となりて自己主張を貫徹し得るや、（二）日本が其の侵略政策を棄つるや、（三）爾餘の列強が極東問題に關し私心を去つて協力するや等の條件に繋つてゐる。

強國が弱國の獨立及び保全を確保するは勢力均衡の陳腐な政策であつて今更事新しく述べる程の事ではない。列強は土耳其、波斯其他の弱國に對して嘗て同一事を爲した。該政策は種々の言葉で表現されるが、門戸開放政策も其の一つである。強國は小弱國の利益を保護するを名として公然と又は外交上斯様な政策を採用するのであるが、眞實は自家の利益を進め又は擁護せむが爲めである。該政策が何故に用ひられるかと云へば、孰れかの地方に弱國があるに際し、甲の強大國が之を侵襲せむとし、乙の強大國が、私心なき奉仕の爲めと云はむよりも、寧ろ甲國の發展を阻止して勢力均衡を確立せむが爲めに、右弱國を保護せむと起ち上がるからである。若しも該政策が有効に維持せらるゝならば、平和又は休戦が招徠せられ、若し夫が動搖し顛落するならば戰爭が招徠される……同一條件の下に於て、合衆國は其の西部處女地を歐洲の人口過剩國白耳義の移民の爲めに提供するのであらうか、且つ國際法は其の背後に實力がある場合にのみ有効である。國際法は強國に依りて其の行動を辯護するの保護色として使用せらるゝ。支那は積弱なるが故に多くの特殊事情は既往に於て設定せられ、右事情は恐らく尙ほ國際法上の新原則を産み出すかも知らぬ。國

際政治に於ては力は最初のものであつて、法律は其の辯護の爲めに續いて來るものである。

支那は積弱憐むに堪へ、内亂に次ぐに内亂を以てすと雖も、五千年の文化を有す。世界人口の四分の一を占むる一大民族が滅亡すると云ふ様なことはあり得ない。數十年間は世界歴史の瞬間に過ぎない、一七七六年に何人が今日の米國の富強を豫想し得たであらうか、吾人は決して希望を失ふに當らない。列強は自國の經濟的利益の爲め、世界平和の爲め支那に私心なき援助を與ふべきを確信する。けれども外國管理や内政干渉は眞平である。列強が支那の爲めに協力しようと云ふならば、（イ）列強は支那に於て貿易上の利益のみを考慮に入れ、支那の積弱が極東問題の唯一の原因たることを認め、（ロ）支那民族を亡ぼし又は之を奴隸とすることは不可能で、之を敢てする結果は世界平和を攪亂する故、唯々支那を援助するに止め、（ハ）世界の保全は道德上、公法上ばかりでなく、力量に於ても亦、均等なる諸獨立國間の協力に依存することを認識し、得むとせずして唯與ふるの精神を以て支那に援助を貸すに如くはない。然し眞に支那を救ふものは支那の自強であつて、門戸開放政策を維持する者も亦支那であらねばならぬ。

以上吾人は門戸開放主義に關する二著を紹介すると同時に之に論評を加へ來つた。一九〇八年米國が團匪賠償金を支那に返還して以來、多數の支那留學生が米國に學び、其の結果今日支那の中央及び地方政府の要職は米國歸りの若者に依つて占められて居ると云ふことである。又右留學生は米國教授の指導の下に顧維鈞の「支那に於ける外國人の地位」を始め、各種の問題を研究して學位論文や多數の著述を公刊して居る。而して余の紹介した二人著者も勿論其の内に屬するのである。外交は智術の競争であるが、動物的戰爭を文化的戰爭に換へた迄の深遠なる智術の競争であ

つて、決して突嗟の詐術や降神術に依る天啓やに依頼することは出来ない。余輩の此の讀書餘録が同胞青年の研究的熱情を鼓舞する便ともならば幸甚である。(昭和七年一月)

第五章 門戸閉鎖主義論

或る支那通の友人から、論語が食するに語せずと教へて居るのは、如何に支那人が食卓に於て饒舌であつたかを示すものであり、男女七歳にして席を交へずと教へて居るのは、如何に男女關係が亂れ勝ちにならむとしたかを示すものだ、と云ふ話を嘗て聞いたことがある。或るブルジョアの令息が、修身の問題は大體自分の爲す所と反對のことを答案に書けばよいので、怠けたい時は勉強したいと答へ、朝寝したい時は早起したいと答へれば満點だと云つたそうであるが儘に面白い着眼點である。國際政治上にも亦斯様な事情が澤山ある。

一八九九年以來、吾人は幾度となく門戸開放主義なる言葉を聞かされた。そして其の危険に瀕する毎に此の言葉の新高調力説せらるゝのを見たのである。然らば國際社會に門戸開放主義文けがあつて、其の主義のみが到る處に力説せられ、適用せられて居るのであるかと云ふに、事實は全く之に反する。第一に單純なる門戸開放主義は世界に存在しない。唯々極東門戸開放主義が存在するのみである。然らば其の反面解釋として、極東以外に於ては門戸閉鎖主義が行はれて居ることを豫想し得るのであつて、事實上も亦、吾人は到る處に門戸閉鎖の勵行せられて居るのを發見するのである。是余輩の門戸閉鎖主義論の稿ある所以である。加之外國の著書雜誌等に於て“closed door”なる文字を時々見受けるのであつて、此の文字は決して突飛なものではないのである。

門戸閉鎖なる言葉に依て第一に吾人が回想するのは、開國互市以前の謂はば絶對的門戸閉鎖である。斯くの如き時代

は支那に於ても我國に於ても相當長き期間繼續し、此の惰性を打破して外國と通商し往來するに至るには相當の紛糾があり、相當の犠牲が拂はれたのである。併し今日に於ては科學技術の進歩に依り世界は縮少し、國際社會は一つの文化的協同團體となつて居るのであつて、最早絶對的門戸閉鎖は問題とならない。けれども見方に依つては今日の世界が、眞實民族主義に立脚して國際政府状態を現出して居るに拘はらず、餘りに偽善的な國際主義の進出を來し、國際聯盟や不戰條約を作つたが爲めに、反つて「力と併存する生ける正義」の手足纏となり、之が爲めに坤輿が動揺して、世界第二次大戰をさへ虞れざるを得なくなつて居るのである。萬一日本其他が聯盟を脱退するの餘儀なきに立ち至るならば、世界は孤立状態に復歸し、國際文化交流を阻碍するではあらうが、偽善を抜くことに依り眞の恒久平和へのスタートを切るに貢献するであらう。

第二に門戸閉鎖なる言葉は關稅政策上の一種の傾向、輸入品の禁止又は制限の設置等に之を適用することが出来る。今日は世界大戰後の第二反動期に入つて居るのであつて、何れの國も關稅の障壁を高くし、經濟的民族主義を高く標榜して、本國及び植民地に於ける國內市場を國內生産品の爲めに確保せむと努力して居る。其の尤も顯著なる一例は大英帝國の經濟單位擴大化であつて、英本國と其の植民地との間に特殊互惠の關稅を定め、或は關稅を撤廢して、英帝國以外の國との通商に差別待遇を實施し、英帝國各構成部分の間に共同門戸閉鎖の戰線を布かむとするものである。此の英帝國の傳統的自由貿易主義の拋棄、互惠關稅法の實施は、勿論自ら生きむとする英國が環境に對して示した一つの反作用であるが、英國が世界の五分の一強の領土を領有して、而も外國貿易に向つて之を閉鎖せむとすることは、

一方米國に對して惡例を示し、他方獨逸、伊太利等をして其の領土擴張慾を勃發せしめ、世界に一大危機を醸成するの虞がある。

次に吾人の想起する門戸閉鎖は彼の移民問題に現はれたる門戸閉鎖である。移民問題に於ける門戸閉鎖は、第一に人種的偏見、第二に賃銀従つて生活標準の低下を阻止せむとする經濟上の動因に發し、而も前者の原因を以て決定的要素と見るべきである。勿論白人種間に於ても人種的偏見はアングロ・サクソンと其他との間に相當の距離があり、巴里平和會議中人種平等案に對しては佛國等は欣然賛意を表して居たのであるが、一般的に人種主義なる觀念の存在は之を否定することが出来ぬ。茲に於て多くの未開拓地を擁する米國、英領等に於て、有色人種入るべからずとの制札が立てられて居る所以である。白人種相互間でも移民を制限する場合がある。米國が一九二四年の移民制限法以來「クオート」を以つて歐洲より來る移民を制限し、特に北歐民族を同化し易しとして之を偏愛し、拉典系及びスラヴ系を貶して居るのは其の著例であつて、一面國內の失業問題の重大化を阻止し、他面現住民族の子孫に將來に向つて増大するの餘地を存せむが爲めに天然資源や處女地を保留せむとするものである。

斯の如き政策が世界平和に如何なる影響を及ぼすかはマルサスの人口論を想起することに依つて大體把握し得られる。成る種の生物は其の依存する環境の植物を全部吸収した後は、死力を竭して移住を行ふのであつて、此の種の移住は則ち天則に従つて行はるゝ正義の行動と云はねばならぬ。人間が舊約の約束に拘はらず最早産み且つ殖えてはならぬと云ふならば、夫は世界全人類に共通の禁令でなくてはならぬ。然らずして日本人は移住すべからず、亞細亞大

陸に發展すべからず、唯國內に於て生命躍進に従つて相殺戮せよ、と云ふ様な環境を強ゐられて之を甘受する様な壯年國や青年民族はある筈がない。平和平和と云ふけれども戦争よりも忍び難い平和がある。如何程大切に保護して見てもさほど永續する生命ではない。タルジューが生命躍進は一切の數學的公式を破ると道破した所以はこゝにある。以上の事實丈で、聯盟規約の起草者が描いた様な、組織された恒久的な客觀的正義即ち法が常に支配する様な平和が此の世の中に君臨せず、軍縮とか軍擴とか云ふ中に優越權則ち自己に適する平和を確保せむとする競争が、専ら國際政治の波紋を織出して居る所以を悟ることが出来る。

然れども、吾人が門戸閉鎖主義なる用語に與へむと欲する最も適切なる意味は、門戸開放主義なる語の反對語としてある。然らば門戸開放主義とは何ぞやと云ふ語の検討から始めねばならぬ。

一 第一に米國國務卿ヘイの通牒に、所謂門戸開放主義は單純なる最惠國待遇でなくして、支那に於ける外國の行政地域たる租借地の存在を前提し、茲に主權の殆んど全部を行使する國に向つて爾餘の諸外國より大體通商上の衡平待遇を要求するものである。即ち(イ)諸國は其の清國に於て保有することあるべき所謂利益範圍内又は租借地内に於ける條約港又は既獲の利益に干渉せざること、(ロ)右利益範圍内の各港——自由港に非ざる限り——に於て陸揚船積せらるゝ一切の商品に對しては、其の何れの國に屬するを問はず、其の時行はるゝ所の清國條約所定稅則を適用すべく、且つ此の如くして賦課すべき租稅は清國政府に於て徵收すべきこと、(ハ)諸國は右範圍内の何れの港に寄港する他國の船舶に對しても自國の船舶に對するより多額の入港稅を徵收せられざるべく、又該範圍内に敷設監督若くは作

業せらるゝ鐵道線路上に於ては、他國の人民若くは臣民に屬する商品の右範圍内に於いて輸送せらるゝものに對し、自國民に屬する同種の商品の同距離間、輸送せらるゝものに對するより多額の運賃を徵收せざること、の三項である。以上の諸原則が租借地又は利益範圍の存在を前提としながら、直接間接に通商の衡平待遇、而も租借地を領有する國の内、國民待遇を要求するものであることは明瞭である。唯茲に注意を要する一大事實がある。學者は往々分析的研究の弊に墮する結果、一つの問題を捉へて之は經濟問題なり、之は政治問題なりと簡單に片附けるものであるが、事實上一つの問題は同時に經濟問題であり、社會問題であり、道德問題であり、政治問題であるのであつて、ヘイの門戸開放主義が通商上の内國民待遇を期するものなりとは云へ、既に茲に一部政治上の干渉を敢てし、ノン・エンタングルメントの政策を傷けて居ることである。即ち條約港及び既得の利益に干渉せざること。租稅は清國政府に於て徵收すべきこと等の原則は法律上のみならず事實上の衡平待遇をも確保せむとするものであつて、儘に間接に該待遇を狙つて居るに相違ないのであるが、之等のことは租借地所有國が行政の衝に當つても不可能のことではなく、従つて多分に政治的の意義をも有して居るのである。夫は兎に角、此の一八九九年ヘイ通牒の意義に於ける門戸開放主義に對する門戸閉鎖主義は、租借地内の條約港を租借國が獨自管理し、既得の權利を犯し、縱令しかせずとするも穩密に内國民に有利な待遇を與ふることではなければならぬ。租借地内の稅關に於て清國の協定稅率よりもより高き關稅を課し、又は租借國自ら關稅の徵收に當ることではなければならぬ。港稅及び鐵道運賃に於て差別待遇を與ふることではなくてはならぬ。斯の如き門戸閉鎖の結果は唯でさへ租借權國の貿易が増進しようとする勢を、更に助長して必然的に租借地

と云ふ支那の一部分に租借國の獨占的市場を形成することとなるのである。而して之を阻止せむとするのがヘイの重商主義即ち門戸開放主義である。

二 第二に門戸開放主義は大體一八九九年のヘイの通牒よりも一層廣汎な内容と意味とを持つて居る。夫は爾後に於いて追々に米國及び該通牒に同意を與へた諸國に依り、其の意味内容を擴充せられた結果である。即ち大體最惠國待遇を意味して居た所の門戸開放主義は商業及び工業に於ける機會均等と云ふことに改められた。其の後露國の滿鐵敷設及び撫順炭礦採掘に、日本が卒先して米國を誘ふて門戸開放主義違反を名として抗議したることに依り、鐵道及び鑛山利權をも包含する様になり、茲に於て最早勢力範圍なる觀念と門戸開放主義とが矛盾する様になつて來た。其の後になつて六國借款團が成立する時に及んでは利權、借款、選擇權、優先權等にも適用せらるゝことになつて來た。所謂廿一箇條の要求に及びては官吏の應聘權等をも含むと解される様になつた。茲に於て門戸開放主義の内容は極めて廣汎となり、「不可侵」なる語と既に殆んど見分け難き迄に進んで來て居るのである。

此の意義に於ける門戸開放主義の反對語たる門戸閉鎖主義は經濟上の獨占を主張するばかりでなく、自己の特殊利益を進め最高利益（“paramount interest”）に進むと同時に、外國の特殊利益を顛覆排除して行かねばならないのであつて、概言すれば米國の南米大陸諸國に布きつゝあるモンロー主義、又は夫れ以上の如きものである。斯の如き門戸閉鎖主義は他國が合法なりと容認する筈のものでなく、獨自の一方的宣言として世界に示し、之を堅持して行く外はないのである。而して時が來ればモンロー主義が聯盟規約に登録されたと同様になるのである。此の點は次に述ぶる

第三の意義に於ける門戸閉鎖に就いても同様である。

三 第三に門戸開放なる言葉は精神的に靈犀一點相通するものありとは云へ、兎に角ヘイの通牒には何等形跡なく、通商の衡平待遇とは風馬牛相關せざる不可侵又は保全なる言葉に依りて代用せらるゝに至つた。けれどもこの發展には論理的必然性があることを認めなければならぬ。既に述べたるが如く、ヘイの三原則中には通商衡平待遇を間接に狙つたものであるが、一面租借國の行政權を制限し、他面支那のインテグリティを保留する條項がある。尙ほヘイの公文中の序文に、米國は如何なる國の獨占的特權も之を是認するの意圖なきこと、及び支那の不可侵の維持を要望することが記述してある。義和團事件當時、米國が列國及び支那に宛てたる公文書中等には“Chinese territorial and administrative entity”又は“territorial and administrative integrity”の文字が現はれて居る。同様の文字は高平・ルート協定、石井・ランシング協定等にも現はれ、九國條約に及びては主權及び獨立竝に領土的行政的保全を尊重すること將又特別權利又は特權を求むる爲め支那に於ける情勢を利用せざること、云ふ程度に迄進んで居る。借て此の意義に於ける保全又は不可侵が門戸開放主義と別問題であることは明瞭であつて、一八九九年のヘイの通牒に對する回答中、英國は將來獲得することあるべき租借地に於ても矢張門戸開放主義を尊重しようとする約束して居る。而して此の英國の回答はヘイの通牒が租借地及び勢力範圍の存在を前提として居る事實に基礎を置いて居るのである。

然し既に述べたる如く一八九九年のヘイの通牒序文に不可侵の文字あり、右通牒の三原則中、港及び税關の制度に觸るゝ條文があり、門戸開放主義の目的を完全に達成せむと欲せば、門戸開放と云ふ様な主義の確立を必要ならしめ

た租借地及び勢力範圍の存在を失はしむるに越したことはない。故にペイの第一次通牒以後本問題に付發せられたる米國の公文書にも、支那の混亂状態を利用して特殊の利益、特に政治的領土的支配權を得てはならぬことを提唱して居り、英獨協商の中にも右様の文字が見えて居る。然らば九ヶ國條約に於て一層此の精神を擴充して行政的不可侵迄加へて來たことは毫も怪しむに足りない。既に一八九九年の英國議會に於ける討議の際ハーコートは門戸開放主義を宣明し、支那領土の占領を非とし、ベレスフォード卿は“Break-up of China”に於て、門戸開放主義を維持せむと欲せば支那帝國の不可侵を維持せざるべからずと喝破して居るに於ておやである。ワシントン、チェンソーソン以來の遺訓に基き、遠方に於て領土の擴大又は政治的權力の確立を回避し來つた米國が、「不可侵」維持にまで突進して行くのは勢ひであらねばならぬ。茲に於て門戸開放主義は不可侵と先づ結び付けられ、間もなく融合して仕舞つた。ヒューズ氏が華府會議後、大統領に致せし報告中に於て、門戸開放と不可侵とは同一語であり、唯其の強調せむとする方面を異にするに過ぎないと云つたのは偶然でなく、支那の鮑明鈞君が門戸開放主義は機會均等主義と不可侵との二主義を含むと云ふ様に解釋して居るのも亦偶然でないといはねばならぬ。此の間の矛盾に日露戦争後の日米葛藤史が潜んで居るのである。

以上の意義に於ける曲解又は擴張解釋せられたる通俗の門戸開放主義（則ち不可侵を含める同主義）の反對語たる門戸閉鎖主義は何を意味するものであるか。此の意義に於ける門戸閉鎖主義は他國の領土内に於て一定地域を限り一定の事物の上に政治上の獨占的支配權を及ぼすことである。右支配權は勿論經濟上の内容を有するのであつて、其の

結果狹義に於ける門戸開放主義即ち通商衡平待遇主義と何れかの點に於て必ずや接觸し、稍ともすれば之と衝突の可能性を持つて居るのである。日本が從來滿洲及び山東省に於て有し又は有せむと欲し、今又滿洲に於て強化せむと云ふに、之と競争する他の支配權が退却するか、又は不可侵の意義に於ける門戸開放主義が退讓して原始的意義に於ける門戸開放主義、即ち通商の衡平待遇に復歸するかに依るのである。而して斯様な實例は米國が墨國其他カリビアン海地方に於て示して居り、獨占權を確立したのは米國であり退讓したのは西班牙、英國であつたのである。而して西班牙の場合に於ては、米國は大膽なる帝國主義的の戰爭を敢てして退讓を強制して居るのである。米國のカリビアン海政策はモンロー主義の積極的方面を帝國主義的に強化したものであるが、其の進展は主として英國の退讓に依るのである。英國は現に獨逸から墨西哥に干渉するのに協力せむことを求められた際に之を拒絶して居る。米國のカリビアン海政策が、確固不拔たる基礎の上に置かれたのは米國の中米諸小國支配權及びパナマ運河獨占權獲得に因るのであつて、今迄英米が互に此の地方に出兵もし、クレイトン・ブルワー條約に依りて共同支配權をも行つて居たものが、英國の退讓に依り米國の獨占に歸したのである。何故に英國は斯くの如き舉措に出でたか？ 彼國は南阿戰爭に依りて多大の犠牲を拂ひ、軍國主義を以て攻撃せられ、世界から孤立して居たのであつて、此の孤立より免がれむが爲めに米國の歡心を繋ぐと發意し、從來からの懸案であつたクレイトン・ブルワー條約を解消し、ヘイ・パウンسفオート條約を結んで以てパナマ運河を米國の獨占到委し、中米に占據して居た軍隊をも撤退したのであつた。墨西

哥に於て日本の實業家が、再三鑛山採掘權や漁場等を獲得せむとするに際し常に米國から反對が現はれ、其の都度日本が退讓して來たことも亦、米國の門戸閉鎖を可能ならしめて居るのである。(M. Yoshitomi; Les Conflits Nippon-Américains et le Problème du Pacifique.) 米國の獨占的勢力範圍の確立は斯くの如き過程を経たる門戸閉鎖主義の確立に依るのである。而も米國は門戸開放主義と叫ぶ丈けで門戸閉鎖主義と云ふ語を暖氣にも出さないのである。強國の正義は先づ此の類である。

以上述ぶる所に依つて、門戸閉鎖主義の存在及び意義は略明瞭である。翻つて滿蒙問題を思ふ時吾人に如何なる感懷ありや。日本の特殊權益は門戸開放主義の基礎の上に之と調和して存在するのであると云ふが如き説明即ち石井・ラッソング協定當時に於けるラッソングの口吻は、自己を滅却して米國に追隨し滿蒙拋棄を決せざる限りは容認すべからざる諱語であつて、余輩の斷々乎として排撃せむとする所である。従つて石井・ラッソング協定に替ふるに九國條約を以てしたことも余輩の嘗て痛嘆した所である。日本は嘗て米國と戰つて降伏したることなく、漫然、外交てふ智術の競争に於て己を没却すること華府會議に於けるが如きは殆んど外交史上先例なく、支那人と雖も斯くの如き場合にはあの國情を以てしても遙に執拗に抗爭したことがある。

ラッソング報告は一國が他國の領域内に於て日本が滿蒙に於て有するが如き複雑多岐なる權益を擁して居ることは國際關係上他に比類なく、而して日本政府は此の權益を言表はすに特殊地位と云ふが如き曖昧な言葉のみを使用して居て、夫れすら之を貫徹せずと云ひ、帝國が充分自國の政治的支配權を確立して居ると云ふ外觀的事實に吻合する様な

外交上の用語を使用せざりしことの缺點を暗示して居るのである。之れ余輩が敢て門戸閉鎖主義論を提唱する所以であつて、滿蒙に於ける過去及び現在の日本の地位は前述第三の意義即ち不可侵の意義に用ひられたる門戸開放主義を排撃し、既に事實上帝國の云はゞ新種の保護國となれる滿洲國の門戸閉鎖を提唱し、獨占的なる或る程度の政治的支配權を確立することを要求して止まざるものなることを斷言して憚らざる所以である。若し夫れ外交上の機略として門戸閉鎖主義なる文字は之を避け、或は生命線、國防上の前衛、或は賭戰地域、カリビアン海政策、滿蒙モンロー主義等の文字を用ふるが如きは第二義の意味を有することで毫も差支なく、而も精神は常に政治上の門戸閉鎖主義、政治上の獨占的支配でなければならぬのである。(昭和七年十二月)

第六章 聯盟に於ける日本の自己清算

第一 認識不足の所在

社會生物學の約束に従つて日支關係が緊張し、昭和六年九月十八日の異變に導いた諸事件が走馬燈の様に展開し來るに連れ認識不足と云ふ言葉が流行語となり、一轉して事變勃發後世界の輿論が露々として日本を攻め、國際聯盟理事會も亦日本軍の鐵道附屬地内撤退を要求するや、此の流行語は忽ち國際聯盟嘲笑の語として使用せられ、猿之助君は芳澤理事に扮して聯盟は認識不足であると見得を切つたのである。

然し認識とは何であるか、認識不足とは何であるか、認識不足の所在果して如何。然し此の問題は一見簡單に思はれる様でさう簡單ではないのである。

今認識論の學説を繰返しても始まらぬ話であるが、認識に主觀と客觀とを必要とすることは勿論である。認識に存在判断と價值判断との區別を認める時は、後者の場合に於ける主觀の制約は絶對であつて容易に客觀を克服し去る傾向を持つ。従つて當面の問題に關する判断如何は主として認識の主體たる人が何人であるかと云ふことに依て決定する、其の人が何人であるかを知れば其の人の判断を豫斷することが出来る。坊主を惡む人は袈裟を惡むことを約束し、人種的偏見を持つアングロサクソンは有色人種を排斥することを約束して居るのである。此の見地に立つとき滿洲事

變に關する認識不足の意味及び所在の果して如何は、重大なる疑義に亘らざるを得ない。

第二 聯盟の本質

國際聯盟が一面疑似國際主義の產物として、專横なる大國の民族主義を反映し、シュ、キング等の虞るゝ如く、其の道具に使用せらるゝ惧あることは勿論であるが、他面に於て恰も財團法人が寄附行爲者の意思の傀儡と成つて躍るが如く、聯盟も聯盟規約を可決して之を創設した聯盟國の合成意思の體現者として、独自の機關人格を持つて居ると云ふ事實を吾人は否認することは出来ない。然らば聯盟は如何なる人格者であるか。

平和建設の出發點は二つある。第一はアンリ四世の大計畫の如く、世界の政治地理を根本的に書き改め紛争原因を消却すること、即ち國際政治經濟關係を調整することである。第二はアベズ、サンピエールの平和案の如く、現状を固定化し現状を神聖化することである。第一の方法は平和の爲めに謀つて反て全世界を大混亂に捲込むこと明瞭なるが故に、現實の國際聯盟が第二の方法を採用したのは必至の勢に従つたものである。此の現状神聖化は聯盟規約第十條に頗る明瞭に現はれて居る。規約第八條より第十五條迄には第十條の宣言を實行力あらしめむが爲めに軍備縮少、冷却期間、仲裁裁判、勸解等の舊來の平凡なる平和機構が寄木細工の如く取入れられて居るに過ぎない。唯一の新しい條項は經濟封鎖と一般的兵力援助の規定第十六條であるが、本條は雄大なる思想の影淡き幽靈たる現在の聯盟に於ては空文である。何となれば本條は超國家又は世界聯邦の國防憲法中に其の一項として含まるべき條文であつて、

余輩の見解に従へば純正國際主義や超國家は人間の本性に照し可能性を超越して居るからである。果然究極する所、聯盟は現狀神聖化の道具である。聯盟に在つて正義とは現狀維持、現行條約尊重と云ふことである。成る程規約第二十一條と云ふものがあつて、レプス、シック、スタンチプス (Les choses demeurent ainsi) の原則を認めて居る。ある人は依て以て加奈陀及びローワー・キャリフォルニアを併合せんがためにハウス大佐がこれを挿入したと云ふけれども、これは矢張りヴェルサイユ條約改訂のために、一方の出口をウイルソンが用意して置いたものと見るべきである。従つて獨逸、支那等に對する優越權國が自發的に讓歩した場合、又は獨逸支那等が實力の優越權を自己の手に取り戻した場合に合法的に現狀變更を可能ならしむるものたるに過ぎぬ。而も該條は總會の全會一致を要する關係上、援用の機會は殆んど絶無である。強者が益々其の強を長ぜむが爲めに同條を援用せむとするはあり得ざる事である。

第三 米國の自己清算

世の中は假裝舞踏會ではない。頰冠りして最後迄通れるものでない。羊群に入る爲めには、鹿は其の角を清算しなければならぬ。聯盟加入と云ふことは、其の前提條件として自國の國策と聯盟の機構とを相調和せしむる工作を完了することを必要とする。純正國際主義に近き所謂十四點を懷にして歐洲に渡つたウイルソンの苦惱はこゝに始まつたのである。十三州の獨立以來「明白なる運命」は順當に展開し、世界大戰中に第二次産業革命を成就して成年の飽和

國となつた米國は、自主的外交政策、モンロー主義、カリビアン海政策、弗外交、砲艦政策等を自在に活用して、すでにパナマ運河までを統制する立場に在りて、安全即ち優越權及び "Pacific industrialism" に陶醉し得たのであつて、聯盟加入に根本的障壁となるものはなかつた。けれども傳統的政策と柄鑿相容れぬ點に於て勿論論議の焦點となるべき二、三の問題はあつた。重商主義に偏し外界と能ふ限り少量の政治關係を持つてと云ふ方針はワシントン、ジェフソン以來米國の不干渉の原則と云ふ形を執つて居る。茲において前述の規約第十條に關しランシングは獨立尊重、領土不可侵の保障は米國の關する限りこれを約束する、併し他國が之を尊重しようが尊重しまいが米國は關知しないと云ふ趣旨の案文をウイルソンに提示した。ウイルソンは理想家の立場から此の道理ある進言を退けたが、其の後規約第十條は道徳的義務を負はしむるに過ぎぬと上院議員に説明した。ウイルソンの十四點はモンロー主義に言及して居らなかつたが、間もなく米國の自主的外交政策たるモンロー主義は規約と兩立するとの規定が挿入せられ、こゝに米國の内在的需要は國際的當爲化された。ウイルソンは民族自決を叫んだのであるが、之よりも一層高級の原則即ち人種平等案は否決せられて、移民問題の如き國內問題は聯盟の審理すべき限りでないとの規定が採用せられた。米國上院の批准は期して待つべきものであつた。

人間の内に宗教的、倫理的情操が動いて、人間を種々の工作に従事せしめ、茲に中間史觀を容るゝの餘地あらしむることは事實である。勿論宗教的倫理的慾求と云つても生存慾、誇示本能、陶醉本能、自己主張本能、昂揚情操、群團本能等と異なるものであるかどうかは頗る疑問であるが、米國人に平和人道業者の多いことは事實であつて、平和

強制同盟等の運動が戦争より平和に轉換せむとする群衆心理とともに動いて、ウイルソンをして自己の聯盟案に米國輿論の支持ありと誤信せしめたも無理ないことであつた。しかし翻つて考ふるに、既に自然に安全の地理的要件、人種的的要件、經濟的要件、政治的要件を具備し、陸海軍又は同盟に依りて自國を防衛するの必要なく、乾坤を獨往して自主的國策を誰憚らず發展せしめ得る米國に對し、聯盟が何の福祉を齎し得るか、果せるかな規約第十條は嵐の中心となり、米國は聯盟を脱し、ハーチングは聯盟は死せりと揚言した。後に規約よりも一層米國の傳統政策に合致する不戰條約が出来たのは、米國が逸早く聯盟に於ける自己の矛盾を清算した後の後日譚である。而して米國の聯盟脱退は其の國運國策に些少の支障をすら與へて居らぬ。

米國は由來民族的精神錯亂病の慢性病に罹つて居る。外部より見れば聯盟を提唱して之より脱退し、仲裁條約を提議して其の締結後批准を拒絶するが如き其の徵候である。プライスは米國が外交問題を取扱ふに極めて不注意であつて、爲めに外交使節の選任なども極めてぞんざいである事を指摘して居る。他國の迷惑は勿論であるが、米國と交渉する他國の外交政治家は執れが米國の本心か亂心かを明確に判斷するの緊切なる任務を有する。嘗て「トックヴィル」は世界中何處へ行つても英國人と米國人程に仲違ひして居る國民は他にないと云つたが、夫は獨立戦争や南北戦争の記憶が尙新しかつた時の事であつて、十九世紀の終りには局面は一轉して來たのである。爲めに佛國の外交家も勘違ひをやり、彼の有名なる佛蘭西の米國通タルデュー氏の如きも此の判斷においては完全に落第した様である。知らず上海事件を契機とする日本に對する經濟封鎖呼はり本心か亂心か。

第四 聯盟に於ける類冠り日本

華盛頓會議の際ルト氏は極東委員會に九國條約の基礎となれる約五箇條の所謂支那の大憲章を提出し、其の決議案が成立した。其の一項には現在の九國條約第一條に見る如く締約國は絶対無條件に支那の主權、獨立並に領土的及び行政的不可侵を尊重することを約すと云ふ趣旨の規定があつた。茲に於て俊拔なる顧維鈞は叫んだ、「支那に關する新國際法は制定せられた、然る所、既存の支那關係條約には此の大憲章の文言及び精神と相容れぬものが多い、依て此の大憲章の條項に照し、既存條約に效力を繼續せしむべきか否か嚴正に審査して貰ひたい」と。幸にして既存條約の効力を検討して貰ひたいと云ふ、此の顧氏の要求は取上げられなかつたけれども、隨に理屈は理屈である、顧維鈞君が此處迄切込んで來たのは九國條約の明文に非常の無理があり、動かすことの出來ない現實と吻合しない謂は「擬制」とも云ふべき案文を採用したからである。が、此の問題は此處では追究することを見合はせて置く。偕て顧維鈞君が提起した右の問題が聯盟規約の場合に於て果して問題にならないかどうか餘程熟慮を回らす餘地がある。規約第二十條には次の規定がある。

聯盟國ハ本規約ノ條項ト兩立セサル聯盟國相互間ノ義務又ハ了解カ各自國ノ關スル限リ總テ本條約ニ依リ廢棄セラ
ルヘキモノナルコトヲ承認シ、且今後本規約ノ條項ト兩立セサル一切ノ約定ヲ締結セサルヘキコトヲ誓約ス

聯盟國ト爲ル以前本規約ノ條項ト兩立セサル義務ヲ負擔シタル聯盟國ハ直ニ該義務ノ解除ヲ得ルノ處置ヲ執ルコト

ヲ約ス

右の條文を正直に考へたなら非常な大問題を包含して居る、該規約を含んで居るヴェルサイユ條約の規定等が規約に反する條文を含んで居ないかどうかは問題であつて、同盟條約を始め政治條約は常に本條に牴觸する様なことになる虞がある、仍て規約の或る草案に於ては尠くも既存條約の問題には觸れないこととしてあつた。併し規約も條約の一つであつて其の解釋權は締約國に屬し、觀念上全能の主權は鹿を指して馬となすことも出来るから、兎に角本條の適用問題は嘗て起つたことがない。

併し問題は之に止まらない。既に述べたる如く、聯盟は現狀神聖化の上に立つてゐる。如何に理不盡に併合又は割取した地域でも、兎に角其の國際政治工作が完了した國は晏如として規約に加入し、其のある程度の法的保護を享受することが出来る。之に反し未成年帝國主義國即ち滿蒙に於ける日本の如きは誠に困難な地位に立つ、前述の規約第二十條は問題とならなかつたから幸であるが、之に反して未成年帝國主義國の政治的特權と規約第十條の關係を考ふるときは右特權は極めて不確定な地位に置かれるのであつて、右特權は現狀維持が關の山で之をより以上に進展せしむることは出来ぬ、而して右特權は其の基く條約の有効期限を過ぐるときは消滅すべきである。日本の滿蒙に於ける權益が之でよいか悪いかの問題は中々簡單でない、國家の盛衰は案外早く來るので、不對等條約國相互間の作用反作用の衝突は起り易く、異變に際しては、事態の本質上、聯盟の本質上、特權國の方が不利益な地位に立つにきまつてゐる。況や右特權を磐石の基礎に置かむと欲して、更に其の内容を充實せむとする場合に於ては特に然りである。若

し支那が反對に武力に於て優越し、支那軍が日本軍を其の固有の駐屯地から放逐し、我が特權を蹂躪しても聯盟に於て恐らく重大な問題とならぬであらうと思はれる。従つて余は大體論として聯盟國たる地位と未成年帝國主義國たる地位とは一致せず、其の矛盾は加入前之を清算すべきであるかと考へる。然るに日本は頰冠りして之等の疑問にも餘り關心せず、條約有効期限到來の節、特權を抛棄する意思であるか否かも不明な状態のまゝで聯盟國となつた。余の目には聯盟のイデオロギーと自主的の日本との矛盾は早晚清算せらるべき宿命に置かれたと見えたのである。

第五 聯盟に於ける自主的の日本

黃口兒とも老獪漢とも評せらるゝ張學良君の攻撃に依つて、漸く生命線の脅威を見出した日本は遂に立ち上つた。そして國家に固有の自衛權を疑義に亘り易き領域に於て遺憾なき迄に行使した。支那は忽ち聯盟に哀訴して理事會の開催となつた。支那が聯盟に訴ふる以上滿洲の事態を前にして理事會は規約上拱手傍觀は出来ぬ。日本は直接交渉中の理由で聯盟の干渉を排除せむとしたが、支那が直接交渉を否定して居る以上は致方がなかつた。聯盟は同様の場合に常に然るが如く、鐵道附屬地内に軍隊の撤退を求めたが、日本は保留を附して此の原則を克服した、聯盟は日本の占領を其儘にして日支紛争を審議することゝなつた。之は非常な護歩であつた。余の見解に従へば規約第十六條は超國家の國防憲法に關する條文たるべきものであつて、疑似國際主義の聯盟には妥當しない。制裁どころか經濟封鎖も思ひも寄らぬ。此の無力の聯盟が此の大事件を前にして聯盟に米國の参加を求めたのは意外とするに足らぬ。會員で

ないものが勝手な時に這入つて来ることは奇怪なことで、法律上非常な疑義がある。けれども國際政治に於ては、政治的考慮の前には法律的考慮は無力である。米國は十三對一で聯盟理事會へ招請せられた、投票權の有無さへ疑問の儘で聯盟に喜んで参加した米國は、外交手段丈を執る心算なのであつて、其の弱點を暴露したものと見るべきである。聯盟もまた眼を米國に注いだ點に於て弱點を暴露してゐる。聯盟は斯かる事變の發生する際何時も現地調査委員を派遣するを常とするのである。故に今回も此の問題が持ち上つた。日本は敢然反對した。併し後に至つて自ら屈して現地調査委員を進んで招請した。調査委員を招請する日本の腹には現地調査委員が支那の混亂状態を見たならば日本の立場を了解し、必ずしも不利な報告は出さまいとの潜在意識もあつた。果して問屋がさう卸すかどうかは大なる疑問である。兎に角現地調査委員は出發した、問題は一時延期せられた。滿蒙で自主的政策を強行した日本は、壽府では遂に干渉を容認した、此の矛盾は何時か清算せられねば止まぬ。

第六 日本自己清算の態様

聯盟調査委員の報告は近々に完了を告げむとして居り、吾人は間もなく其の内容を知り得るであらうが、差當りは新聞の報道に依りて判断する外はない。余が述べた通り、聯盟には聯盟の目的的三段論法がある。調査委員の判断は右の三段論法及び米國に追隨して聲明した聯盟の合法性否認政策を無視する理由には行かない。従つて余の判断し得る限りに於ては、調査委員の勸告又は結論は日本に有利であり得ない。支那には或は有利であることがないとは限らぬ。

新聞の情報は一喜一憂を鼓舞する底のものであるが、之を綜合して判断すると政治的考慮と法律的考慮とを取交せて、先づ日本も勿論受諾出來ず、支那も受諾出來ぬ様な、聯盟と云ふ機關人格に相應はしい結論を出すのではあるまいか。調査委員の立場になつて考ふれば之れ以外に活路はない。

我國朝野は昨秋、聲を揃へて聯盟の認識不足を嘲笑した。約半歳に亘つて日支の顧問を帶同して現地調査を實行した結果如何、聯盟の認識即ち判断は變つたか。細部に於ては或は中和變容があつたかも知れぬが、根本に於ては聯盟の判断は終始一貫毫末も動搖することを期待出來ぬ。英國の労働黨内閣と保守黨内閣、佛國のタルヂュー内閣とエリオ内閣とは互に第二義的問題に就ては或は百八十度、第一義的問題に就ても僅少の方向轉換を端囁せしむる。併し聯盟の如き機關人格は絶無ではないが、決して大なる可塑性プラスチックを持つものと見ることが出來ない。茲に於て聯盟内に於ける自主的日本の清算は略見通しを附け得る。特に稍々可塑性に富める強國の國際主義（國際帝國主義）の支配する理事會よりも、弱小國の國際主義の支配する聯盟總會に問題が上程せらるゝ時、特に然りである。従つて相當多くの人が豫想する様に日本の聯盟脱退に依て閉幕するか、聯盟が條理上期待し得る程度を越へて極度に其の可塑性を發揮し、依て以て滿洲國誕生と云ふ局面を前にして國際危局を有耶無耶の裡に葬り去るか、二者其の一を出でざるべきであらうが、余輩は論理的に考へて寧ろ前者の方が可能性多きを信ぜむとするものである。

第七 日本の聯盟脱退

日本は規約第十五條につき保留し、日支案件を聯盟總會に上程することに反對して居るが、大勢に引摺られて總會にも、十九國委員會にも出席し、御機嫌次第では發言投票もして來た様である。而して今春新聞の傳ふる所に依れば日本は右總會から代表を引揚げしむること、即ち總會を「ボイコット」する決意を示した。恐らく之は餘儀ない事情の下に、餘儀ない決心をしたものと認むべきであらうが、今秋はどの道聯盟脱退の腹迄決めてかゝらねばなるまいと余輩は考へる。そして脱退に依つて梟がつくことが充分確定的であるならば、不日滿洲國を承認すると云ふ其の日に於て決然聯盟を脱退した方が國際政局を悪化せしめざる點に於ても、強國の襟度を示す點に於ても反つて有利ではあるまいか。

脱退しても二年間……はと云ふ學者も居るが、夫は政治の何たるかを解しない人々の云ふことである。委任統治地域の問題があるが、之等地域は五大國に屬すると解すべきである、五大國が日本の統治に委せた以上之を變更するのは五大國の全會一致の決議に依らねばならぬ。日本から該地域を取揚げやうとする提案に日本が賛成する筈はない。後は物理力の問題である。尙ほ聯盟が嘗て「アルメニア」地方を米國の委任統治に委せむと欲したるに鑑みれば、聯盟たることは受任國たるの要件でないと思える。C式委任統治地域たる南洋諸島は、戰爭中日本と同盟國との間に結ばれたヤップ島處分に關する了解に基き、領土の構成部分として日本に配分せられたものであつて、再審議を許すべきではあるまい。どの道日本は同盟國の一員として從來の獨領を共有し、其の五分の一の持分を享受する權利を常に有するものである。

マハンは云ふ「自分の動機が正しいと信ずる者は、人よりも十倍多く武装しなければならぬ」と。委任統治制度に關しては高尚なことが規約第二十二條第一項から第三項迄に書いてあるが「眞面目な滑稽」とはこんなことを云ふのであらう。ウイルソンの非併合非賠償に釣られて獨逸は休戰を申込んだ、其の植民地を取上げる以上何とかウイルソンの顔を立て、處分せねばならぬ、委任統治國の決定は假裝せる領土權の分配と解して差支ない。C式に於ては絶對に此の見方は正しい。即ち南洋諸島は日本領土の構成部分である。聯盟のやつたことは委任統治條項の決定である。該條項は規約第二十二條第四項以下を分析した基本的行政規則に過ぎないものであつて、理事會の決議の形式となつて居るが、實はどうでもよい事柄である。若し委任統治條項が脱退に依り效力を失ふべきものとすれば脱退後委員統治條項の内容を日本の勅令として公布すればよいのである。

脱退した後のことを心配する人があるかも知れぬ、加入して居たが爲めに何の利益があつたか。云ふ勿れ余輩を憐むで「唯物論者よ」と。國家は法人で靈魂がない。此の期に及んで孤立を慮れる位なら、初から自主的政策など執らず、今までに聯盟の裁判に快く服すべきであつた。それが不可能ならば全世界より孤立する外はない。併し銘記せよ、之は聯盟と云ふ疑似國際主義を基礎とした場合の孤立である。壽府からの孤立である。世界の囂々たる非難も實は疑似國際主義から來る非難である。退いて考ふるに、世界の現實の最底流に於て日本は孤立して居るであらうか。余は反對に信ずる、日本は打倒帝國主義運動に對し國際帝國主義の戰を、即ち一切の強國や植民國の爲めの戰を戰つたのである。故に國際帝國主義の支持は我にある。聯盟理事會の空氣さへ一部之を裏書して居る。特に世界平和の親石たる太

洋國際帝國主義は、米國が極東に於て“Something for nothing”ならまだ我慢しようもあるが、“everything for nothing”と云ふ程度迄慾張り且つ我儘を云はないならば—そして夫は宇宙の法則が許さないのであるが—何時でも時代思潮を捉へて、世界第二次戦争を消散せしむる様に準備して居るに於ておや。

第八 聯盟可塑性の擴張

聯盟の可塑性には寧ろ限度がある事、右可塑性存在の標徴としての米國の聯盟理事會参加に就いては既に述べた。余はなほ右の可塑性が、相當の程度に達することを述べて本稿を結びたいと思ふ。波蘭—リチュアニー間の紛争は波蘭のヂェリゴスキー將軍の軍隊がリチュアニーの國境を越えて其の領土に侵入し、首府「ヴィルナ」を含む一帯の地域を占領したに始まる。勿論リチュアニーは聯盟に訴へ、理事會の席上に於て、由來波蘭に好意を有せぬ英國代表バルフ・ア卿の如きは、顔面朱を注いで波蘭の軍國主義を罵倒した。波蘭代表は止むなく正規軍の行動にあらずと稱して責任を回避するの態度に出た。勿論波蘭とリチュアニーの間には事實上の國境はあつた。しかし法律上の國境は巴里會議中カーゾン線と云ふやうなものが、試案として引かれたのみで其の儘になつて居つた。聯盟から云へば現状をもつて波蘭—リチュアニー間の國境と見做すべき立場に在つたと思はれる。よつてリチュアニーは泣訴して、聯盟の力で首府と人口の大半とを其の領土と共に回復し得むことを嘆願した。爾來ポール・イーマンス君を議長とする小委員會が出来、軍事専門家よりなる現地調査委員を任命し實狀の調査も行つた。然るに結局は聯盟の「イデオロギー」

よりは宇宙の物理的法則の支配する通りに現實を認めて之を合法化するより外なかつた。リチュアニーは今日でも波蘭とリチュアニーの間に戦争状態が繼續すると聲明し、其の失はれたる多數民族を回復せむと空しく念じて居るのである。

此の事件において、聯盟の示した弾力性は相當大なるものがあつた。コルフ事件の如きも亦、聯盟出生後多數の戦争が行はれ、多數の政治條約の結ばれた如きことも、聯盟の可塑性發揮の他の事例である。故に聯盟が滿洲國の成立、其の日本の法律上の承認と云ふ事實を支那の抗議の前に丸呑みにしたとしても、夫は五十歩、六十歩の相違に過ぎないとも主張し得る。然るに此の際、日本に取つて不幸なことには聯盟の弾力性を阻止する數個の原因がある。滿洲國が日本の三倍もある大地域であることは其の一である。米國の聯盟参加は其の二である。米國に追隨して合法性否認政策を聯盟が掲げて居ることは其の三である。米國参加の結果規約ばかりでなく不戰條約や九ヶ國條約迄引合に出されて居ることは其の四である。理事會のみならず總會にまで事件が繼續して居ることは其の五である。かく觀じ來れば聯盟が其の可塑性を百尺竿頭更に一步を進めることは頗る困難と云はねばならぬ。従つて聯盟としては其の機關人格に相應はしい國際主義的（疑似）解決案を提示するに決つて居る。例へば支那に名のみを宗主權を認め、滿洲を大なる自治權を享有する自治團體となし、以て日本の特殊權益伸長に資すべしと云ふ説の如きが之である。然るに日本は母國を焦土となすとも滿洲國は之を承認すると聲明して自主的政策の貫徹を期して居るから、吾人は其處に存在する不兩立を看取しなわけに行かぬ。

聯盟に於ける日本の自主的自己清算の爲めの聯盟脱退か、將又聯盟の破滅を救ふ爲めに聯盟可塑性の極度の發揮か。吾人は客觀的狀勢に考へ、純理上は尠くも日本が聯盟脱退に依て局を結ぶ可能性の方が寧ろ多いと判斷するものである。而して此の判斷が實證せらるべきものなりとすれば、滿洲國承認の日に於て聯盟脱退の舉に出づるの果敢なる措置に出で、無言に併し眞實に平和の親石となつて居る國際帝國主義、特に太平洋國際帝國主義を以て時代思潮を捉へる爲め、外交上の努力を特派大使米國派遣と云ふ様な方面に向け、以て難局打開の方策に出づる方が一層賢明ではあるまいか。(昭和七年九月)

第七章 「リットン」報告の教訓

認識は判斷であつて、判斷は主觀に依り制約せられるが故に、リットン委員會が如何なる報告を作成するかは、謂はば聯盟の機關人格に鑑み充分既知の事實であつた。而して右報告の結論とも云ふべき第九章と第十章とが、他の第一章乃至第八章と風馬牛相關する所尠きは右事實を立證するものと云はねばならぬ。右結論の前提たる第九章は、日支双方の利益と兩立し、ソヴィエト聯邦の利益に反せず、聯盟規約、不戰條約、九ヶ國條約と一致し、日本の在滿の權益を認め、日支兩國間に新條約關係を成立せしめ、將來の紛争解決に對する保障を供し、滿洲に廣汎なる自治權を認め、其の内部的秩序維持と外部的侵略排除とに備へ、日支の經濟的提携を促進し、支那の改造に對する國際的協力を確保することを以て満足なる解決の條件となし、之等の前提より出發して、日本の權益確保を目的とする條約の締結、新日支通商條約の締結、不侵略及び紛争平和處理條約の締結、滿洲の自治權確立、日本の撤兵、地方憲兵隊の組織に依る治安の維持及び過渡的國際管理等を提唱して居る。

以上の提言が聯盟と云ふ國際機關に相應しいものであり、又第一章乃至第八章に於て委員會が努めて公平ならむと欲して、帝國に相當有利なる記述をなして居ることも亦之を認めねばならぬ。けれども滿蒙に關して本來他國や國際機關の干渉を無制限に肯定する様な漂流政策を執つて來たのは間違である。何となれば滿蒙が我が勢力範圍たることは客觀的事實にして、此の事實が日本の民族生活に織込まれて居るからである。加之、石井・ランシング協定を締結

し、規約第二十一條にモンロー主義に關する留保がある所に「其の他平和の維持を目的とする地方的了解」なる留保もあつて、石井・ランシング協定は之に該當し、我國は不明確ながら一應滿蒙を聯盟規約から除外したのである。従つて支那が規約から「其の他平和の維持を目的とする地方的了解」なる字句を削らむと提議した際、我が鳩山秀夫博士が王寵惠氏と一騎打の抗争をやつて支那の提議を排除したのである。滿蒙の除外例と云ふことを完全に承認させるか、多邊的平和條約に不参加の態度を執るか、日本としては十五年前から態度を決しなければならなかつたのである。而して今度の聯盟總會に於て、始めて此の除外例の主張を貫徹せむと大童の努力をなし、多少の成功を収めつゝあることは兎に角慶賀に堪へない所である。斯様に日本が自主的方針の貫徹に邁進する以上、國際主義的解決を策するリットン報告の廢紙化は蓋し當然のこと、云はねばならぬ。又第九章第十章の提案を實行したら、日本の利益と風馬牛相聞せざる國際管理の實行となり、如何なる紛糾を來すや量り知るべからざるものがある、斷々乎として排撃し去るべきは勿論である。尙ほ又第一章第二章の内帝國の行動は自衛權の發動なりと斷言せる帝國の聲明に反對し、或は滿洲國の誕生は滿洲三千萬大衆の自發的民族自決主義の結果なりとの我が主張を否認せる如きは、どの道帝國の排撃せねばならぬ所である。而して之等の點は過去二ヶ月間に於て帝國內の論策家に依り充分論議し盡されたる所なるが故に、本稿に於ては餘り之等の點に深入りすることを避けやうと思ふ。

之に反しリットン報告中には、我々の取つて以て他山の石となすべき多くの論點が含まれて居る。而して之等の點に就ては今迄學者の之に論及せる者を見ざるが故に、余は聊か氣附きたる點を指摘して、讀者の参考に供したいと思

ふのである。

一 第一章二十六頁（外務省刊行『The Report of the Commission of Enquiry of the League of Nations into the Sino-Japanese Dispute』）に於てリットン委員会は「支那は組織せられたる國家にあらず」、「支那は完全の混亂状態及び想像も及ばざる無政府状態に在り」、従つて支那は聯盟國たるの資格なく、規約の保護を享有する資格なしとの批評に拘はらず、支那は兎に角過渡期を経過して相當の進歩を遂げた。而して特に吾人の記憶せざるべからざることは華盛頓會議に於て、一切の參加國が全く以上の非難とは全く異なる態度を執れること、是である。併も當時支那政權は分裂し、北京と廣東とに二個の政府ありて匪賊は横行し、内亂に對する戦備は充實せられ、華盛頓會議進行中北京政府は顛覆せられ、張作霖は獨立を宣言したりと云つて居る。尙ほ同委員會の指摘せる如く、支那が五個の租借地中二個を回收し、多くの租界を回收し、東支鐵道附屬地行政權を回收し、關稅自主權、郵政權を回復し、平等條約締結の氣運を齎したのは、一切華盛頓會議の成果に因る支那民族覺醒運動の結果と見做すべきものである。

以上委員會の陳述は帝國政府が米國政府に宛てた公文中に、九ヶ國條約の規定は一つの擬制であつて、擬制は長く永續するものにあらずと述べたるものと全く合致するものであつて、余は委員會の陳述が常に最眞最強の現實を認識して、之を土臺として政策を立てよ、然らざれば近き將來に於て該政策は其の成果と共に顛落し、禍を後日に殘すべきことを吾人に教へたものであると解する。過般の聯盟理事會及び總會に於て帝國代表は完膚なき迄に支那の現實を暴露し、滿洲事變に關し帝國臣民が云はむと欲することを最も力強く大膽に聲明し、其の結果は反て列強の誤解を去り

認識を深め、一見して胸裡に描かるゝ程左程に日本が無理をして居らなかつたことを感得せしめるに役立つたものゝ如くである。然らば不買同盟や萬寶山事件や中村大尉事件を一々聯盟に持出さずとも、巴里會議以降折にふれ、機に乗じ、滿洲の除外例たるべきことゝ、支那に對する我國の關心とを披瀝して置くことに依つて、壽府に於ても其の他に於ても、一層有利な景團氣が形成されたものと思惟せらるゝのである。

二 リットン委員會報告は、第二章第四四頁に於て支那農民の土地占據と題して述べて居る。滿洲は先づ露國の管理に歸し、後日本と露國と折半して政治的及び資本主義經濟的に之が開發に任じて來た、従つて世界の耳目には日本及び露國の活動のみが眼に立つた。然るに其の間滿洲の開發に連れ、數百萬の支那農民、特に山東省より來る移入民は陸續として此の地に定住占據し、平和的に、不知不識の間に併も現實的に土地を占有し、日露兩國政府が勢力範圍の協定に没頭して居る間に、滿洲を二度と變更出來ぬ迄に支那化した。斯くの如き状態の下に在りては、主權を回復する爲め支那は隱忍して時期を待つことが出来る。併も其の時期は早目に到來し、支那は露國の革命に乗じ北滿を露國より回收し、次で全滿に互りて敏活なる政治的活動を開始し、南滿より日本の勢力を驅逐せむと試み、日支の衝突を激成し、果ては滿洲事變となつたと述べて居る。

余は嘗て日本が滿洲の支那本部化を助成したことを論斷したのであるが、委員會は此の點を特に重視して居る。故に後藤伯の如きは大規模の移民計畫を立てたのであるが、支那側より來る政治的抵抗と經濟上の障壁よりして成功しなかつた。史家モンゼンが「武力に依りて克ち得た領土は何時か失はれるが、鋤に依りて得たるものは永久に失はれない」と云つたのは明白なる眞理であつて、事實上日本の支那一部の支配、支那の朝鮮に及ぼせる支配權等は遂に永續しなかつたのである。之に鑑みれば移民問題に非常の重要性があつて、帝國は生存の必要上滿洲を今や一種の保護國として居るのであるが、此の事實は今迄のところ、尠しも支那人の滿洲占據なる事實を變更して居らないのである。經濟上移民は生活標準の低き國より高き國に赴くべきであるが、此の場合之等の困難を排し、移民を努めて植付くるは勿論、資本主義の進出し、産業を開發するに當りては是非とも資本と同時に日本労働者を拉致するの必要がある。若し此の點を閉却するならば、日本歴史の中世に於て政權が公卿の手より武家の手に移つたと同様に、救ふべからざる事態の起り得ることを余は大聲疾呼して當局に警告するものである。

三 委員會の報告は第四十八頁に於て、支那本部征服後滿洲朝廷は支那の重要都市に守備兵を配備し、滿洲人の或る職業に従事するを禁止し、滿漢人相互間の結婚を禁止し、漢人の滿洲及び蒙古に移住するを禁止した。之等の手段は政治的考慮に出でたるもので、民族の差別待遇を意味せず、専ら滿洲朝廷の永續を確保せむと期したものである。之が爲め一方滿洲民族は散亂し減少し、漢人に同化され、他方支那移民は追々に奉天省に侵入し、移入民禁止は徐々に緩和せられ、漢民族と滿洲族とは追々に混血し、漢人に同化せざる蒙古族は追々邊陲の地に追ひ詰められ、露國の侵入後は滿洲朝廷は積極的に漢族の滿洲移住を奨励し、一九一一年の革命當時に於ては滿洲の人口は千八百萬人となつたと述べて居る。

帝國の學者が歴史上の考證を基礎として、滿洲は支那にあらずと云ひ、松岡洋右氏の「動く滿蒙」にも滿洲は清朝

の皇領の如きものであると記述してあつて、此點は勿論目下の如き國際紛争に當り力説せられねばならぬ所であらうが、併し夫れにも拘はらず、以上の記述は純粹な滿洲人なるもの、勢力の餘り大ならざること、漢民族の繁殖力の大きなこと、漢民族文化の同化力の大きなこと、而してリットン報告も既に指摘せるが如く、民族的には滿洲の漢民族的色彩の極めて強きことを吾人は確認して、此の上に政策を樹立せねばならぬことを吾人に教へてゐる。どの道日本人の移住は必要である。滿洲族を糾合し、出來得れば之を支配階級に高めること。共和政治よりは王朝を擇ぶべきこと。斯くの如くして、滿洲國の中華民國に對する特異性を強調せしむることが日本移民、日本文化普及等と相俟つて稍々滿洲國を鞏固な永續的基礎に置き得るのである。

四 リットン報告は第六〇頁に於て日清戰爭後、露國が率先して三國干涉の舉に出で、遼東半島を支那に還附せしめ、支那を援助して其の償金を返還せしめ、後日本を想定敵國とする露清密約を締結した。而して以上の露國の奉仕に酬ゆる爲め、支那は東清鐵道の敷設を許したのであつて、其餘勢は南滿鐵道の敷設、撫順鑛山の採掘、關東州の租借となつた。之等の事實は露國が之れ見よがしに支那に恩を被せる行動に出でたるに拘はらず、其の内實は後の事實が立證した如く、自己の利益の爲めであつたことを證明して居ると述べて居る。

以上の陳述は日本人として誰知らぬ人なき事實であつて、今更取上げる程の發見でないことは云ふ迄もない。併し余が此の事實を今一度援用する所以は、國際政治に於ける「口實」と「眞實の原因」との間に存する距離の頗る大なることである。學者は戰爭宣言に就いて其の口實と眞實の原因とを檢討し、努めて適確なる後者の把握に成功しようと

して努力して居る。現に三國干涉の時、三國は日本の遼東半島占據は東洋平和に害あるが故に之を返還せよ、と我國に向つて要求したのである。併も事實は全然之に反し、露國が豺狼の慾を遂げむと欲したことに胚胎し、率いては日露戰爭を不可避の状態に措き、極東平和を維持する所か、間もなく極東を戰雲の渦巻く巷と化したのである。以上の事實は再應、口實と眞實の原因と如何に距離が遠いものであるかを明證するものと云はねばならぬ。之は取り立て、云ふ迄もない事であるけれども、世間には犬儒學者と正反對に何でも人の言を信じやうとし、人の動機の純眞を信じやうとする人道家や平和論者がないでもないから特に注意を喚起せむと欲する。

五 リットン委員會は第六七頁に於て協調政策と題し、日露戰爭後間もなく顯著なる協力が日露間に行はれるに至り、日露兩國は北滿と南滿とを區分して各々其の一半を保ち勢力の均勢を保持した、斯くの如きは爾餘の諸國が新に滿洲に對する競争者として登場し、滿洲に喰ひ入り、發言權を獲得せむと欲して、日露と葛藤を惹起せむことを懼れしめたる結果であつて、一九〇七年、一九一〇年、一九一二年、一九一六年の日露協約は皆斯くの如き目的を以つて生れたのであると述べて居る。

同報告はまた第六八頁に於て露西亞革命の日本に及ぼせる影響と題し、露國革命及び露國の對支政策の轉換は從前の日露協定を粉碎し、日本の西伯利亞出兵、露國及び第三インターナシヨナル及び支那の一切の帝國主義に對する宣戰、露國の外蒙占據は日本をして再び露國に對し危惧の念を抱かしめ、日本をして滿洲國を緩衝地帯となさむとの決意を堅めしめたと云つて居る。

以上の記述の内に如何なる教訓を余は發見するやと云ふに、國と國との同盟は絶對的に本質的のものではなく、國策の具として想定せられるものであつて、其の内に實行力があるとした所で夫れは自衛を全うせむが爲めに他衛の責任を負ふのであつて、他衛は實に自衛の擴張に外ならない。聯盟規約の如きは決して本質的の國際聯合でなく、愈々となれば各國は皆自國の利益の指示する所に従つて行動するのである。此の事實は今次の聯盟理事會及び總會を見てさへ解るのである。而して一層有效の保障たる同盟さへ効力を發揮しないことは往々であつて、同盟國たりし獨、伊は世界大戰中相戦ひ、今日に於ては獨、伊は又も佛國を對象として強固なる了解を形成して居るのである。他面佛獨の如く必然的想定敵國關係に近くカイヨーの親獨政策が成功しない例もあるが寧ろ之は少數の事例に屬する。

以上は國家が環境に従つて如何に迅速に其の政策を轉換して行くかを示すものである。日英同盟が二十年間にして跡を絶つたのも偶然でなく、ポーツマス條約の翌日から日米は相反噬して來て居るが、日米双方の考へ様一つで國交を元に復すことが出來得るのである。外交政治家の深く心すべきことである。

六 リットン報告は第三章第六九—七一頁に於て、日本が露國の權益を繼承確保し、朝鮮を併合し、一九一五年の條約及び交換公文によつて關東州租借滿鐵經營權の延長、商租權の獲得、其他二、三の待望權を得、關東州に於ける實際上の主權の全部を行使し、主要都市の行政を掌り、駐兵權を行使したのであつて、滿洲に於ける日支間の政治、經濟及び法律關係の特殊性は明瞭で、斯くの如き事例は米國の統制するカリビアン海地方等は勿論、世界何處にも其の例なく、隣邦人の領土内に此の如き廣汎なる經濟上及び行政上の特權を有する例は他に比類を見ないと論斷して、

滿洲の特殊性を力説して居る。

此の事實は勿論日本政府の認識して居らねばならない事項であつて、其の認識は最近露府に於て遺憾なく全世界の面前に公表せられたのであるが、既に一度本稿に於て余の觸れた如く、今迄此の滿洲の特殊性を高調力説することが足らず、華府會議の九國條約及びルフト決議案に従へば右特殊性は完全に抹殺されて居り、其の結果米、支は早晚日本の特種權益が解消することを公然と期待し、帝國の一部には滿蒙拋棄苦しからずと唱へ、ランシング等の口吻其儘を猿真似して、日本の特殊權益は門戶開放主義の適用の結果として其の基礎の上に依存するものなりと解する傾向を看取し得る様になつた。米國人は「門戶開放」と「不可侵」とを同一に解する癖があるが、前者は通商上の最惠國待遇を意味し、後者は政治問題であつて、支那には、特に滿洲には不可侵は存在しないのである。故に帝國としては通商上の門戶開放を容認すると同時に、政治上の滿洲の特異性を高調力説し、規約、九國條約、不戰條約の何れに對しても明確なる除外例を要求し、政治上の門戶閉鎖を宣言すべきであつた。遅きは嘗てなさざるに優る、而してリットン報告に依り將來は一層我が滿洲の特殊性を主張する國際的の論據が出來たのである。此の點に於て人も認むる如くリットン報告は吾人に一つの奉仕をなしたものと云ふべきである。

七 リットン報告第七二—七五頁に於て、日本の滿洲に於ける利益が他國の夫れと本質及び程度に於て全く相違せることを指摘したる後、日本が乾坤一擲の日露戰爭を戦ひ、遼東半島を折角獲得しながら三國干涉の爲めに返還を餘儀なくされたるを遺憾とし、現在の日本の權益位は當然過ぎる程當然と考へ、支那四億民衆の團結奮起、其の露國

との提携及び不逞朝鮮人との合作に依り起り得べき危険につき深甚の關心を持ち、爲めに滿洲を生命線と呼び、之を以て緩衝地帯となさむとすることを擧示し、「特殊地位」なる用語が日本人の愛國的感情、國防上の必要、例外的なる條約上の權利は勿論、日露戦役の遺産たる感情及び歴史的聯想並に最近四半世紀間に於ける在滿日本企業の結果に對する矜持をも含み、併も此の用語は其の意味不明瞭にして、他の諸國が外交文書に依り之を認むることは不可能にあらざるとするも頗る困難なるは當然のことである。併も九ヶ國條約に於ては日本の要求たる「特殊地位」、「特殊勢力及び利益」又は「最高の利益」は挑戦せられ、廣き範圍に互りて否定せられたと云つて居る。

見るべし、リットン報告が帝國政府の當然云ふべくして徹底的に闡明せざりし事項を闡明して餘蘊なく、日本に一大奉仕をなして居ることを。實際特殊地位と云ふ様な言葉は頗る曖昧であり、極めて薄弱なる地位や權利、例へば日本の福建に於ける不割讓條約上の權利をも此の言葉で表明し得るのであつて、特殊地位、特殊利益と云ふが如き言辭は、外交上の用語として誠に不充分である。最近生命線と云ふ様な語が出来たのも之が爲めであつて、米國にモンロー主義、明白なる運命、カリビアン海政策、門戸開放主義、不可侵の原則等があるに比すれば誠に物足りないのである。例へば國防上の賭戦地域、經濟上の生命線、人口問題に對する安全瓣、今日の狀勢から云へば國際法上の一種の保護國等の名稱を使用して帝國の特殊地位の如何に特殊であるかを強調すべきであると信ずる。

唯茲に繰返し一言して置きたいのは、聯盟のイデオロギーから云へば日本が孤立し、現實から云へば日本の要求が支持を受くべく、而して壽府に於ても日本が東洋に利益を有する一切の國より寧ろ支持せられて居ると云ふことは吾

人の反省すべき事柄であつて、露國の第三インターナシヨナルが歐洲に於て階級闘争を、亞細亞に於て被壓迫民族の解放即ち一切の帝國主義、植民國の打倒を提唱し、支那が之に共鳴して打倒帝國主義を標榜し、支那が一切の九ヶ國條約國に對する共通の脅威となつて居るからこそ、日本が内實彼等の支持を得たのである。然るに邦人一部の愛國者中、亞細亞モンロー主義を唱へ、亞細亞民族の解放を叫び、亞細亞に於ける歐米植民國の放逐を主張し、日本主義なる言葉を以て汎獨政策に近き絶對帝國主義の迷妄に陥らむとして居るのは、反つて國家を禍するに至るなきやを吾人は深く憂ふるのである。

八 リットン報告は度々日、支の政策が根本的に矛盾し、衝突の必然性を豫言して居るのであるが、第三章第一三〇頁に於て次のやうに述べて居る。

一九三一年八月末頃迄ニ滿洲ヲ挿挾ムデノ日支關係ハ本章記述ノ幾多ノ紛議及事件ノ結果著シク緊張シテ來タ、兩國間ニ三百ノ懸案アリ、且之等事件ヲ處理スベキ平和的手段ガ當事國ノ一方ニ依リ利用シ盡サレタリトノ主張ニ就テハ充分ナル實證ヲ得ナイガ、此等ノ所謂懸案ハ根本的ニ調和シ得ザル政策ニ基ク一層廣汎ナル問題ヨリ派生セル事態デアツタ。日支兩國ハ各他方ガ日支協定ノ規定ヲ侵害シ勝手ニ解釋シ、又ハ無視セリト責ムルモ、兩者何レモ他方ニ對シ當然苦情ヲ言出シ得ル狀態ニアツタ。

戰爭とは互に屈服せざらむとする正反對の方向に進行する二個の民族意思の葛藤である。一發の砲聲で戰爭の有無や侵略の有無を判定し得べきものでない。余は慢性的戰爭又は潜在的戰爭の存在を認めむと欲するものであつて、此

の見地より余は昨秋の滿洲事變の勃發を豫言し得た。加之一般識者にして國事を憂ふるものは何事か、滿洲に於いて醗酵せられつゝあるを感得した次第であつた。而して斯くの如き實情に對し帝國政府が相當認識不足であり、相當無準備であつたかの如く見えないでもないことは痛嘆の外はない。憂國の志士は須らくリットン報告の暗示にも鑑み、吾人の頗る高價に贖ひ得たる經驗を將來有意義に活用すべきである。

九 リットン委員會は第六章中一八六頁に於て次の様に述べて居る。

支那人ノ認ムル共同生活上ノ義務ハ國家ニ對スルヨリモ寧ロ家族、地方又ハ個人ニ對スルモノデアル。西洋流ノ愛國心ハ支那ニテハ今日漸ク感得セラレ始メタルニ過ギナイ。職業組合、協會、盟、及軍隊等皆或ル個人的指導者ニ從フヲ例トシテ居ル。斯ルガ故ニ説得又ハ強制ニ依リテ、或ル特定ノ指揮者ノ支持ヲ得ルトキハ、右指導者ノ系統ニ屬スル者ノ支持モ亦自ラ得ラルルコトナルノデアル、……小數有力者ノ働キハ最終ノ階梯ヲ完成スル爲ニ用ヒラレタノデアル。

此の點で筆者の一言して置きたいことは、外部より見て何等かの想定敵國なく敵國外患の注意を惹くものがなければ、自然に國家は情眠状態に陥る傾向があることである。又内部より見れば國家將又民族全體の統制力が弱い場合には、一黨一派の利益に偏する政治が行はれ易く、生存競争が餘りに激甚に過ぐることも亦、國內に前述の支那のやうな狀勢を招徠するに役立つものである。幸に我國には民族に内在して而も普遍的超越的なる信仰及び權威の中心があり、世界の學者は實に之を羨むで居る次第である。民族を階級闘争の巷と化せむとする社會主義は、最近英國勞働黨

の分裂に鑑み、英國に於てすら勝利を得ないことは自明の理で、我國に於ては一層然りである。部分を知りて全体を知らざる——之は一切人が常に冒しつゝある過失であるが——學徒の狂奔を戒むる所以である。

一〇 リットン報告は第七章第二三四頁に於て日支關係に及ぼせるボイコットの心理的影響と題し、日本の輿論は日本が蒙りつゝある損害に對し、自らを保護すること能はざるを知りて憤激してゐる。委員會が大阪に於て會見せる商人等は亂暴狼籍脅喝の如き不買同盟手段の濫用を餘りに重大視し、日本の對支政策と右政策に對する防禦的武器としての不買同盟實施との間に存する密接なる關係を輕視し又は之を否定する傾向がある。大阪商人は不買同盟を支那の防禦的武器とは見ず、之を以て侵略行爲であるとなし、之が報復として日本が軍事行動を執つたのであると主張して居る云々と述べて居る。

此の點に關聯して余の述べたいことは、將來時局平靜に歸する場合は兎に角、或る程度の強力手段の使用せらるゝ前後、相當の期間中は我が對滿自主的政策の遂行と滿洲以外の我が通商上の利益を確保することとは到底兩立することが出來ず、支那本部に於ける貿易上の逆潮の來ることは當然豫期せねばならず、此の逆潮に焦燥するやうでは國策が確立して居るとは云はれまい。滿洲に對する我が貿易は將來漸増する運命にあるものと見なければならず、我が滿洲治安維持は必然的に北支を平靜ならしめ、其の方面への輸出をも期待し得るのである。従つて余輩は嘗て帝國政府が採用したる積極政策が、一部商工業者の最初の悲鳴に依て變改された様なこととの絶對になきことを望んでやまぬ。

リットン報告は勿論用ふべからざるものなりとは云へ、觀じ來れば同報告の認識は一面又頗る充實して居る點の存

在するものと云はなければならぬ、又日本の所謂識者の大部分は、滿洲に關し種々の材料を基礎として種々の判断を下す、相對立する諸種の意見を今迄に聞かされ、而も之を篩ひ分ける透徹せる客觀的認識を持つて居たであらうか、余は頗る之を疑ふのである。之に比すればリットン報告中の極東狀勢に關する大綱の認識は中々隅に置けないものであつて、余輩は我國の朝野が此の高價なる文書中より澤山の他山の石を發見し、外政の刷新に資せむことを要望して止まない次第である。(昭和七年三月)

第八章 理想主義の顛落

不遇に生れ不遇に生き、長き流浪の「ルンペン」生活に人生の苦杯を味ひ竭して、而も樂天的な人生觀と快活剽輕とを失はず、寧ろ晩年に於て漸く名を成したオリヴァー・ゴールドスマスは、其の著「世界市民の書翰」中に、主人公をして次の如く云はしめて居る。

人間は快樂主義派の者がさう信じて居たやうに、天が悪漢を罰する爲めに雷霆を用意して待つて居ないと云ふことを覺るならば、何をするか知れたものでない。……神に對する義務將又德行夫れ自身の憧憬の爲めに善を爲し徳を積む者一人に對し、只管罰を恐るゝが故に善を行ふ者は一萬人も在る。……人間の「虚傲な理性」は唯人間を迷路に誘ひ込むに役立ち、感官的本能こそ反つて幸福に至るの道を指し示すものである。

余が中學時代に讀んだ英語讀本の内に「空中の樓閣」と云ふ一文があつた、出世成功の夢幻を追ふ若人が、王侯の位に登つて金殿玉樓に住む身分となり、隣國の王女を迎へて妃と爲した迄はよかつたが、妃が從順でないのに憤を發して、之を蹴飛ばすすみにランプか何かを顛倒した話を讀むだことを余は今尙覺えて居る。「ラフマントン」の牛乳賣の娘が頭に壺を載せて町に赴く途中、養雞、牧牛で大いに儲けて華美な衣服を購ひ、それを着て盛場に出て、寄り添うて來る男に眩鐵砲を喰はせると夢みて、其のはすみに壺を顛倒した話も亦人口に膾炙せられてゐる。

然るに非常に多くの人が非常に多くの場合に、部分に關する智識、一面的の認識を直ちに「虚傲な理性」の機械機械

に掛けて、或は主義或は統一原理に高めて行き、思惟と事物との不一致を現實暴露に直面して知覚する迄の過程に於て、憐むべき理想主義の顛落劇を演ずるのは誠に慨嘆に堪へない。用字は不適當だが思想統制の必要も肯定し得らるゝのである。論理的價値の偏重に墮した新カント派に對立した人生哲學より展開し來つた現象學派は、當爲が存在に孕まれ、存在を出でて又存在に復歸することを説いて居る。之は誠に世界大戰後の國際政治現象に對する頂門の一針であり、最近十年間の歴史の一切は殆んど架空的に構成せられた理想主義の顛落の過程であつた。而も之が爲めに多大の犠牲が―特に著しく日本に於て―拂はれたことを思ふときに、吾人は中道への歸還、實相の把握、純粹意識への還元を叫ばざるを得ない。

ゴールド・スマスの世界市民は、北京よりモスコウに旅する途上、惡靈を拜し、死人に饗宴を強ゆる蠻人を目撃したが、深く考へて見れば今の世に此の蠻人ならざる民族が世界に幾つあるか。露國のマルキシストたる指導者は唯物論的觀念論―變に聞えるかも知れぬが―に従つて共產革命を敢行した。後に新經濟政策、新々經濟政策を経て、過剰収益、小工場、小農場の私有、財産の相続を認めて居る。有機的に社會主義に推移した英國労働黨の頗る限られたる國家社會主義と何處に本質的の相違があらう。佛蘭西革命の後に佛國人は逸早く皇帝を迎へた。眞に深く省察する佛國の識者は、若し佛國に大革命なかりしならむには如何程佛國人の望望は世界に於て重きをなし、佛國人は幸福であつたらうと悔むで居る。今日に至りては佛國共和政治の基礎は漸く鞏固を加へたが、結局カモフラードせる英雄政治ならざる國が世界の何處にあらう。英國労働黨のイデオロギーは英國の資本主義者から労働者の徒食費を最早搾取し得

なくなつた瞬間に顛落した。全民族の進路とすの外に選擇の餘地を有しなかつたマクドナルド等は、遂に彼等のイデオロギーを尠くも一部清算した。輒近我國の社會民衆黨は國家社會主義に轉換した。之は既に過去に於て何十回となく顛落した「労働階級の國際主義」の虚妄を漸く認識し得た結果であつて“better late than never”とは云く、迂濶眞に憐むべきではあるまいか。ウイルソンの理想主義は、否寧ろ其の墮落せる體現たる聯盟規約はモンロー主義の前に死産に終つて、米國に對し禍を殘さなかつたが、米國人の利益と其の感情的理想主義とに妥當する不戰條約や九國條約は東洋に一大禍亂を發生し、春日の胡蝶の様な氣輕さで、自己の足場をも知らず、國際主義否寧ろ飽和國の國策の具たる右諸條約に加盟した我國を死線に彷徨せしむるに至つた。世界大戰後の支那を深く知る者は、必ずや露國カラハンの浦鹽宣言と米國の感情的理想主義とが如何に極端に支那人の排外熱を煽り、輕日侮日思想を漫溢せしめたかを知つて居る。日本政府は最近の聯盟理事會宛の公文中に於て擬制は永續せずと喝破した、若し我が政府が擬制即ち理想主義の弊害を卒直に摘發し、斯る爆發性の危險物を作り上げることが回避したならば、日本人も支那人も今回の事變より免がれ得たであらう。而して昨今我等の代表が、壽府に集まれる狂信的平和主義者の認識不足を指摘し、夢幻の殿堂を出でて現實を直視せよと大聲叱呼しなくてもすんだであらう。人類が自ら至善に止まらむとする感官的本能に節制を強いて、法外の脱線をする所謂理性なるものに統制を加へないのは奇怪である。如何に多くの罪が自由の名に於て犯されたであらう、如何に多くの過誤が理性の名に於て思惟の迷妄に依りて犯されたであらう。

以上述べた所を明解した讀者には、余輩が新滿洲國の産婆役、將又後見人を以て任する寧ろ年少氣鋭にして經驗に

乏しき同胞に寄せむとする言葉を把握すること容易でなければならぬ。吾人は嘗て此の地上にユートピアの實現した例を知らない。如何に選ばれた民族が、如何に有利なる環境に置かれた場合にも、理想國は嘗て此の世に建設せられなかつたのである。亞米利加人が亞米利加人の爲す事は何でも成功すると信じて能率主義、機械化主義、動力化主義で第二の産業革命を成し遂げ、勞働者は其の高く支拂はるゝ賃銀を見て、勞働爭議どころか反つてマンモンを崇拜し、勞働は單純機械化したけれども、勞働時間其の他の條件が改善して行つたので、米國勞働者は世界工人仲間の貴族となり、彼等は満足をして、一九二四年に彼等の生活標準を低下せむとする外國移民の入國制限を歓迎し、米國に不完全ながらクロボトキンの理想とする生産力の旺盛な社會が出現したと思つたら、其の翌日此の不景氣である。生産力を約半減し、千三百萬人の失業者を歸農させなければ社會の均勢はとれぬ。世の中は斯様に萬事相對的である。然るに無花果實らず、蜂蜜牛乳の流るゝことなき滿洲に、今迄寧ろ棄てられたる雜種の民族を以てパラダイスを、王道樂土を築き上げむと揚言するが如き迷妄にあらずして何ぞ。人間の健忘症なることや、物理力發動の現實を暴露したる其の翌日に於て斯の如き空中樓閣を描く者多からむとは。卿等は信じて得るや魔術師の細杖の一切の凡愚が沙門となり、一切の小人が君子となることを。去つて東郊の古老に問へ、汝は王道主義の滿洲國を謳歌するかと、彼は恐らく答へて云ふかも知れぬ、自ら耕して食ひ井を掘りて飲む、帝力我に於て何かあらむと。去つて新國家の必ずしも儀表にあらざる、而して志操堅固ならざる一部例外の比較的高位高官の吏僚に問へ、汝は萬一蓄財したる後安きを居留地又は外國に食ふの意思なきやと、彼は恐らく汝の無分別を憐み、天を仰いで大に笑ふであらう。荒木陸相の云ふが如く

支那人が砂の如きものなりせば、民族自決に依る新國家の誕生も一面に於ては我國實力の發動が外部より粘土を以て之を圍み、水分を供給したる結果にして、一朝策を誤まらば土崩瓦解することなきを何人が保證し得よう。然るに輕卒なる急進論者は母國を忘れて、夢の理想郷滿洲國に心酔し、遽々然として滿洲國の爲めにする租借地其の他の權益の拋棄をさへ無條件に主張するに至つた。聞くが如くんば、若き理想に燃ゆる顧問等は其の理想を微細に分析して之を滿洲國の牧民官に斟酌なく適用し、支那人の本性を矯めむとして、反つて其の干渉に對する怨嗟の聲を擧げしむると云ふことである。之れ誠に思はざるの甚しきものである。若し滿洲新國家を盤石の基礎に置かむと欲せば、之を現實てふ鐵筋コンクリートの上に構成するの必要がある。滿洲國をして王道を敷き徳治を施さしめ、負擔を輕減せしめ、文教を振興せしむるは髓に歓迎すべき重大事である。滿洲國と日本との關係を相互依存の關係に置き、一切の原始産業を開發して原料品及び食料品等の供給地となし、日本の經濟單位の擴大と工業立國政策の樹立と自給自足經濟の確立とを庶幾するは前者に劣らざる程重要な必要事である。然れども、より以上に久遠實成の我が帝國の存立を安固にするのは最大の喫緊事にして、他の一切事は悉く此の終局目的に寄與する程度に於てのみ、其の價値を判斷せらるべきである。

吾人は既に理想主義の顛落劇に飽きて、再び之が再演を目睹するを欲しない。同胞が虚傲なる理想主義の呪咀より解放せしめられむことを望みて止まない。之れ敢て新滿洲國の後見人を以て任ずるの士に苦言を呈し、其の省察を促さむとする所以である。若し讀者にして以上の余の述べたる滿蒙經路の指導精神の大綱を實踐躬行に移すことを知ら

ば、其の時に或は初めて滿洲事變の犠牲が徒爾ならざりしことを吾人は安心して認識し得るであらう。

(昭和七年三月)

第九章 國際危局匡救の原理

(太平洋國際帝國主義論)

序説 (自然の理法と人爲法)

日露戦争後、日本が滿洲に蟠踞して其の權益を繼承し、國民經濟の機構に此の地を織込んで以來、漠然と門戸開放主義の名に依りて表明せらるゝ米國の極東政策の第一の使徒となれる日本は、忽ち該政策の第一の叛逆者となつた。ホーマー・リーの盲蛇の出版、米國軍艦の示威遊行、ハリマン、ストリート、ノックス等の滿鐵國際化、錦愛鐵道敷設運動の流産、「ジャップは去らざるべからず」てふ運動の高調、根據なき日墨密約説及び日米開戦論を経て、世界大戰に入り、山東、西伯利亞出兵を経て、華盛頓會議、倫敦會議に及び、日本の苦節十年の克己的協調主義は、淺薄なる觀察者には太平洋の大局を救ひ得たと見えたかも知れないのであるが、人類生物學は、米國の開明的自己主義が、極東の實際的平和に極めて有害なることを立證し、滿洲事變勃發と共に、日米間に於ける政策の對立は、遺憾なく暴露せられ、日、米人のみならず、第三國人すら参加して日米戦争戰略論の縱論横議は今日より甚だしきはなく、日米慢性戦争は明に高潮し來つて居る。若し上海事件の折「宿命の日米戦争」を信する日米の軍人の一、兩名が劍を抜い

たならば、世界の大悲劇太平洋戦争、率いて或は世界第二次大戦争は既成事實となつたであらう。斯くの如き重大國際危局に際し、國際平和機關は、恰も公園の一隅に小兒を樂しましむる道化芝居の如く、當事國の政府も亦民間の縱論横議に對し多く導く所なく、僅に焦眉の急を救ひて寧ろ苟安を盜まむとするものゝ如くである。世界平和最大の支柱は仲裁、制裁、軍縮にあらずして、國際政治經濟關係の整調にある。慢性的戦争の根治にある。余輩は此の信念より出發し、國際問題の一學究としての關心と、日本人としての熱情を以つて「實際的平和論者」の立場に立ち、現實且つ效果的に現在の國際危局を全部的に匡救し、其の一部として我國外交國難打開の策を提唱し、世界十八億の人類及び其の指導者、特に世界平和に最大の責任を負へる日、英、米三國の大衆及び政治家に訴へむと欲する。尙ほ斷つて置きたい事は、以下述べむとする所は余個人の主観ではなく、世界の客觀的情勢の深酷なる現實が、如何なる危局匡救策を無言裡に提示して居るか、換言すれば今日の世界的苦惱に對する存在的當爲は何であるかを闡明せむとするに在る。従つて問題の検討は宇宙自然の理法より開始せられねばならぬ。

現代人は文化人としての存在を顯著にするも、其の内奥には「獸としての人間」が尙ほ生動して居る。此の人間又は生物人は自然科学人類動物學として成立し得る。ダーウインは其の進化論を人間に適用出来ることを知つて居た。けれども當時尙ほ宗教が盛であつて、之を云ふのは其の學說の通俗化を妨げる原因となるので彼は沈黙を守つた。其の結果進化論を社會學に應用するの役割はスペンサーに歸した。茲に社會的ダーウイン主義又は文化的動物主義(zoölogischer Darwinismus, Kulturzoölogismus)の據頭するのを見た。然るに文化的人類動物學は、余の知れる限りに於て

は、生理學や、社會學や、經濟學に於て、其の一端に觸るゝのみであつて、完全に把握されて居ない。恐らく倫理學の基礎たる道德的意識の如きも、群團本能、誇示本能、自己否定本能、陶醉本能等に依つて説明せらるゝのであるまゝか。認識は判斷にして判斷は價值判斷なりとすれば、認識の對象と尠くも同一程度に於て、認識の主體、即ち主観が判斷の結果に影響を及ぼすと解せらるべきであつて、此の主観が分析研究に依り克服された後でなければ、前記の判斷の當否も、實は決定出来ないのである。余のマルキシズムに關する批判の結論だけを云へば、マルクスやエンゲルスの唯物史觀、階級闘争、餘剩價值説、資本集積説の如き「^{ハルツァン}半分の眞理」に過ぎないけれども、彼等の所言は人類動物學に觸れる面の廣さに於て相當確實な「半分の眞理」を把握して居るのであつて、彼等の強味は茲に在り、彼等の云ふ所に相當近似したる發展過程を、社會が現に取り來つた所以も茲に存する。併し哲學的基礎づけをしないだけで、ピスマルクやヂスレーリは、此の位の理法否な夫以上を把握して居たのである。ハークスレーの云ふ如く、一面人は自然界に於て或る地位を占めて居り、他面自然は人間の内に頑張つて居るのであるから、自然界の理法、例へば増大の法則、生存競争等の支配を受けることは必然であつて、此の宿命的羈絆より吾人は脱却し得ない。而して人間の運命は、従ふ者を潮に乗せ、逆ふ者を引摺つて盲目的に進行する。此の深酷なる現實の裡に宿る自然理法の支配を余輩は國運と觀じ、此の國運を翼賛するの方途を國策と云はむと欲する。現實の外交問題を論ぜむとするに際して此の言を爲すは誠に迂遠の觀あるべきも、以上の根本的認識は是非必要である。若し然らざらむか、造幣平價と正貨現送點とを棄てたる不換紙幣の對外價值の下落が底止する所を知らないと同様に吾人の判斷も何處迄脱線するか知れたも

のでない。之に反し此の根本的認識があれば、國策は依つて立つ基礎が浮動せず、百八十度の方向轉換がなくて済む。而して國策を樹てる政治家の任務も明確且つ容易となつて來るのである。國運を把握せざる一國行政府の國策が破産し、民族的精神錯亂として發現するのは、當然の歸結と云はねばならぬ。

個我、民族我は、夫々人爲の約束と見做すべき國內法、國際法の支配を受ける。是等の社會的約束は、法理論上の擬制として、其の固有の概念構成の領域に於ては、絶對的效果を有すべきであるが、事實は必ずしも然らずして、例へば米國禁酒法の如き、我國の未成年者禁煙法の如く、空文に屬するものもあつて、余輩の目には社會的約束との對立關係に於て、「宇宙自然の理法の優位の原則」の存在が映する。其の證左は國際條約夫自身の内、將又國際政治現象の内在に在る。例へば石井・ランシング協定に、地理的接近は特殊的利益を産むと云ふ文句がある。之は米國の對墨、對カリビアン海政策と、日本の滿蒙政策とを、相互的に是認したものであるが、實は現實に内在せる自然理法の確認に過ぎないものである。右協定が廢止せられても、右理法は依然として存在を失はぬ。見よ日本も米國も微動だもしないではないか。聯盟規約第十九條は、國際社會に於ける榮枯盛衰の理を部分的に認めて居る。即ち強者が其の強を長じたる場合の方には觸れないが、戰敗國が反對に其の優越權を恢復した場合に付て規定して居る。尙ほ不可抗力の原則、獨逸國際法學者の、必要は法を知らずとの原則、自保權の原則の如きも亦自然の理法が人爲法の内頭を出して居ると認むべきである。尙ほ又國際政治現象の内「宇宙自然理法の優越」を認めしむるに足る多數の事實を發見し得る。例へば嘗て米國國務卿が、西班牙にして其の屬領たりしキューバの叛亂を平定し得ざるに於ては、グロ

テウス以來の國家の平等權はさることながら Jefferson の "Peace, commerce, and honest friendship with all nations, entangling alliances with none." の遺訓はさることながら、米國は "superseded by higher obligations" の餘り、不干涉の原則を拋棄して、斷然直接行動に出でざるを得ないと聲明した事例の如きそれである。不平等條約にはセーブル條約の如く死産に終れるものもありて、其の平均壽命が二年に足らざるの事實の如きも亦、此の原則の表現と看做すべきであらう。要は余輩の創意であるが生命は法よりも強しの一句に盡きると信ずる。以上は一見閑問題の如きも、本編全體の精神を理解する上に於て、極めて重要な事項に屬することを豫め注意して置く。

第一 自然現象としての國家の分類

曾て駐米西班牙公使にして、目下國際聯盟の西班牙理事たるマダリアガ氏は、國家を、(イ)收穫は過去の事實となり最早や花開くことなかるべきもの、例へば瑞典、西班牙、(ロ)圓熟して而も壯年期に在るもの、例へば英國、和蘭、(ハ)充分の收穫を收め今や過熟期オーバーライフネスに入らんとするもの、例へば佛蘭西、白耳義、(ニ)既に全く過熟期に入れるもの、例へば葡萄牙、(ホ)青春期に在りて收穫を未來に期待し得るもの、例へば米國、日本、伊太利の五種類に分類して居る。余輩は國際政治に於ける動向を知る爲めには、以上の分類に倣うて國家を三種類に分類するを適當と考へる。其の第一は飽和國である。總人口二億、世界總人口の九分の一を以つてして、世界總面積の三分の一を領有する英、米は、完成せる帝國主義國、將又自給自足國である。ウィリアム・ペンは、戰爭の原因を維持、添加、恢復の三者

に要約したが、之等の國は爾今維持さへすればよいのであるから、現状維持主義に傾く。廣大無邊の領土と富源とを子孫の増殖する迄、暫く狐に預けて置く民族の本能は、斯くの如き環境に作用する際、一應は必然的に平和主義となつて現はれる。蓋し平和こそ現状維持と云ふ彼等の最大の欲望を充たす條件たるが故である。Bryce: The American Commonwealth. は云つて居る、墨西哥との戦争は奴隸所有階級の仕事で一般大衆の希望に反して居た。米國は自然に發展して行く限界に既に到達して最早領土慾を有せず、外交關係には寧ろ冷淡で、平和的産業主義に安住して居る。自然に具備せる安全の要件に陶醉して大軍備を保有するのを危険と感じて居ると。Siegfried: America Comes of Age. は保守主義は保存すべき何物かを獲得して居る證據である、富貴は保守主義と雁行し、防禦的態度を示すことは漸く丁年に達した標徴であると云つて居る。斯様な環境にある國々が外交上容易なる立場に居り、軍縮運動のみならず、聯盟とか、不戰條約とか、仲裁裁判とか、五月蠅き平和提議が之等の國から爲さるゝのも亦自然の傾向である。併し之等の國々が壽府議定書を拒否し、純正國際主義の一部、例へば人種平等案を拒否し、聯盟より逃避し、不戰條約に廣汎なる留保を附し、自ら提議した仲裁條約の批准を拒否するが如き民族的精神錯亂行爲に出づることも亦、顯著なる附隨現象である。此の附隨現象の生起する理由は間もなく徹底的に剔抉せらるゝであらう。蓋し本章の目的は實に右の精神錯亂を救はむが爲めの老婆心に出づるが故である。

其の第二は未成年帝國主義國である。戦前の獨逸及び今日の伊太利、日本等は正しく之に該當する。之等の國々は自然の約束に従ひ國運の伸長するに伴ひ、此の國運伸長と現状神聖化の傾向ある社會的約束、即ち聯盟規約、不戰條

約等との間に大なる矛盾を生じ易きが故に、必然的に國際的大葛藤に引摺り込まるゝの危険に晒されて居るのであつて、流轉が人生の相なりとすれば、退くにしても進むにしても、其の未完成帝國主義を清算するの必要に迫られて居ることを注意しなければならぬ。従つて之等の國は、第一種の飽和國とは全く異なる外交政策の動向を示すべきであつて、一概に平和運動、軍縮運動等に左袒する能はざること、恰も世界大戰前の獨逸、今日の日本、佛蘭西の如くならざるを得ないのである。併し飽和國が一も二もなく單純無條件に未成年帝國主義國に對抗して、之を壓倒し去らむとあせることが賢明な策かどうかは、頗る深酷なる洞察を必要とする問題である。吾人は間もなく此の重大問題に論及するであらう。

第三種は老朽國、小弱國の類にして、自立して國策を敢行する能はず、例へば和蘭の中立海軍の如く、丁抹の軍備全廢案の如く、他國の國策に追隨して其の安全を謀らむとするが故に、必然的に協調主義に則り、大國特に未成年帝國主義國の鋭鋒を避けむが爲めに、飽和國の外交方針に迎合するを常とする。之れ吾人が最近壽府に於て目撃する現象である。

第二 未成年帝國主義國日本の退轉

第二種の未成年帝國主義國が、如何なる難問題に當面する可能性を持つかは既に述べた。余輩の確信に従へば、國際政治の究極的統一原理は民族主義であつて、外交の聖諦第一義は主觀觀念の客觀觀念化に在る。内在的需要の國際

的當爲化に在る。之れ米國がワシントンの遺訓たる不干渉主義、及びモンロー主義の一本槍にて、今日迄押し通して來た所以である。然るに日露戦争後、日本の朝野は功成り名遂げた勳爵者の様に泰平の氣象講々たる内に、武陵桃源の夢睡に耽り、未成年帝國主義國の危険なる地位に關する認識を缺き、従つて國策の動向は全く不明となつた。従つて一面其の既得權益の確保伸長の爲めに、十全の對策が講ぜられざりしのみならず、世界の客觀的狀勢に合はぬ程の猪突猛進を敢てし、特殊權益は退轉し、勢力範圍は減ぜむとした。他面又は所謂國際主義、實は戦後の反動に乗じた飽和國の開明的利己主義、將又國際主義的民族主義に引摺られて、今日辛うじて明確となつた自國の需要將又國運と矛盾した方向に漂流した。請ふ次に其の證據を示さう。

第一に孫逸仙の第一革命當時でも、袁世凱の帝政準備時代でも、漸次市場として投資地として原料生産地として、日本の經濟機構中に織込まれて來た滿蒙經營の歩武を進むる爲めに乘すべき機會が到來したのに、援助の代償として滿蒙の把握を鞏固にすべきを忘れた。

第二に膠州灣占領後、二十一箇條の要求に於て國運の嚮ふ所を覺らず、猥りに支那全般に覇權を確立せむとして、英國の勢力範圍を縦斷し、滿蒙集中を忘れ、爲めに山東進出の業は大戦後雪崩を打つて退轉した。

第三に、以上の結果として、骨抜きの所謂二十一箇條條約は、巴里會議及び華盛頓會議に於て其の内容極めて空疎となり、顧維鈞君等の乘する所となつた。

第四に故後藤伯の如き、頽勢を既倒に挽回せむと欲して雄圖を伸べむと試みたるも、大概の日本政治家は滿洲の番

犬となつて、其の支那本部化を拱手傍觀した。

第五に折角獲得したる商租權は、施行細則を缺きしが故に、實行手段を缺いた。

第六に米國の指導に依る支那參戰は（表面は日本も勸誘した事になつて居るが）巴里平和會議に於ける日支抗争となり、米國の支那援助となり、戰勝國の一員たる日本は遺憾にも被告扱ひを受け、獨塊は顛落して支那と平等關係に立ち、對支共同戰線の一角は崩れた。

第七に廣東及び長江一帯に於て、國民黨北伐軍に壓迫され、老衰國の悲哀を暴露した英國が、南京事件に際し對支共同出兵を求めた際、近眼にも之を拒否して對支共同戰線恢復の好機を逸した。

第八に聯盟に加入することが未成年帝國主義の立場と相容るゝや否やを究むるに暇なく、何等矛盾の清算を爲すなく、何等の留保をも爲すなくして之に加入し、米國は聯盟不参加でふ實例で教へたにも拘はらず、之に倣はずして十三對一の汚辱を約束した。

第九に何等有效に戰ふことなくしてルートの支那に關する大憲章に引摺込まれ、九ヶ國條約に調印したのみならず、日本の掌中に存した切札のアース・ポイントたる石井・ランシング協定（實は石井・ウイルソン協定にして滿蒙カリビアン海政策に發展せしめ得べき唯一の因子）を惜氣もなく拋棄し、特殊權益の存立を根本から脅威せしめた。

第十に不戰條約に無留保に加入して賭戰地域を確認せしむるの自然的好機會を逸し、今度の事件に際して侵略國呼ばはりせらるゝの因縁を作つた。

第十一に軍縮條約特に國防當局が缺陷ありとなす倫敦條約に加入して、支那の輕日侮日を助長せしめた。

第十二に支那人の著書論文を見れば、氣付かれる事であるのに、社會生物學が日支關係の將來の爲めに何を留意しつゝありしやを覺らずして、輕率にも進歩的態度を持して支那對列國關係を領導せむとした。

以上の如くにして日本の勢力範圍が影淡き存在となりしが故に、他方に於て、前章「國策の復興」に於て述べたるが如く、二十一箇條條約に依る特殊權益の延長、商租權の獲得、石井・ランシング協定の締結、華府會議に於ける特殊權益維持に關する埴原宣言、政友會内閣の滿蒙積極政策、滿蒙に於ける治安維持の責任の負擔の宣言、幣原外相の一般權益と特殊權益との區別の辯等は、何等大勢を挽回するに足らずして國威は傾きかけて來た。

第三 宿命の滿洲事變

余輩は米國の感情的理想主義的支那援助こそ、今次の亞細亞の嵐の究極原因なりと信するも、尙ほ不平等條約の脆弱性、日本國策の不確立、カラハン宣言、支那の容共政策、支那の民族主義運動、特に利權回收の革命外交、支那人の侮日思想、特に主戰論の瀾漫等の助成原因に手傳はれて、日支衝突は必至の勢に置かれた。問題は「汝須らく我が便宜の時期を待つべし」との指令を日本が出すか、支那が出すかの問題であつたのである。宇宙自然の法則を讀み得る者には、此の法則が發するS.O.Sの信號を完全に聞くことが出来る筈であつた。然るに我國朝野は概して埃及の木乃伊の如く眠つて居た。勿論日本人が支那人の作用に反作用を起す力があつたことも原因ではある、日本人が木乃

伊であつたならば反作用は起らぬのみか、不祥の言ではあるが京城に支那の督軍が君臨したかも知れない。故に滿洲事變生起は日本人の反撥力にも因るけれども、其の宿命たるを免れない。此の觀察が正しとせば過去十五年間の日本政府の作爲は、聊か非妥當であつたと申さねばならぬ。

第四 國際危局と日本の外交國難

以上の事實を回顧するときは、當面すべき外交國難の性質は自明である。

一 米國 國際條約は夫れ自身、國際無政府狀態を暴露するに役立つものである。國際條約に於ける自衛權は、政治上の意義を有するものであつて、國際法學者が刑法の自衛權の理論を援用して組立てた學說に制約せらるべきでない。故に日本政府が滿洲事變を自衛權で説明するのは自由であり、其の説明は有効である。恐らく又自保權をも併せ援用し得たであらう。併し米國が反對の見解を取り、日本に吠えついて來ることは、國務卿の人格に關係なく始めより約束されて居た。九ヶ國條約に就いては尙更である。蓋し米國には米國の是なりと認めた極東政策があつて、一八九九年以來之を國際的當爲化せむと努力し、右二條約共其の國策の道具であるからである。果然米國は合法性否認政策（何故に實力を用ひないかは問もなく明かとなる）を以て日本に對抗し來つた。之も所謂二十一箇條條約や、西比利亞出兵以來約束せられたことであつた。

二 露國 露國との關係に於ては、北滿經營進展の結果、露國に傾ける勢力範圍を縱斷することに依りて従前よ

りも日露衝突の可能性が多少増加したことは否定出来ない。勿論日本軍の遠慮、共產露國の消極的態度に依り、日露衝突の蓋然性ありとは云はぬ。けれども隣接國を支配する法則、日露兩國の根本的國家觀念の差異、ルチャンドル博士の云ふ様に第三インターナショナルが氾濫して、全亞細亞半植民地有色人種を赤化せむとする大運動が發展した場合、日本が自然の防波堤たらむとする自然の役割に鑑み、日露衝突の可能性は全然否定出来ないものである。

物理學上二個の物體は同一時に同一場所を占め得ざるが如く、日露の不兩立は、日米不兩立とは聊か趣を異にし、佛伊關係などの様に強國間の紛争であるから、余輩の間もなく主張せむとする國際帝國主義を以つてするも、簡単に救ふことは出来ない性質のものである。支那が之に附け込んで露支同盟を策するが如きは、先例もあり、自然の傾向として用心せねばならぬ。余は日露關係が有機的に整調されるを期待するが、ミールカ將軍が一九三二年二月十日ベステル・ロイド紙に於て、「或は世界の高利貸と第三インターナショナルが（即ち米露兩國が）相棒になつて（日本へ）向つて來ると云ふ様なグロテスクなお芝居にならぬものでもない」と云へるは、必ずしも聞棄てに出来ないものである。

三 支那 政治上の紛糾も、經濟上の依存關係も共に増進する日支關係は、大なるゴーチアン・ノットである。此の兩者の兩立し難きことは、ワシントンの遺訓に、一方通商増進、他方政治的紛糾回避の二項が掲げられてある事實に徴しても明瞭であり、近時の日支關係史も之を明證して居る。日支の協調は頗る困難であつた。滿洲國成立後に於ては稍々其の困難を加ふるであらう。滿洲の政治的權益を救ふ方法で、支那本部の商權を救ひ得ないことは覺悟し

ねばならぬ。惟ふに余輩の外交國難打開策の原理たる國際帝國主義は、之を支那に適用する場合に於ては、成るべくは列強の明示黙示の承認を得て、確乎不拔の國策を立て、自主的に之を發展せしむることであらねばならぬ。けれども太洋國際帝國主義が把握され、時代思潮となつて來れば、亂調子の外力の誘惑なき故、支那は其過半は自然に靜謐に歸する。滿洲國を前にして至難なる日支關係の整調は、深甚の考慮を拂はねばならぬ問題であるが、夫れは稿を新にして論じなければならぬ。何となれば本論に於ては、假に支那を國際政治の客體として取扱ふ建前にして置いたからである。

四 國際聯盟 現狀神聖化の聯盟機構と未成年帝國主義國日本の立場とは本質的に相容れないものである。日本の被告たることは既に約束されてゐた。聯盟は世界平和に影響する一切の事項に干渉する。石井・ランシング協定―其の儼存したる場合に於てさへ聯盟の干渉を排除せしめ得るや否や疑問の餘地あつた―は廢棄せられた。依是聯盟の滿洲事變干渉は明確に約束せられたのである。英誌ラウンド・テーブル誌の一九三二年四月號には次の如く云つて居る。「日支間の滿洲關係條約は列國も聯盟も容喙の限りでないとの議論は、日常の事件に就てなら兎に角、問題の處理が困難となつた以上は滿洲關係諸條約は聯盟規約に讓らねばならぬ。規約の作成又は調印に際し、日本は之が極東への適用に就て除外例を求めなかつたばかりか、波蘭とウクライナとの紛争に就ては、日本代表は聯盟の代辯者とまでなつたのである、今更列國の介入を拒めた譯のものでない」と。だから現地調査委員會を頑強に拒否した日本は間もなく、次の理事會に於て歐米の惡氣流より逃避せんが爲めに、右調査委員會を進んで招請するの舉に出でた。問題は一時延期された丈けである。

聯盟は現状擁護てふ目的主觀を體現した謂はゞ機關人格である。規約の文字通りに機械的に日本軍の滿鐵附屬地内への撤退を要求して、日本の斷乎たる反對に會した。而して聯盟は日本軍の占領状態の儘で調査團を派遣することに前例なきほどの大讓歩を爲した。意外にも米國は理事會に参加した。事實上國際政治に於ては、政治的考慮と法律的考慮との關係は大名と太郎冠者との關係である。只で、外交協定丈で達成せられるなら、極東政策を伸べようとする米國の参加も、實は約束済みのものであつた。果然聯盟も亦合法性否認政策を以て我に對抗するに至つた。聯盟調査團の報告が、日本に理由ありとして日本に勝訴又は無罪放免の判決を與へむことを期待する爲めには、判斷に於ける目的主觀の役割を全然否認しなければならぬ。吾人は近々に未成年帝國主義國日本の聯盟内に於ける矛盾を清算することを要求せられて居るのではなからうか。私見に従へば、理論上聯盟が可塑性^{プラスチック}を發揮して滿洲事變を丸呑みにする可能性は、日本の聯盟脱退の可能性よりも寧ろ尠ないと言はれる。

以上要言すれば、日本の世界的孤立は明白に暴露せられた。一方英米佛等は斯様な場合に立到つても必ず五、六の家來を従へて聯盟總會に於て五十五對一と云ふ如き悲惨な孤立をせぬ様充分に用意してゐる。反之日本は合法性否認政策の對抗を受けて居る。米支、露支の提携は今迄の経過に照し、外觀上は自然の傾向であるかの如くにも思はれる。果して、外國の論策家が萬一を氣遣ふ米、露、支同盟の實現を見るに到るならば、是實に、日本を死地に導くものであると言はなければならぬ。

以上は余輩の眼に映する日本外交國難の總括である。之を除去し、之を克服し、外交國難を打開する方略ありや否

や。前記の日本の世界的孤立は外觀だけでなく、眞に百パーセント徹底的の孤立なりや否や。民族的精神錯亂病者多き現世に於て、合法性否認政策と云ふ語は、其の實默示の容認位に解し得られざるものなりや否や。此等の點を闡明せむとするのが本論の目的であつて、其の内に自ら外交國難打開策の原理は發見せられるであらう。

第五 現實の保障なき平和の原理

國際社會に處する民族國家の指導精神たり得るものは左程多くはない。四海同胞主義は貴重なる平和の要素であつて、世界的單一共和國を豫想せしむるも、現實には宗教家や、慈善團體や、學者や藝術家や、マダム・バッタフライの事である。本主義を基調とするマンチエスター主義經濟學は地に墮ち、^{エコノミクス・ナショナリズム}經濟的民族主義は今日以上に強烈であつたことはない。本主義の前途には人種主義又民族主義てふ絶対に越え難き障壁が聳え立つて居る。

マチエーの四海同胞主義的的民族主義(Cosmopolitan nationalism)、即ち一民族國家に妥當するものは普遍的に一切の民族國家に妥當せねばならぬ。一民族は己れの欲する所は之を他の民族に施さねばならぬと云ふ主張、即ち民族自決主義は、儘に純正國際主義の基礎となり、組織せられたる平和、即ち世界聯邦を體現せしめ、國際的物理的動物的生存競争を倫理化し、文華化し、智能化するものである。而して此の思想はアベ・ズ・サンピエールやカント等の理念に不完全な姿に於て宿り、慈眼衆生を視る佛の心に合致するも、到底人間界の事ではない。蓋し人種の差異、民族の差異、先天的資源の差異、後天的富の差異、群團間に於ける自然淘汰の原則の對抗を受くるが故である。

世人は其の意義を詳にせずして漠然と國際主義の文字を用ひて居るが、近く之を検討すれば、夫れは階級的國際主義か疑似國際主義に過ぎぬ。階級的國際主義の第一は、労働者階級の國際主義で、第二インターナショナル、第三インターナショナルとして發現して居る。併し亞細亞人や墨西哥人労働者を排斥するのは米國労働組合であり、黑人を最も仇敵視する者は白人貧民である。裕福な英國労働者が英帝國主義の一部であり、戦争が社會主義的愛國者を産み、サンチカリズムがフリンズムに轉向するのを見れば、國際社會主義の勝利を語るは夢である。日本無産黨の近時の動向は之れを證明して餘りある。第二は資本家階級の國際主義であつて、金融的又は經濟的國際主義として發現し、無制限の市場争奪戰の代用品國際カルテルを産むた、併し資本に國籍なしとて弗買を爲したる日本財閥は遂ひに、國民の前に謝することを餘儀なくされたではないか。戰後誕生した國際大カルテルは瓦解に瀕し、世界の燐寸王クリューゲルは自殺したではないか。少數資本家が敢て民族的利益を蹂躪し得るとは想像出來ない。

純正國際主義は空想たること既に述べた通りである。普通世人の云ふ國際主義は、余の所謂疑似國際主義に過ぎない。意義ある國際政治條約、従つて國際法も或る程度迄、雄大なる強國の優越權の國際的反映に過ぎない。聯盟規約が常任理事國を認め、英國に五票を許し、人種は不平等なりとして移民問題に對し不干涉を言明し、モンロー主義は規約と兩立すと宣言した所以である。聯盟規約を蹴つた米國が、佛國の提議を自分のものとして、傳統的米國によりよく妥當する不戰條約を、卑屈なる列強に押付け得た所以である。ウヰリアム君に依れば、米國の世界大戰参加も、大海軍建造後の華府會議提唱も、等しく金融國際主義弗外交の發露である。飽和國が軍縮條約平和維持の爲めの條約

の濫造に銳意する所以は極めて卑近な而も深謀を缺く安全慾の發作である。而して疑似國際主義の裏面は、國際主義的民族主義である、開明的利己主義である。國際政治家の人道よ、汝の假面を去れ。汝の名は自己主張本能、誇示本能、陶醉本能、昂揚情操である。見るべし、疑似國際主義は國際主義の法衣を纏ふた民族主義であつて、究極する所、民族主義以外の何物でもないことを。之れ余輩が國際政治の統一原理は民族主義なり、民族國家は終局的自然的實在體なりと喝破して憚らぬ所以である。

民族主義は一面組織せられたる平和、即ち純正國際主義の否定にして、他面四海同胞主義的民族主義の否定者なるが故に、固有の領域以外に於て活動し、「白人の荷物」、「明白なる運命」等の口號の下に宇宙自然の増大の法則に従ひ自我を擴大する。此工作の進展過程に於ては、勿論軍國主義的帝國主義として發現するのである。此物理的帝國主義は外力に依り物理的に排除せらるゝが、内部的に崩壊せざる限り決して退轉することはない。見よ、帝國主義國は一つも其の贖品を、不必要なりと宣言した後に於てすら吐き出さないではないか。けれども吾人が英米製の聯盟や不戰條約で經驗せる如く、軍國主義的帝國主義が倫理的帝國主義に轉換することはある。これ宇宙自然の理法に従つて、未成年帝國主義が成年帝國主義國、即ち飽和國となつたことの徴候である。此後者即ち倫理的帝國主義國は、宇宙の理法に従つて其の環境に對する反作用として、暫時軍國主義的形相を呈して居る前者即ち軍國的帝國主義國を笑ひ得るか。未成年帝國主義國と飽和國とは戦はねばならぬ程、兩立せざるものであるか、將又前者が却つて後者の支柱となり兩者は共生關係に立つべきものであるか。宇宙の理法は飽和國が、未成年帝國主義國を、絶對無條件に抑壓することを正

當化するかどうか、吾人が認識を徹底せしむるの必要は實に茲にある。而して世界平和の鍵も實に茲に在る。

余は冒頭に於て列國を三種に區別したが、尙他の標準から列國を自主的政策を自力に依り遂行する強國と然らざる弱小國とに區別することが出来る。飽和國、未成年帝國主義國は前者に屬し、所謂弱小國は後者に屬する。弱小國間の紛争は戦争とならぬ、若し戦争となるも地方的のものであつて、平和確保は容易である。強國と弱小國との關係に於ては強國は絶對又は準絶對帝國主義に墮せざる限り、勿論緊切利益範圍内に於てのみ行動し、且つ自制すべきであり、弱國は宇宙の理法に従つて自由の多少の制限を甘受すべきであつて、此の場合も平和確保は容易である。従つて平和問題は強國相互間の關係を其の核心となし、之に觸れなければ百の軍縮條約も何等の貢獻を爲し得ない。

飽和國なる名稱は、夫れ自身侵略的戦争を否定するものである。抱へ切れぬ資源を平穩に開發する爲め、飽和國間に「平和への意思」が明瞭に動くのは當然で、マクドナルド、フーパーの「英米戦争思ひも寄らず」との共同宣言は自然の約束であり、「アングロ・サクソン・ソリダリティー」は自然の儘なる既存事實である。問題は飽和國と未成年帝國主義國との關係、例へば日米、日英、佛英、佛米、佛獨等の關係であるが、余輩は飽和國と未成年帝國主義國、即ち強國と云ふ特殊の一團に等しく妥當する平和確保の指導原理の存在することを認め、之を國際帝國主義と呼びむと欲する。國際帝國主義が妥當するならば、既に國際政治に於て「特殊妥當性優位の原則」を認めるに充分である。

第六 國際帝國主義

第三インターナシ。ナルが、國際聯盟は贖品分配所なりと云ひ、強國の「不一致の一致」を示す統一戦線の對抗を受ける支那の學徒が、好みて國際帝國主義なる文字を用ひ、ヒューガンが“joint imperialism”なる文字を用ひしに徴すれば、國際帝國主義は既に人の認めて居る所と云はねばならぬ。然らば國際帝國主義の意義如何。

國際帝國主義とは帝國主義國間（倫理的と軍國的とを問はず）の國際主義にして、強大國が協調的に弱小國を其の必要とする程度に統制するに在る。換言すれば米國のモンロー主義、特にカリビアン海政策、英國の埃及乃至印度に於ける地位、日本の滿蒙に於ける地位を相互に認め（石井・ランシング協定は此の一部を體現せるものである）、強國が互に生き且生かしめよ（live and let live）との原則を徹底せしむることである。換言すれば群團淘汰に於ける適者に生存優先權を賦與する宇宙の理法を、人爲的に攪亂せざることである。更に詳言すれば強國が主として國際政治の主體となり、主として弱小國を其の客體となすことである。

國際帝國主義が深酷なる現實の内に動いて居ることは、嚴然たる事實である。歴史上の神聖同盟や、歐洲協調は是其第一の發露である。英國が獨逸に海軍休暇又は制限を提議した際の交換條件として、獨逸に植民地特に葡萄牙所有のものを獲得せよと懇願したのは、是其第二の發露である。日本が支那の革命外交に堪へ兼ねて、斷乎として之に彈壓を加ふるや、一切の歐米人は支那人の前で頭を擧げ得るやうになつた、此事は其第三の發露である。印度に於けるガンヂーの運動が右事件の爲に一大打撃を受けたのは、是其第四の發露である。不戦條約、特に其留保條件たる自衛權を、露國と日本とが略同一解釋の下に支那に向つて適用したのは、是其第五の發露である。民族自決主義とか、人

種平等とか云へば、先づ第一に最も困却するものは英米であるが是其第六の表徴である。滿蒙問題に關する米國の態度を、墨國及び中・南米諸國が虎視眈々として狙つて居り、米國が不戰條約、九ヶ國條約の法文のみを楯として虚に吠えつゝあることは、是其第七の標徴である。聯盟に常任理事國あり、而して理事會に於て常任理事國を非常任理事國よりも多くしようとする原則が認められて居るのは、是其第八の表徴である。聯盟に於て佛國や英國が時に灼熱的に、時に微温的に日本を支持し、理事會が總會よりも日本の立場を了解するのは、是其第九の表徴である。米國が國際帝國主義に違反して、過當に支那を増長せしめ、米國の對日干渉を信ぜしむれば、忽然として亞細亞の嵐となり、其の餘波として奇怪なる露米同盟の聲さへ揚がるに到るのは是其第十の象徴である。

斯かる儼然たる國際政治の動向を、慧眼なる國際論策家が看過する筈がない。日本人の子宮より生れた好漢クーデ
ンホフ・カレンデーは、日本のモンロー主義論に對して次の如く喝破して居るではないか。

亞米利加のモンロー主義の外に、國際聯盟は第二のモンロー主義を認めてゐる。それは英帝國の自決權である。英國及び印度は聯盟國であるけれども、英國は印度其他の植民地との紛争を壽府に持出すことを拒むであらう。此モンロー主義はエジプト及びスエズ運河にも及んで居る。英國政府はケロッグ條約（不戰條約）に對する其留保に於て、此見地を力説して居る。英帝國は斯くの如く植民地との紛争について、壽府の干渉を許さざる國際聯盟の自治的部分を形成して居るのである。奉天及び壽府に於ける最近の出來事は、第三のモンロー主義、即ち東亞モンロー主義の宣言に外ならざることを意味して居る。壽府は東京に對して物質的に無力なることを暴露した。又此

の無力を補ふに必要なべき精神上の權威を缺いて居る。日本の代表者が佛國の同僚に對しては「ルール」なる言葉を、英國の同僚に對しては「埃及」なる言葉を、亞米利加の同僚に對しては「ニカラガ」なる言葉を、伊太利の同僚に對しては「コルフ」なる言葉を、波蘭の同僚に對しては「ヴィルナ」なる言葉を、夫れ々々耳打ちしたるならば、而して此等の言葉と聖書の引用句（自ら罪なしと思ふ者先づ姦淫せる女に石を投ぜよと云へる基督の言葉）とを關聯せしめたならば、國際聯盟の理事會に於ける如何なる討議をも、意氣揚々と通過せしむることが出來たであらう。

註 クーデンホーフが斯かる見解を抱懐すればとて、聯盟理事會に於ける日本の理事が、全然無怪我に討議を通過し得るか疑ひがないではない、蓋し日本理事が國際帝國主義と云ふ様な難攻不落の指導原理を明確に把握してゐたかどうか聊か不明なるが故に、尙ほクーデンホーフの所謂日本のモンロー主義は、金子子爵の祖述するルーズヴェルトのモンロー主義ではなくして、寧ろ米國のカリビアン海政策を意味し、余輩の後に述ぶる賭戰地域に一致する。

日本は歐洲同様に過激主義に依つて威嚇を感じつゝある。日本はソヴィエト聯邦の背後に立つて之が亞細亞に侵入せむとするのを防遏する唯一の大國である。之實に將來歐洲と日本との共同團結を保障するものであつて、運命的結合より生ずる此の團結は、國際聯盟の權威問題よりは遙に強力であらねばならぬ。

ハーバート・アダムス・ギボンズ氏は、フオーリン・ボリシー・アン・シエーション外交政策學會に於ける講演に於て、「日本が支那でやつて居ることは、米國はじめ英、佛、伊の諸國も亦、世界の他の部分で同様に之をやつて居る。……コロンビヤ共和國の領土にバナマ共和國を米國が樹立し、而して此の建國の賠償をコロンビヤ國に支拂ふことを米國上院で承諾する迄に

は二十年もかゝつた。運河を作るに用だから取つたと云ふ丈けのことだ。それが何うして悪いかと、事後三十年を距てた今日、米國の輿論は尙ほ其の非違を認めるに不平である。首府ボーゴターに於けるコロンピヤ人は晒然として居るであらう。米國は何だつて滿洲事變で日本を責めるのかと。……日本の行動を米國並みの國際道德の尺度で計つても、日本には矢張り分がない等と米國として一體云へた義理であらうか」と、述べてゐる。

リンコーン・コロコード氏は、米誌「ハーバース・マガジン」一九三二年四月號に於て述べた。「歐米人は何故滿洲事變を正解し得なかつたか。十年このかた伸びて來た國際平和と云ふ、理よりも情に偏した固定觀念が、現實の正視を誤つたからである。……條約は元來國家の成長し發展する結果として成立するもので、國家の成長發達を逆に條約で抑へ得る筈はない。國力の發展に累を及ぼす條約は、どんな場合にも一蹴されて了ふ。……強靱にして鐵面皮、而も實際的なる日本の外交は世界が自ら描いたセンチメンタルな姿を無殘に打破し去つて現實を見せつけた。勿論日本人は今人氣はないが、實は世界の爲めに一大奉仕を行つたものだ。日本の心境は正直である、一切の外交は皆虚偽だと云ふ建前から嘘もつぐが、どうせ本心を信じて貰はうとは考へて居ないのである。たゞ衷心、國際主義を念ずる人々に對しては何と挨拶すべきであるか。世界は又しても武力萬能の哲學に立歸らねばならぬか。武装平和の舊式外交を復活せしめたり、再び均勢主義に國際平和を託するの外はないものか。答へて曰く、再びと云ふけれども、世界は未だ曾て此の原則を拋棄した例がない。軍備の如き世界大戰後寧ろ擴張されて居る。更に答へて曰く、戦後の平和維持の努力は見當違ひであつた。其の保障は毫も國際的軌轍に堪へ得るものではなかつた。

世界の健康の爲めには聯盟無きに若かず、聯盟存して是に實力を授けない位なら全然無力ならしめよ。なまじ聯盟が無かつたなら、世界平和を維持する責任はもつとシツカリした國々の肩の上に掛つて居たであらう」と。

(註) 聯盟に實力を授くる方法は純正國際主義に基く超國家組織あるのみ、而して人間性は之を不可能にす。

ルイ・フィッシャーは云ふ。「日本が滿洲を第二の朝鮮たらしめむとするに對し、米國も英國も佛國も何等抗議すべき道德上の權利を持たない。米國はニカラガ、ハイチに熱湯を飲ませた。英國は埃及、印度、サイブラスを腕力で抑へて居る。佛國はシリヤを平定する爲めに美都ダマスカスを半分破壊した」と。

ジャー・エル・ガーヴィン氏は、英紙「オヴザバー」に斯う云つて居る。「極東刻下の危局に對する武力干涉には、絶対に捲込まれてはならぬ。事は英本國のみならず、英帝國の存亡に係はり、同時に亦將來の世界平和及び國際軍縮への一切の希望の死活にも係はる。……外交上の危局を生ずる場合、最も監視を必要とするものは一部の好々爺的人物である。同情の念一度び萌さずや、彼等は理を去つて情に就く。……道德や條理上の問題、聯盟規約乃至不戰條約、夫等に關心を持つ點では、吾人と雖も夫等のもの、醇乎たる支持者に讓るものではない。けれども同時に吾人は極東の現實に對しても、將又現前の惡を恕して戰爭——其の惡とは比較にならぬ程の災難——を回避する事から生ずべき結果に關しても、毫も錯覺を敢へてしてゐない。……吾人は休戰以來「反獨」の態度を一擲し、内外を問はず、形式の如何に拘はらず、左様な態度を寛假しなかつた。さりとて正しい意味で云ふ「親佛」の度を減じた譯ではない。夫にも増して結果が靦面に悪いばかりでなく、將來への影響の恐るべき點に於て、

「反日」的異常心理の右に出づるものはない。それは根本から不合理だと断言してはよからない。………氣慨ある大國民が、自己の生存の土臺が蝕まれて行くことを、換言すれば自己の「生存權」危ふしと感じ來たる時、それは必然に現實の問題となる。而して常に然るが如く、如何なる紙上の約束も其の行動を制することを得ない。………規約は矢張り消極積極の双方を備へねばならぬ。大半無駄になつたけれども、休戦以來吾人が絶えず切論して來たことは、全局の平和は勿論のこと、一部局の平和にしても、之を保たむが爲めには政治的和解と經濟的調整とを以てして、戦因を逐一芟除すると云ふ組織されたる建設的努力に俟つの外なし、との一大眞理であつた」と。

註 此の問題につきましては拙著「國際軍備縮少問題」第二編原論第五章に於て、充分に検討し置きたり。

炯々たる眼光を以て混沌たる現實界の最深の奧秘を把握せむと努めつゝある親日家ルチャンドル博士は、「亞細亞對歐羅巴」に於て、露國を背景とする全亞細亞大陸被壓迫民族が、白人に對する憎惡に爆發せむとしつゝあることを指摘し、次の如く植民國同盟及び日、英、米、佛、伊の團結を提唱して居る。

“Puisque notre culture elle-même est menacée, que l'Europe industrielle ne peut plus assurer la vie matérielle de ses peuples sans ses colonies et autres marchés d'Asie, le devoir de ses gouvernements est tout tracé : qu'ils fassent bloc ! Qu'ils s'unissent en une fédération coloniale, le Japon inclus, pour la défense mutuelle de leurs intérêts vitaux !”………En résumé, devant un problème qui, par ses répercussions, atteint le monde entier, il n'y a point trente-six solutions, moins bien une seule ; l'entente effective, réelle et

non sur des papiers de chancellerie, des quatre nations signataires du pacte de Washington, y compris l'Italie. Toute question de “face”, de nationalisme étroit serait mise de côté et la situation, de nouveau, examinée à fond, cette fois par des gens compétents, tranchée sous le jour des réalités et non sous l'impulsion d'un vague sentimentalisme doublé du vain espoir de satiriser, pour soi seul, la reconnaissance de la Chine.”

(吾人の文明は夫れ自身脅威せられ、産業本位の歐羅巴諸國は其の植民地及び市場なくしては其の國民の物質的生活を確保すること能はざるが故に、諸國政府の任務は全く自明的であらう。即ち諸國が一大團結を結成することである。諸國が其の死活利益を相互的に防衛する爲めに、日本を含めて植民國聯盟を形成することである。………要するに其の影響全世界に及ぶべき一問題に對しては三十六個の解決策がある筈なく、僅にたゞ一つあるのみである。夫れは華盛頓の四國協約締結國及び伊太利が、御役所の紙上ではなく眞實有效の協調を遂ぐることである。面目問題や、偏狹な民族主義は拋棄せられ、現情勢は再度有能の士に依りて根本的に検討せられ、自國丈けで支那の感謝を買はふと云ふ様な空望に絡むだ漠たる感情主義の衝動の下に於てではなく、現實の光明下に解決を與へられなければならぬ。)

以上縷述した所は、無意識ながら如何に深刻に現實に國際帝國主義が、國際政治論策家の心理を捉へて居るかを明徴にして居る。パートランド・ラッセルは、世界平和確保の最捷徑は、強大國が爾餘の諸國の搾取及び制壓の爲めに

結盟するに在り、と云へるが、此の最捷徑が經濟主義の人間に依り、採用せらるべきことは疑ひなき所である。國際帝國主義は強國に普遍的に妥當する一つのイデオロギーである許りでなく、現實界に激潮として躍動して居る。若し然らざらむか、世界全體の植民地半植民地は悉く獨立し、共產露國の示唆する打倒帝國主義は凱歌を擧げて進軍したのであらう。問題は打倒帝國主義と、國際帝國主義との決戦である。日本は一切の帝國主義國の爲めに國際帝國主義の戦ひを戦つたのである。「白人の重荷」を唯一人で完全に擔ひ通したのである。日本は誤つて飽和國英米の倫理的帝國主義の術策に陥つた。英米は眞實には誤つて日本を右の術策に陥らしめた。日本は聯盟規約、不戰條約、九ヶ國條約を楯とせる轟々たる世界輿論の非難の焦點となり、世界から完全に孤立した、余は之を外交國難と認識したが、此の孤立は疑似國際主義、又は國際弱國主義又は國際半植民國主義（國際帝國主義の反對に弱小國に妥當する普遍性）又は國際社會主義から來る上層の外観丈けの喧噪である。國際政治の現實の奧秘をあげれば、其の底部には音を立てずに、然しながら抵抗すべからざる迫力を以て國際帝國主義が流れて居る。早く之を發見し之を時代思潮に持ち上げることが日本外交の當面の課題である。社會主義の反動たるファッシズムと、「平和に對する自慰的禮讚」の反動たる民族主義とは、日本の世界的領導を受容るべく既に準備して居るのである。併し疑似國際主義の聯盟や、國際社會主義の蘇聯や、獨佛、佛伊の葛藤に随分歪められた現實の國際政治社會を大觀すれば、吾人は深刻なる現實に宿る世界平和の親石が、漫然たる國際帝國主義でなくして、三大海軍國に妥當する太平洋國際帝國主義であらねばならぬことを發見する。

第七 太平洋國際帝國主義

英、米關係は英國が獨立以來の米國にモンロー主義を與へ、米西戰爭の勝利を與へ、カリビアン海政策の徹底を許し、世界大戰後「米國と同一の道」を歩むことを決定して、日英同盟を葬り、英米海軍均等を與へ、英米戰爭は「思ひも寄らず」と宣言して以來、アングロ・サクソン・ソリダリチーの形態に於て確乎不拔の基礎に置かれた。駐英米大使ウ・ルター・ヘーデは嘗て“*Our power, our adaptability, our potential wealth, they never forget. They will hold fast to our favour for reasons of prudence as well as for reasons of kinship. And whenever we choose to assume the leadership of the world, they will grant it gradually and loyally. They can not become French and they dislike Germans. They must keep in our boat for safety as well as comfort*”（英國人は決して吾人の力量、吾人の順應性、吾人の無限の富を忘れない。彼等は用心の爲め將又血族關係の爲め吾人の好感を繋ぐむとしてゐる。而して吾人が世界に於ける領導權を掌握せむと決意するとき、英國人は漸次に忠實に之を吾人に委任せむとす。英國人は佛國人と爲り得ず、彼等は又獨逸人を嫌惡す、彼等は安全の爲めにも悅樂の爲めにも吾人の端舟に便乗せざるを得ない。）と云うて居る。世界二大海軍國英米の連帶即ち Oceanic Anglo-Saxon Imperialism は、自然の約束で、然も飽和國と云ふ環境に兩者共立つて居ることに依つて強化されて居る。余輩は華盛頓會議に於ける日英同盟破棄、四國協約成立其の他の事實を指摘し、日、英、米は軍縮條約上は正三角形を成すべきに、英、米關係の近きに過ぐることを警告し

て来た。然るに世の中には世界大戦後は勿論、今日でも英米戦争の萬一の可能を信じ、日本が其の際割の良い役割を勤めようと考へて居る連中がある。眞摯なる研究家池崎忠孝君の如きも亦之を信するものゝ如くである。併し何處に英米が戦争に依つて雌雄を決せねばならぬ原因があるか。マクドナルド氏が大西洋を越えてラビダン協定を結んだ、ステーツマン・シップは保守黨と雖も之を認め、倫敦海軍條約は批准されて居る。米國の驕慢は何處迄増長するかも知れぬ、英國は我慢しきれまいと云ふ様な空漠たることを考へ、英米人が「思ひも寄らず」^{アンシンカブル}と爲す所のことを、強ひて思ひ寄る様に考へるのは、空粗な考へである。一國の政策を、他國が法外な過失を犯すかも知れぬと云ふ様な待望の上に築くことは、危険此の上もない。滿洲事變、上海事變が起つても、一面之を鵜呑みにして居る米國ではないか。海軍力を太平洋に集中して大西洋をがらあきにして居る米國ではないか。太平洋國際帝國主義は、英、米間には最早や儼然たる事實だ。ノースクリフ卿はシンガポールを築港して之を米國に提供せよとさへ叫んだ。英國がどうして米國の戦争網たるモンロー主義を犯し得よう。米海軍の重大なる、存在理由たる海洋自由の問題は何時の間にか消失したのではないか。英米兩國には世界の和戰の鍵を握るに充分な程の物資がある。故に兩國が軍需品不賣同盟を作らば、世界和戰の機を如何様にも左右し得ると主張する英米人がある。余は世界大戦最大の結果は、三帝没落歐洲衰亡にあらずして、アングロ・サクソンの覇權確立なりと喝破したが、今日迄に其の所信は強まる一方である。次に英米聯盟の嚴存に關する二つの證據を提供しよう。

ロード・リーは華盛頓海軍條約を審議しつゝあつた英國議會に於て、次の如く聲明して居る。

“The basic principle was that we should accept a standard of naval strength which was equality with the United States of America and, of course, corresponding ratios with regard to the other navies. This was not only a new orientation of naval strength, but a new portent in world politics and the relations existing and which will exist in the future between English-speaking peoples.”

(根本主義は英國側に於て米國との海軍力均勢及び云ふ迄もなく爾餘の海軍との相當比率を受諾するに在りき、此の事たる海軍力に關する新規の方針たるのみならず、新世界政策並に現在及び未來に於ける英語使用國民間に存すべき關係の黎明を告ぐるものであつた。)

カーリントン・ペーネルは“The Naval Conference and After”中に英米關係につき次の如く述べて居る。

“Great Britain will never again go to war without America as an ally……It is to be hoped that our people will never again enter into any guarantees without America by our side.……Europe and Japan know, and America knows, that our main reductions are made in response to the purely American doctrine of parity and to scaling our strength in cruisers down to her own far different requirements. Consequently the obligation of honour must compel her (America), more than any pledge or treaty, to go to the assistance of the British Empire in any war that is forced on that empire.”

(英國は米國と同盟することなくして再び戦争に赴かないであらう。英國民は米國と同一の側に立つことなくして

如何なる保障にでも又と参加せざる事が望ましい。歐羅巴も日本も米國も、吾人の海軍軍縮は、米國の純理論たる均勢主義及び米國獨特異の所要量に迄吾人の巡洋艦勢力を切下げられたいとの要求に應じて、實行せられたものであることを知悉してゐる。従つて誓約や條約否それ以上の面目上の義務として英帝國に戦争が強いられた際、米國は英國の救援に赴かねばならぬ。

然らば次に未成年帝國主義國將又軍國的帝國主義國日本と、飽和國即ち倫理的帝國主義國米國とは果して對立關係に立ち抗敵しなければならぬかと云ふに、余輩は絶対に爾か信することが出来ない。成年帝國主義國、即ち英米が過去の贓品を維持せむと欲するならば、其の方法は未成年軍國的帝國主義國と、全く同一の方法に依らねばならぬ。民族らしい民族は決して同化するものではない。若し民族自決主義を許すならば、布哇も、フィリピンも、印度も、朝鮮も即刻獨立し、其餘波を受けて墨西哥乃至パナマに至る地域、埃及、波斯、滿蒙等が動搖するのは火を踏むよりも明かである。一度併合したから倫理的にも自分のものだと思ふのは謬想で、宇宙自然の理法に反する。力で得たものは力で護らねばならず、否な事實、力で護つて居るのだ。to keep, to add, to recover の三者は全く同一の物理的方法に依らねばならぬ。尠くも英國は世界大戦中其龐大なる軍隊を印度に駐屯せしめたことを記憶するであらう。米國と雖も天使だとして到處に禮讚されては居らぬ。世界に漲る反アメリカニズムは頗る強烈だ。カリビアン海地方に、南米に、歐洲に、亞細亞に、而して特に米國歸りの留學生を除いた支那人、特に赤い支那人間に、米國人の擴張的利己主義 (expansive egoism) を見落す様なウブな有色人は餘り居らぬ。義和團事件後の支那の排外運動は、移民問題

を切ツ掛けに排米で始まつて居るではないか。

進んで次に米國人が虎の子の様に大事にする不戰條約に就いて検討して見よう。

余の見解に従へば本條約は外観は不戰條約であるが、内實は宣戰條約である。米はモンロー主義を、英は印度より埃及迄を、日本は滿蒙を、各自の戦争系統の中核なりと宣言したもので、三者間には連帶關係があるだけである。看板たる不戰條約と云ふ方面を捉へても、之を倫理の方面から、時間を超越した神の方面から、又は原始人より人類絶滅迄の人間を一人格として見た全人類の方面から見れば、米國としては日本の滿蒙統制に反對する位ならば、論理を貫いて十三州の昔に歸るか、或は一層徹底的に英國の植民地たりし時代に復歸した方がました。英米は協力して列國を軍縮に導かうとするけれども、一體何處迄軍縮に進む氣か。露國の即時軍備全廢案を受諾するならば、人口數の専制となり、mass imperialism となり、全世界に植民地は絶滅し、英、米も最早や強國であり得ない。

英のカッシンダン卿が、露國の軍縮全廢案を強硬に排撃したのは當然である。吾人より見れば、それ見たことかと言ひたいところだ。加之軍縮條約なるものは、締約國の一團としての非締約國に對する或る程度の同盟、及び締約國の一部が他の一部に對して同盟せざることを不可缺の條件とするもので、明示せずとも默示の條件として潜在して居ることは、疑を容るゝ餘地がない。第一の締約國間の同盟は、非締約國から脅威が來た場合、非締約國が特に軍備を増大した場合、軍事科學が進歩した場合に改訂の必要を認め、或はエスカレーター條項を設け、或は非締約國の軍艦注文引受の際は軍縮條約の規定を之に適用することとして居るので明瞭である。第二の締約國內部の同盟禁止は日米

が六割七割を争ひ、英米が同じバリチーでも巡洋艦の大型小型を争ひ、英米が合體して日本に當るとか、日英が合體して米國に當るとか云ふ様な條件の下に於ては、華盛頓條約も倫敦條約も成立し得ざることに依つて、絶對的確實さを以て立證されて居る。故に華盛頓條約は五ヶ國同盟條約を、倫敦條約は三國同盟條約を包含すと見るは決して僻目でない。況んや最近の壽府一般軍縮會議は、明瞭に三大海軍國間の國際主義の存在を如實に證明した。それは三大海軍國が共同して、主力艦は決して攻撃的武器にあらずと聲明して、小海軍國の主力艦全廢論を一蹴した事實之れである。

レフ・ヴーアは科學的軍縮の目的は、地方的戦争や、植民地戦争を阻止することなく、大國間の戦争、特に世界戦争を阻止することであると云つたが、遺憾ながら英米連帯だけでは、兩國共に内的疾患を持ち、亞細亞に於ける利益を異にし、不干渉主義の爲めに自縛自縛に陥り、決して世界戦争を阻止することが出来ぬ。況んや日本が其の精神力を以てして、西太平洋の制海權を何人にも委することなかるべきに於ておや。尙ほ英、米丈けでは人種上普遍性が足らぬ。之に反し日、英、米の太平洋國際帝國主義が實現するならば、最早や世界戦争は之あるを得ない。小なる地方戦争か精々大陸戦争があり得る丈けである。世界平和の鍵は太平洋國際帝國主義に在ると云ふ時、誰か之を否定し得るものぞ、追而、余は本主義の應用を論ずるに際し、一層其の存在的當爲なる所以を明かにするであらう。

第八 人種主義又は東洋モンロー主義又は絶對的若くは準絶對的帝國主義の排撃

動物としての人間の自然科学上の分類を人種と云ふ。此の觀念が國際政治上に於て勤むる役割は決して無視出来な

いが、又決して大なるものではない。劣等人種^{劣等人種}の存在は植民地の成立を可能ならしめ、此の地方よりの搾取を合理化するに役立つ。黒・白丈けの米國主義・白濠主義と云ふ様な形式を取つて移入民を排斥する、同一國內に於ては私刑^{私刑}を正當化する、全人類我と民族我との中間に人種我を成立せしめる。汎米主義、汎拉典主義、A・B・C同盟、アングロ・サクソン連帯主義、汎スラブ主義、汎獨主義、スカンデナヴィズム、亞細亞人聯盟等が之である。甚しきに至つては白人全體と黄色人全體との對抗する人種戦争を説く様な現實に疎遠な有識者氣取りの無識者も東西に多數あるのである。

人種は一種の同類意識を成立せしめ、民族我を越えて人々を全人類我、純正國際主義（超絶的價値の世界に屬し、人間性を超越することを重ねて斷つて置く）に進ましむるものとして、將又一より大なる群團に擴張歸一せむとする傾向を示すものとして、肯定すべき方面がある。併し人種主義は、疑似國際主義を體現する國際聯盟すら之を排斥した。余輩の國際帝國主義及び太平洋國際帝國主義は、徹底的に斷々乎として人種主義を排撃せねばならぬ。

人種主義は近年東洋に於て喧しく、亞細亞聯盟、亞細亞人の亞細亞、東洋モンロー主義、大同主義等の名稱を以て、漠然と表現せられ、無産黨方面の指導者は勿論、右翼の方面にも極めて多數の支持者がある。大川周明博士の如きも、同一の思想を「東亞」に發表して居る。いま池崎忠孝氏の太平洋戰略論に述ぶる所を引照しよう（他の頗る多くの點に於ては筆者は池崎氏に共鳴することを斷つて置く）。

「世界を擧げて奈落の業火に投すべき人種戦争の慘禍を避けんと欲すれば、白色人種は直ちに有色人種に對する冷

酷なる統御と苛辣なる搾取とを中止し、彼等が獨占する國土の總てを開放して、全人類の共益の爲めに提供するの覺悟なかるべならず。(五頁)

日本が若し世界を根柢から震撼させる神聖戰爭の先頭に立つて、勇ましく人種解放の大旗を翻へす様な時が來たと致しますれば云々、(一四七頁)

日本に恵まれて居る難攻不落の地位と、日本に與へられてゐる精銳無比の陸海軍とは、よく白人國の總てを敵手として戦ふに堪へ、日本にして欲するならば、世界を前にして堂々と人種戰爭を宣言し、十餘億の有色人種を壓いて不幸な被壓迫民族の爲めに聖戰を試み、三千年の世界史を根柢からデングリ返す様な大仕事も出來ないことはありませんまい。(一七八頁)

日本の使命は、獨り日本國民の現在及び未來に於ける發展の餘地を開いて、彼等が永遠に生くるの道を與へることばかりではありません。世界の總人口の殆んど三分の二を占めてゐる有色人種の將來は、懸つて日本の双肩にあると申しても過言でありませぬ。日露戰爭によつて、日本が白色人種の侵略に最後の止めを刺します迄は、彼等は全然救はれる見込のない奴隸の境涯に落ちて居ました。有色人種の勃興を説いたロスロップ・ストッダードは日露戰爭を以て有色人種の覺醒に新紀元を與へたものと致して居りますが、今にして若し日本が蹉跌することになりますと、彼等の運命は再び永久の暗黒に鎖ち込められ、人種解放の大業は終に日の目を見ずに終ることとなるであらませう。日本が武裝するのは萬止むを得ずして武裝するのであります。恒久平和の理想を思慕することが如何に熱

烈でありませうと、すくなくとも人類平等の實があがり、政治生活や經濟生活に於て、有色人種が白色人種と對等の地位につくまでは、到底世界に平和があり得る筈はありません。(一七五頁)

西洋にも斯かる思想傳播のプロタゴニストは澤山ある。カイゼル・ウィルヘルム二世の如きは實に其の先驅者であつて、今日此の思想を得意氣に佛蘭西の講壇から放送する人にアルベル・サロー氏があり、筆者も一度傾聴したことがある。前段言及したルチャンドル博士は、其の認識不足を嘲笑して居る。日本人は此の人種戰爭なる觀念は日本を本當に孤立せしめ、日本人を世界で頭の擧がらぬ様にする爲めに發明せられたものであることを牢記せねばならぬ。

「有色人種の爲めの神聖戰爭」と云ふ様な、現實と百パーセント矛盾せる思想を抱く人があると云ふことは余輩には諒解出來ないことである。日、米の突貫主義者の考へる様に、日米戰爭が起つたと假定して、萬一の場合に朝鮮人や支那人の解放の爲めに戦ふのは日本人か米國人か、云はずと知れた米國人だ。若し非常な意外事が世の中に起つて、有色人種の爲めの神聖戰爭を戦ふ民族ありと假定すれば、夫れはフィリピンを獨立させて政治的に東洋から手を退かむとする米國以外にはあり得ない。日本人が池崎氏の假定する如く蹉跌したと假定したら、救はれるものは朝鮮人や支那人ではないか。生きる爲めに日本が支那人の意思に反して滿蒙を統制し、濟南に上海に支那人と衝突したのは昨日のことではないか。十億の有色人種と云ふけれども、之がものを云ふのは軍備全廢が實現し、人口數の専制が可能となつた時のことである。然るに露國の軍備全廢案にはさしもの平和論者英米すら反對し、日本は世界一軍縮を困難

とする國柄であるではないか。過去四十年間日本の進み來つた徑路は、宿命の指さす處大陸發展であつて、其の結果有色人種の一部を統御することとなり、「白人の重荷」を分擔することとなり、日本國策の復興は東洋に於ける白人の勢力を向上せしめ、彼等の植民地を安全ならしめた。余輩の國際帝國主義の主張は實に此の現實の上に立つて居るのである。

「亞細亞人の亞細亞」と云ふ様な思想は、日本人が他の亞細亞民族と、回々教の僧侶數名が平和に一枚の毛布に包まれて寝る様に協和することを意味するかも知れぬが、東洋モンロー主義と云ふ主張には、米國が南北兩米に臨む様に、日本が亞細亞又は東洋に君臨し、歐米人から其の植民地を奪取することを意味する様でもある。之は余輩の所謂絶對的帝國主義に近く（國際帝國主義は相對的帝國主義である）、ナポレオンやカイゼルの覇業を夢みるものである。之等の夢想家に向つて余の告げむと欲する處は、余が劈頭に掲げた宇宙自然の法則を回顧せむことである。日本全體の力は有限である。日本が世界全體を敵に廻して勝利を得ると云ふ、池崎君の様な妄想を抱くことは我輩には出來ない。滿蒙の事すら未だ定まらざるに、世界大戰中山東の一角を占領し、二十一箇條要求を以て支那の中原に切込み、英國の勢力範圍を縦斷し、西伯利亞に奇利を博せむとした二回の遠征の成果が雪崩を打つて崩壊し、今日にまで後禍を遺して居るではないか。最近濟南、上海の二度の出兵も何等の成果を齎して居らぬではないか。支那人や空想的好戰的平和論者の一部は、日本を東洋の獨逸なりとの極印を附與せむと努力して居る。日本の生命線滿蒙と滿蒙以外とを區別せず、絶對又は準絶對帝國主義に足を踏入れ、他の帝國主義と火花を散らすのは、必要なきに自ら好んで日本は東

洋の獨逸なりと裏書きし、支那人の手に乗るものである。此の絶對的帝國主義は、余の國際帝國主義の斷々乎として排斥せむとする所のものである。記せよ國際帝國主義は帝國主義國間の國際主義なるが故に、自制を必要とするものなることを。

最近 Contemporary Japan. Vol. 1. No. 2. pp. 175-184 に掲げられた金子子爵の、ルーズヴェルトが日本モンロー主義を提唱したと云ふ面白い回想録に就いては、此の際余として一言論及する所なきを得ない。ルーズヴェルトの云はむとする所は次の數句に竭きて居る。

「凡ゆる亞細亞民族は今や現代の新らしき時勢に自己を適應せしむべき必要に迫られて居る。其の過渡時代に於て自然日本は彼等の指導者となり、過渡期に於ける彼等の良き保護者とならねばならぬ。……今日の日本の亞細亞諸國に對しての政策は、北米合衆國が亞米利加大陸の隣邦に對して執り來つたその如きものでなければならぬ。亞細亞に於ける日本モンロー主義の結果は、歐洲諸國の蠶食的氣運を除去し、日本は亞細亞諸民族の指導者たることを認められ、日本の勢力は亞細亞諸民族が其の保護の下に安んじて國家の體裁を作り得る楯となるであらう。……日本モンロー主義の範圍は、印度、安南、フィリピン群島、香港、其の他の歐米植民地を除く以外の全亞細亞大陸を包含すべきである。それと同時に日本は亞米利加が唱道したる支那に於ける門戶開放、機會均等主義を嚴守すべきである。……若し日本がポーツマス平和條約後、斯かる亞細亞に於けるモンロー主義を宣言するならば、余は大統領在任期間たると否とを問はず、全力を擧げて日本を支持するであらう」と。

金子子爵の云ふ所の如く誠に重要にして、而も好意溢るゝ「日本よ須らく亞細亞民族の指導者となれ」と云ふ放言は、恰も倫敦會議に於ける「極東安定力」と云へる御世辭と同様、誠に有難い次第ではあるが、何等具體化せず、又具體化する便なき空想である。私見に依ればルーズヴェルトの政治家としての卓見又は親日主義は、寧ろ第一に亞米利加へ出稼の日本の労働者に對しては旅券の下附を禁じ、彼等を滿洲へ向はしむる様に行政的措施を執らむことを日本に勧告したること、第二に南滿鐵道は永久に日本鐵道たるべしと爲せることの二點に存し、結局自國のカリビアン海政策（モンロー主義の内出血なるもモンロー主義とは實質的に異なれり）を日本に容認せむと欲したる事實に表現せられて居る。彼の管見の爾餘の部分、即ち日本は亞細亞にモンロー主義を布きて、以て歐洲諸國の蠶食的氣運を除去せられたい、日本は米國が唱道する支那に於ける機會均等主義及び門戶開放主義を嚴守せられたいと云へる放言の、果して日本最良なりや、自己最良なりやは、吾人の如き凡庸の史眼を以てするも、容易に之を觀破することが出来る。先づ吾人は此の會話が何時如何なる環境に於てなされたるやを明瞭に記憶せねばならぬ。時は尙ほ日露戰爭最中で、ポーツマス平和會議開催の準備中である。而して米國政府はポーツマス會議開催斡旋の代償として、會議開催前に日本が門戶開放、機會均等主義及び領土不可侵の原則を嚴守する旨の約束を取附けて居る。此の事は “……at the same time he (Roosevelt) expressed his expectation that Japan would abide by the doctrine of the open door in Manchuria and return that area to China. To this Baron Komura, Japanese Foreign Minister, assented five days later.” (Survey of American Foreign Relations, P. 44.) (同時にルーズヴェルトは日本が滿洲に於ける門戶

開放主義に把住し、右地域を支那に還附せむことを期待する旨を開陳し、之に對し外務大臣小村壽太郎男は五日後承諾を與へて居る）とあるのを見れば明瞭であり、而して之が事實であることは、金子子爵との會話中、ルーズヴェルトが日本は門戶開放主義、機會均等主義を嚴守せられたい云へるに徴して明瞭である。一八九九年にはどちらかと言へば門戶開放主義が、外國の支那に於ける特權に隸屬したが、一九〇五年頃には米國政治家の頭腦では Open Door と Integrity とは車の兩輪の如く思はれて、其の一方を云へば他方は當然含まれる位に考へられたとさへ思はるゝ節があり、ヒューズ氏は華府會議の頃、門戶開放と不可侵とは同一語だと云ふてをるし、九ヶ國條約の第一條と第三條とを對照して見ると兩者は全く混線し其の内容も變つて來て居る。而して金子子爵との談話中ルーズヴェルトの頭の中に映じてゐた日本は、日露戰爭前は、支那大陸に寸毫の足場も有せずして、支那分割の勢を阻止せむとし、米國の門戶開放主義及び領土不可侵の宣言を大早に雲霓を望む想ひで歓迎し、恰も露國の滿鐵敷設、撫順開掘が門戶開放主義に反すと主張した米國の歩(Pawn)と云つた貌のものであつたに相違ない。其の歩を表現する金子子爵に向つて「お前は米國の極東政策の番犬となれ、お前の指導原理は人種主義だ、之に依つて歐洲諸國の支那侵寇を喰ひ止めよ」と命令したものである。日本最良でなくて自己最良であることは百パーセント確實である。ポーツマス條約及び北京條約迄は、日本は米國の對支開明的利己主義の純真なる使徒であり、又あり得た。併し其の翌日からは日本は門戶開放主義に賛同することを躊躇した。今や日本は支那最大の侵略者露西亞の權益を繼承して、而かも其處に居据わらねばならなくなつたのである。米國の極東政策、即ち門戶開放、不可侵は茲に矛を逆にして日本攻撃の攻道具となつた。何

で前記のルーズヴェルトの忠言が日本に妥當し得よう。第一に亞細亞全部と云ふけれども、西藏や外蒙やアフガニスタンや波斯が、日本に取つて何になる。我々は領土的接近が含む所の自然の理法を常に回想せねばならぬ。第二に日本は滿洲に根を下ろすことに因り寧ろ支那を抑へて歐洲の植民國の僚友となり、彼等と同様「白人の重荷」を分擔する身となつた。果然人種主義や、日本の東洋モンロー主義は日本に妥當せざることとなり、日本は歐洲植民國の歩として宿命的に、却つて米國の極東政策に弓を引く身となつたのである。日露戦争後今日迄の日米葛藤史は余の所言を裏書して餘ある。ルーズヴェルトの金子子爵に對する教訓中、眞に日本に妥當するものはモンロー主義でなくて、却つてカリビアン海政策である。換言すれば余の所謂賭戰地域として、明かに限定せられた滿蒙に適用せらるゝ國際帝國主義こそ是である。恐らく茲に日米平和の鍵鑰があると思はるゝ。

マルキシズムは「^{ハイフェッセル}半分の眞理」に過ぎないけれども、儘に適確な半分又は半分弱の眞理を捉へて居る點で相當な強味を持ち、世界は或る程度迄マルクスの云ふ様な徑路を辿つて來た。けれどもマルキシストの大缺陷は人間の本性を觀破する點に於て、ビスマルクやヂスレーリに劣つて居る。經濟主義とは人間の本性たる宇宙自然の法則である。此の本性を持つてゐる人間を共產主義の社會へ入れるならば、全部が寄生虫油虫の様になつて働かないに決つてゐる。強制労働をやつたり、日常品を買ふ爲めに籠を提げた女が二、三町も續く列を作つて佇むと云ふことは、共產主義の名譽でなく、其の反社會性を暴露するものだ。此の思想を國際主義に織込んで他國に對し、植民地に對す、*defaitisme* は必然の結果であつて、社會黨の國は最早や植民地を支配する資格なきものであり、植民地を把持して居るのは最早

や社會黨ではない、正統社會主義でもない、精々^{レイデオニスト}修正派に屬するもので、國粹社會黨と選ぶ處がない。廣東や長江一帯で英國人が豚の如く蹴飛ばされた事實、又印度の民族主義運動が何を意味するかに就いては間もなく言及するであらう。全く同一のイデオロギーから日本の無産黨員や一部右翼の有識なる無識者は、次のやうに主張する。日本が維新後帝國主義に轉向したのは過失である、滿蒙、朝鮮、臺灣をも手放してこそ、有色人種の先頭に立つて、國際水平運動に邁進し、白人種全體と人種戦争を戦ふべきであると。勝つたらうか。余は斷言する、負けるに決つてゐることを。滿蒙を手放したとて支那が日本に加擔すると誰が保障し得るか。萬一勝つたと假定して誰が亞細亞人の指導者となるか。國際水平運動の社會に於ては、人口數の專制行はるゝが故に、夫れは勿論支那か、印度であつて、日本ではあり得ない。國際帝國主義は人種主義と相容れず、斯くて余は此の後者を徹底的に排撃する。

勿論余輩と雖も、人種主義に多少の價値あり、人の想像力を捉ふるに足り、一種の魅力を持つてゐることを知つて居る。けれども此の主義は純正國際主義、即ち超國家の支配する世界に於てのみ意義を持ち得る。夫れは人性がヒューガンの云ふ如く、可塑性を持つと假定して、數萬年か數百萬年後に人間性が根本的に變化した時のことである。見よ、日本の人種案は疑似國際主義の聯盟に依りてすら否定せられたではないか。尙ほ此の人種主義は萬々一余輩の國際帝國主義、特に太平洋國際帝國主義が徹底せず、爲めに日本の現在の國策が全部破産し、日本が國際的無産國となり日米戦争が戦はれ、加之米國を一方とする白人の同士討行はるゝ場合に於てのみ、吾人の使用に適するのである。兎に角當面の政策として余の提唱する國際帝國主義は、人種主義を容認することが出來ない。

第九 太平洋國際帝國主義の應用

甲 日支關係

太平洋國際帝國主義の見地に立つて極東の大局を揣摩するときは、支那は、恰も無政府状態に近きものがあるが如く、混亂に混亂を重ねつゝあるを以て、到底、主に領導者としては國際政治の主體たること能はざるものと云はねばならぬ。故意か過失か兎に角、支那を買被りて其の歡心を繋ぐと欲する米國の感情的理想主義、將又開明的利己主義（マサムン氏は最近“international humanitarianism”の文字を用ひた）は、支那人に「米國は日本に干渉せむ」との謬想を抱かしめ、背後よりする露國の被壓迫民族に對する煽動と相俟つて、今回の如き米國製とも云ふべき亞細亞の嵐を惹起したるが故に、米國は其の昔洪牙利の革命家コシューニコに對する同情熱を早く且つ簡單に清算して仕舞つた様に、初めから輕蔑し排斥して居る支那人の代表者顧維鈞・施肇基熱を早く清算し、眞正の實質的利益の命する所に從つて行動せねばならぬ。然るときは外力の加はらざる結果、自然に支那は安定し、眞に四億萬大衆の幸福に必要な内政改革の道程に上るに相違ない。明鏡止水に近き支那と日本とは、錯綜せる依存關係に促されて意識的に共存共榮の道程に上る可能性が多分に有り、最近傳へらるゝ國民黨政府の親日への國策轉換又は青年學徒の「亞細亞人の亞細亞」の提唱の如きは、何れも或る程度まで歓迎すべき新動向を示すものと云ふべく、我方は斯くの如き機運の醸成に意を用ふる所あらねばならぬ。併しながら滿洲國の誕生と云ふ新事實を前にして、果して春日藹々たる日ばかり続く

かは頗る疑問であつて、究極に於ては宇宙自然の理法に従ひ、日支關係が物理力に従ひ、之を基調として定まることを吾人は明解しなければならぬ。特に吾人は、彼の鐵道會社の運賃割引競争の様に、對支不統一戦線に混入して讓歩の安賣を競争し、以て支那人の歡心を繋ぐとするが如き政策の如何に慘澹たる結果に終るかを銘記し、自主的に設定したる太平洋國際帝國主義の一路を勇往邁進しなければならぬ。

乙 對聯盟關係

太平洋國際帝國主義の立場より云へば、又日本の今日の立場より云へば、疑似國際主義の國際聯盟の如きは最早や問題とする價値だになく、壽府の平和營業者の如きは好戰的平和論者として貶し去るべきである。聯盟が米國を追慕し、米國が自ら下手人となつて半殺しにして置いた筈の聯盟に呼び掛けるが如きは、信念なき兩者の弱點を暴露するに過ぎない。國際紛争の芥棄場の如き聯盟に、大人が多勢集つて噪ぐ程のことではあるまい。脱退することに依り未成年帝國主義國日本と疑似國際主義聯盟との間に存する矛盾（之は聯盟加入前に清算するのが定石であつた）を清算するか、將又、リチュアニー、波蘭間の紛争の際、波蘭の領土擴張を認めた場合の如く、聯盟が百尺竿頭更に一步を進めて可塑性を發揮して日支紛争を直接交渉に委し、爾餘の不消化物を丸呑みにして局を結ぶか、二者其の一に落着くであらう。余輩には聯盟と云ふ機關人格の有する目的三段論法の關係上、將又聯盟總會に附議される關係上、抽象論として前の方が遙に實現性多きやに思はれる。

太平洋國際帝國主義に依れば日支關係や對聯盟策は枝葉末節の問題となり、日本は何處迄も孤立することなく、日米

關係は日露戰爭前の如き圓滿な事態に復歸すべく約束されて居る。然るときは日本の自今の孤立が、歐米人や支那人の少數者が待望する様な米、露、支三國の對日同盟と云ふ様な形式となつて具體化し、日本が死地に陥る様なことは決してあり得ない。即ち我國の外交國難は打開され、國際危局は自然に解消して行くこととなる。されば太平洋國際帝國主義の爲めには、日本外交の七、八割の努力を米國に向つて傾倒する必要がある。知らず如何にせば日米間の國際主義を恢復することが出来るか。惟ふに太平洋國際帝國主義の妥當性の「テスト・ケース」は實に對米關係を整調し得るや否やの一點に存する。

丙 日米關係

日米が太平洋國際帝國主義の上に握手し得るや否やは、該主義が兩國の要求を調和し其の争點を解消して、兩國を融合せしめ得るや否やに關係し、結局外交上の“give and take”に於て共に利益するか否かに依つて決せられる。然らば日本の米國に與へ得るものは何か、余の見る所では夫れは必ずしも貧弱ではない。

イ 米國矜持の満足 由來極東に對しては必ずしも不干涉主義に把住しなかつた米國は、華盛頓會議を以て極東問題の清算所となし、全亞細亞に號令するの概があつた。支那人は日支衝突起るの以來らば米國は必ず干涉すべしとなして増長其の極に達した。此の自惚をもてる米國に取り、滿洲事變の勃發は其の威信問題に觸れざるを得ない。過去約一年有餘の外交交渉に於ける米國當局の苦惱は専ら實力的干涉の不可能と、世界の主人公たる矜持との間の間隙を如何にして充すかに存した。若し日本より特使を派遣する等様々の手段に依り、太平洋國際帝國主義を提げて平和の

握手を求めたならば、此の舉措は米國の面子を救ひ米國の輿論を緩和し、日米國交を兩國の眞實の利益に合致せしむる様整調するの誘因となる可能性を充分に持つて居る。

ロ モンロー主義及びカリビアン海政策の承認 モンロー主義もカリビアン海政策も米國の自主的帝國主義的外交政策であつて、此の前者だけは聯盟規約に依り消極的に認められて居る。太平洋國際帝國主義は相互に生命線、賭戰地域の不可侵を約束し、お互ひに他國の戰爭系統の中核に觸れないことを約束するの必要あるが故に、日本は須らくモンロー主義及びカリビアン海政策を承認すべきである。嘗て日本人が墨國の太平洋岸に漁業や商業の足場を得むとして米國人の反對を招いたのであるが、日本は今迄も既に然る如く、爾今組織的に米國のカリビアン海政策に觸れることを差控へ、英國と共に米國の門戸封鎖を獎勵すべきである。石井子爵が日米協會の新駐日米大使歓迎會の席上、日本は北米大陸を侵す意圖を持たないと云うた言葉は、結局余の主張を裏書するものである。石井・ランシング協定は「地理的接近」に關する宇宙自然の理法を掲げ、米國の墨國に於ける地位と日本の滿蒙に於ける地位とを互認して居る。之は既に適確なる太平洋國際帝國主義の萌芽であつて、此の際吾人は之を完成しなければならぬ。

ハ 移民問題 日米新條約は移民を認め、日米紳士協約は日本が自發的に移民の送付を差控へることを約して居る。故に米國の日本移民禁止は條約違反たること疑ひなく、埴原抗議は全然正當である。けれども太平洋國際帝國主義の提唱者たるべき素質を持つ日本は、欣然としてこの際泣き入りするの腹を決め、之が爲めに戰爭する意思は絶対に無いことを實證するがよい。加之現世に於ては疑似國際主義の聯盟規約に現はるゝ如く人種は不平等である、現世の

客觀的正義は人種の差別待遇を必要とする。従つて吾人は此の見地より國際帝國主義と兩立せざるものとして人種主義を排撃し去つた。此の精神を擴充して我國は埴原抗議及び大正十三年五月三十日附の嚴重なる抗議を斷然撤回すべきである。因に余は今 "Grasse Politik" を論ぜむとしつゝあるのであるから、實益尠なき法律以下の問題を輕視するは已むを得ないことを謝つて置く。

ニ フィリッピンの不可侵又は永久中立 朝飯前の戦争に依りて手に收めたフィリッピンは、勿論帝國主義のルビコン河を越えたる米國の國內問題である。一九〇九年及び一九一三年の條令に依り、米國が其の門戸を閉鎖したのも合法であると思ふ。併し同島に關し米國人が日本の意圖を疑ふことはスチムソン氏のボラ氏宛書簡其の他に徴し明瞭である。日本は米國が希望するに於ては其の永久中立又は不可侵を約束すべきである。余の此の提案は決して新奇なるものにあらず、桂公は桂・タフト協定に於て、朝鮮に於ける自由行動と交換にフィリッピンの不可侵を約束して居るのである。此の精神を一層強調して四ヶ國協約に筋鐵を入れることは、日本が當然米國に提議して然るべきことである。エリオ其の他の佛國の政治家は、英、米、佛の協調が世界平和の大黒柱であると考へて居る。黒人の狙ひ所は大體一致するものと見へる。

以上四つの事柄は決して空疎なる讓歩ではなく、米國が次に述ぶる三點に於て日本に讓歩を與ふる場合、其の交換條件として夫に比例してのみ之を容認すべきである。然らば日本の求むるものは何であるか、外觀上重要であつても内容上は然かく重要なものではない。米國が自己に内在せる外交政策の矛盾、加之危險を清算する意思あるに於ては

特に然りとす。

イ 九ヶ國條約特に門戸開放主義と不可侵^{インテグリティ} ブリアンは聯盟規約でも不戰條約でも締約國が之に賦與する程の意味をしか持たぬと云つた。之は根柢に於て國際無政府状態が世界を支配して居ることを回想すれば充分に諒解し得る事柄である。滿洲事變が起つた場合、日本が最近一箇年間とり來つた解釋を採用することも、米國がスチムソン氏の最近一箇年間にとり來つた解釋を採用することも、それは國家が目的主觀を持つ以上當初から約束済みのことであつて何れの解釋も有效である。之を國際無政府状態と云ふのである。喧傳せらるゝ日米の政策の衝突も實は此の條約を中心とし、之に歸するものであつて、夫れが爲めに日米間に慢性的戦争ありと云ふも過言でなく、若し米國が絶対に優勢にして必勝生還を期し得、日本が弱勢にして他國の狩獵の目的となるが如き國情であれば、何時急性的戦争に變化しないものでもない。太平洋國際帝國主義は之を放擲して置くわけには行かない。特に今日國際政治上兎に角米國の主張に分があつて、聯盟の調査委員會すら稍ヤスチムソン・ドクトリンに影響せらるゝの傾向ありと傳へらるゝに於てをや。

借て門戸開放主義と不可侵^{インテグリティ} (主權、獨立の尊重並に領土的及び行政的保全の四者を含む) に就ては稍や詳細に述べなければならぬ。蓋し日米問題の中核が茲に存するからである。一八九九年に於ては、門戸開放主義は三項の通商衡平待遇を意味し、明に政治的特權租借地等の下位にあつた。此の事はヘイの通牒に對する英國の回答文中に將來獲得することあるべき租借地に於ても亦此の主義を遵守しようとして書いてあるのに徴しても明瞭である。"vested interest"なる文字は政治的特權にも適用せらるゝから無害のものと思ふことが出來、結局ヘイ氏の通牒は通商衡平待遇以上に出

でぬ。然るに其の後日本が露國の滿鐵敷設、撫順開掘に抗議せることあり、日、米協力して本主義の内容を擴充し、政治的特權と門戶開放主義との間の無政府状態を助長した。先づ門戶開放主義は商業のみならず工業にも適用せらるゝに至つた。次に利權特に鐵道や借款にも適用せられ、四國財團の組織に關する公文中には “complete commercial neutralization of Manchuria” と云ふが如き文字があつて、錦愛鐵道の敷設、滿鐵中立の提議に迄發展して行き、門戶開放主義は自然に不可侵^{インテグリティ}と同意語に變つて行つた。日露戦争後我國が困難なる地位に立つに至つたのは必然の運命である。我が外交界の耆宿石井子爵が、石井・ランシング協定（實は石井ウキルソン協定）を締結して、「地理的接近」の宇宙自然の法則を掲げ、日本の滿蒙と米國の對墨政策とを互認し、大洋國際帝國主義の親石を置いた結果、前記の無政府状態は稍や緩和された。石井・ウキルソン協定を前にして今度の事變が起つたのなら日本の外交的立場は比較にならぬ程容易であつたらう。此の協定を棄てたのは掌中の切札「アース」、「ポイント」を棄てたものである。けれども右協定は宇宙自然の理法である、現實の最深所に躍動して居る此の理法を日、米共に如何ともすることが出来ない。

門戶開放主義には不可侵^{インテグリティ}と云ふ文字が附隨して居る。米國はワシントン、ヂェフ・フーソンの遺訓もあり、政治的葛藤を避ける趣旨から政治上の特權を得るを欲せず、獨自支那の不可侵を尊重し、義和團事件に關する公文中にも此の文字を用ひて居る。ヘイ氏の第一回回狀中に於ては、序文の中に一度發見せらるゝ文けであるが、高平・ルート協約、日英同盟條約、ポーツマス條約、日露協約、石井・ランシング協定中に於ては independence, integrity なる文字と

the open door とが本文中に併記して有り、鮑明鈴君は一九〇〇年七月三日のヘイの回狀中に “territorial and administrative entity” とあり、同年七月十八日同氏の支那公使宛書簡中に territorial and administrative integrity” とあるを以て、爾來「不可侵」は門戶開放主義の “co-ordinate and complementary principle” となつたと説明して居る。ヘイの第一回回狀は唯だ門戶開放主義を提唱する文けであるから矛盾を含まない。けれども爾後の協定は一大矛盾を含んで居る。何故に門戶開放主義を必要としたか。租借地や勢力範圍が出来上つて支那の不可侵^{インテグリティ}が存在せざるに到つたからである。支那の不可侵が現實であるならば、最惠國待遇問題は米支間文けの問題である。支那以外の列強と米國との間に協定する必要はない。門戶開放主義は integrity の不存在を豫想するものであり、integrity があるならば門戶開放主義は最早や列強間の問題とならない。此の事實は努めて支那に有利に物事を解しようとする鮑明鈴君すら否定して居ない。彼は率直に次のやうに云つて居る。

“That is, valid commitments and agreements, however they might infringe upon the integrity of China, are to be considered as consequences of the legitimate exercise of sovereignty ex contractu and not inconsistent with the doctrine of the integrity of China.” (Bau: The Open Door Doctrine, p. 137.)

（即ち有效なる容諾及び協定は如何程支那の不可侵に違背するものであらうとも主權の合法的行使に依る契約の結果にして、支那不可侵の原則と兩立するものと思考せらるべきである。）

然るに日露戦争後、政治的特權の優位の原則の確立、又は政治的特權と門戶開放主義との間の矛盾の清算に向つて

嘗て徹底的に眞摯なる努力の拂はれたことなく、ランシングが與へ日本人も受容れた特殊權益は、門戸開放主義と、*"in consonance with"*の關係に在りとの迷妄なる解釋に依り、却つて門戸開放主義優位の原則が次第に確立せられ、九ヶ國條約に於ては支那も締約國に加はり門戸開放と不可侵とは共に擴充せられたる上、融合し、兩者間の關係は特殊權益國に向つて絶對的不利益を意味するやうに内容が變更せられ、顧維鈞君は既存條約の效力を新條約の原則に照し検討すべしと主張し、ウイロービー氏はルート決議案第三條（九ヶ國條約第一條）に *"establishing and maintaining"*とあるは九ヶ國條約が週及力を有するの證據であるとなし、*"It would seem, then, that, should a favourable opportunity present itself, it would be desirable to have a special conference of China and the Powers for clearing up this situation."*と云つて居る。果して之が容認せられると云ふならば政治的特權の存立の餘地はない。張學良の條約違反は實は條約上の權利を行使して居たものとなる。斯くては革命外交も、亞細亞の嵐もその自然的歸結であらねばならぬ。鮑明鈞君は門戸開放主義は機會均等主義と不可侵との兩主義を含んで居るかの如く説明して居るが、甚しき牽強附會である。門戸開放が機會均等と同一語なることは九ヶ國條約第三條に *"The Open Door or equality of opportunity"*とあり、ハーコートが *"Open Door, by which freedom of access for the commerce"*と云ひ、チャールズ・バースフィールド卿が *"Open Door or equal opportunity for the trade"*と云つて居るに徴して明瞭である。不可侵なる文字が門戸開放主義と併置せらるゝ様になつたのは、既に述べた通り一九〇〇年七月以後のことである。而して爾來條約文、公文中に門戸開放不可侵と併記せられ、米國人は同一語なりと解する様になつた。華府會議議長ヒューズ氏は、兩者

は同一語でただ語調の置き所が違ふだけだと云つて居る。之は理論上大なる誤謬であるが、米國の極東政策イデオロギーには合致する。斯くて反對者もなかつたので、門戸開放なる文字は不可侵なる語の内に解消して行つた。

惟ふに *integrity* の語の中に殆んど解消し去らむとする門戸開放主義を、九ヶ國條約の内で矛盾なく云ひ表はし、以て日本の利益を確保する爲めには之を次の如く分析する必要がある。

(一) 支那の *integrity* の破片を所持せる國に對して、米國の門戸開放主義即ち内國民待遇の要求。

(二) 殘存せる支那の *integrity* に就き之を尊重する旨の約定。

門戸開放主義が通商條約上の最惠國約款を意味することは權威ある米國學者の認むる通りである (*Council on Foreign Relations: American Foreign Relations. pp. 13, 16, 19, 35.*)。此の解釋はワシントン、デューアンソン等の遺訓、ベルリ提督の使命が重商主義にあつたことと吻合する。若し門戸開放主義が「政治上の最惠國待遇」(*political most-favoured-nation treatment*)を意味するならば、米國は何故に租借地を獲得しないのか、之を爲さざりしのみならず、却つて回避したのは、ワシントンの遺訓に「通商、然しながら出来るだけ尠ない政治關係」とあつて、不干渉の原則に縛られて居たからではないか。米國公使の或者は政治問題に關係して本國の叱責を受けて居る。米國がライオンシュ以降の公使を叱責しなかつたのは國父の遺訓に背くものではないか。果然米國は戰爭を賭する程の政治的葛藤に深入りした。夫れは次の點で述べる。兎に角最惠國待遇の意味に於ける門戸開放主義に反對する國は一國もない。米國に親愛なる固有の意義に於ける門戸開放主義は決して戰爭の原因となり得ざるものである。

不可侵の問題に至つては全然別である。不可侵は既に支那に存在しない。是れ外務省公文中に擬制なる文字を發見する所以である。問題になるのはせいゝ殘餘の不可侵丈けである。

門戶開放主義が最惠國待遇を意味し、此の文字が夫れ自身 entanglement を拒否するものであつて、ワシントン以來歴代大統領が此の思想を確認し發展せしめて來たことは前述の通りである。巴里平和會議の節、聯盟規約第十條が問題となつた時、ランシングは米國の傳統政策に鑑み、締約國は各自國の關する限り不可侵を尊重すると云ふ趣旨の案文を提示した。理想主義のウキルソンは之を却けたけれども、後に至り上院議員に對して同條は道德的義務を負はしむるに過ぎないと説明した。夫にも拘はらず此の問題を中心として米國は聯盟規約を含むヴェルサイユ條約の批准を拒否した。米國の傳統政策に合致する爲めには「自國の關する限りの不可侵尊重」でなければならぬ。然るに米國は東洋に緊切利益を持たない儘に感情的理想主義、開明的利己主義等に導かれ、門戶開放主義を不知不識の間に不可侵に發展せしめ兩者を同一視して居る。借問す、之れ口頭禪か眞劍か。支那を支那本部の意味に限定してさへ支那には不可侵の殘餘はあるも不可侵は存在しない。何故に米國は露國を外蒙及び新疆より驅逐しないか、何故に英國人を西藏九龍より驅逐しないか、何故に佛國人を雲南貴州及び廣州灣より驅逐しないか、何故に露國及び日本を滿洲内蒙古外蒙古新疆より驅逐しないか。驅逐しないならば口頭禪であつて眞劍でない。恐らく米國人も其の眞劍ならざるを知つて居る。それでも押して此の口頭禪を使ふ理由如何と云ふに、そうして居れば其の受益者支那は勿論、自信力なき弱小國や、退嬰外交の國が其の軌道内に不知不識の間に捲込まれて來るのを期待出來るからである。其の證據は犀利な

る批評家 Tyler Dennett の次の一言に昭々として明かである。

“Perhaps the most conspicuous characteristic of American policy in the Far East, viewed in the large, has been the desire to get something for nothing.” (Current History, XXXI, 21.)

(恐らく米國の極東に於ける政策の最も顯著なる特質は、之を概観すれば只で何物かを得むとする慾望であつた。) 尙ほ次の國務卿ノックスの言に一層明瞭である。

“I still believe that the wisest and best way for all concerned is for us to stand firmly on our pronounced policy and let it be known on every other occasion that we expect fair play all around. There are indications that we shall in the future receive more support for our policy from Great Britain than we recently have had.”

(余は信ず、關係國に取りて最賢最善の方途は我國の關する限り吾人の發表濟みの政策を固執し、好機會ある毎に、吾人が一切の國よりフェア・プレーを期待する旨を公表するに若くはなし。吾人は將來吾人の政策に對し英國より従前に倍する支持を受け得べきが如し。)

不可侵が米國の口頭禪に過ぎないと云ふ吾人の斷定が獨斷でないことは、門戶開放主義の眞摯なる研究家鮑明鈞君が次の様に云つて居るのに徴しても亦首肯出來るであらう。

“Nor must China hypnotize herself into the belief that the United States will fight for Chinese integrity,

and acting upon this belief, fail to provide her means of national defense. In declaring the Open Door Doctrine, the United States Government simply states its own policy or attitude and asks the other Powers interested to do likewise." (Bau: The Open Door Doctrine, p. 184)

(支那は合衆國が支那の不可侵の爲めに戦つてくれるであらうと云ふ事を信じきつて自分を催眠術にかけ、此の信念に頼つて或ひは、國防を等閑に附するやうなことがあつてはならない。合衆國が門戸開放主義を聲明したのは之に依つて單に其の政策又は態度を表明し、利害關係を有する他國が同様に行動せむことを求むるものたるに過ぎない。) 余の信ずる所に依れば國際政治の統一原理は民族主義にして、外交の聖諦第一義は主觀觀念の客觀觀念化にある、內在的需要の國際的當爲化にある。此の信念なき者が他國の口頭禪にすら易々として引摺らるゝのは必然である。茲に於て石井・ランシング協定は廢棄せられ、九ヶ國條約は締結せられ、米國は nothing に對し everything を得、日本は其の反映として唯だ當然の權益を守る爲めに自國の生命を賭し、自國を焦土となすの覺悟を決めなければならなくなつた。誠に慨嘆に堪えない次第である。當時勿論米國の弗外交が動いたでもあらうが、債務國よりも債權國が強い様に思ふのはヴェニススの商人の頃の話であつて、今日に於ては却つて債務國の方が強い位であるから、九ヶ國條約に對しては矢張り慨嘆する餘地がある。

爾來九ヶ國條約、不戰條約、聯盟規約と云ふ様な感情的理想主義や、疑似國際主義が地球上に横行濶歩した。然るに是等のものは何れも植民地や半植民地の反抗を煽動するもので、夫れ自身平和の脅威である。宇宙の理法を擱んだ

者には空想的平和論者を好戰的平和論者と呼んでよい理由が解る。果せる哉、宇宙自然の理法であつて現實界に妥當する國際帝國主義は日本に託宣して遂に劍を執つて立たしめた。

米國は今や清算しなければならぬ。既に地に委せられた口頭禪たる感情的理想主義、疑似國際主義、將又支那の不可侵を選ぶか、それとも國際帝國主義を選ぶかを。近代北米の英雄兒ルーズヴェルトはタフトに送つた書簡に於て米國の進むべき道を明かに指示して居る。

"Our vital interest is to keep the Japanese out of our country and at the same time to preserve the goodwill of Japan. The vital interest of the Japanese, on the other hand, is in Manchuria and Korea. It is therefore peculiarly our interest not to take any steps as regards Manchuria which will give the Japanese cause to feel, with or without reason, that we are hostile to them, or a menace in however slight a degree to their interests. . . . I do not believe in our taking any position anywhere unless we can make good; and as regards Manchuria, if the Japanese choose to follow a course of conduct to which we are adverse, we cannot stop it unless we are prepared to go to war, and a successful war about Manchuria would require a fleet as good as that of England, plus an army as good as that of Germany. The Open Door policy in China was an excellent thing, and I hope it will be a good thing in the future, so far as I can be maintained by general diplomatic agreement; but, as has been proved by the whole histo-

ry of Manchuria, alike under Russia and under Japan, the "Open Door" policy, as a matter of fact, completely disappears as soon as a powerful nation determines to disregard it, and is willing to run the risk of war rather than forego its intention."

(吾人の緊切利益は日本人を國外に喰止め、同時に日本の好意を繋ぐに在る、之に反し日本の緊切利益は滿洲及び朝鮮に在る。故に滿洲に關し、理由の有無に拘はらず、吾人米國人が日本に對し敵意を有すとか、又は如何に輕微な程度と雖も米國人が彼等の利益を脅すとか、いふことを日本人をして感得せしむるが如き行動を執らないことが特に必要である。吾人は善後の確信を有せずして如何なる場所にも態度を決するを不可とするものである。若し日本人が、滿洲に關し、吾人が不可なりとなす行動を執ることあるならば、吾人は戰ふの用意なくしては之を阻止し得るものでない。而して滿洲に關し戰勝を收めむとせば英國海軍の如き海軍加之獨逸陸軍の如き陸軍を必要とする。支那に於ける門戶開放政策は實に結構な事柄であつた。余は將來も亦一般外交協定にて維持し得る限り然らむことを望むも、露國及日本治下の滿洲全史が證明して餘りある如く、事實問題として門戶開放主義は一強國が之を無視せむと決意して、其志望を棄てるよりも、寧ろ敢て一戰も辭するものではない、と決心する其時こそ該主義が全く消失する。) 然しながらルーズヴェルトの日本に教ふる所の眞意は、既に述べたるが如く人種主義や、金子子爵の祖述せらるる準絶対帝國主義の意義に於けるモンロー主義でなく、却つてカリビアン海政策である。余の所謂「賭戰地域」の原則の標榜である、亞米利加は教へる、然るに何故日本は學ばざりしや。

華盛頓海軍條約、特に其の防備現狀維持に關する規定に論及してウリアム氏やビュエル氏が、是は極東問題に關しては不干渉の態度に出づる旨の證言を與へたのと同じであると主張し、フレデリック・モーア氏が

"To the writer the way for the United States in the matter of naval armament and in that of affairs across the Pacific appears very clear. We have no reason for possessions across that ocean, entailing the maintenance of many naval vessels in Asiatic waters. The East, remote from us and too little understood by our people, and where our material interests are comparatively small, is not a sphere in which our diplomatic representatives and naval officers should exert a special political influence. The sphere of the Monroe Doctrine, if we will, is ample for that" (F. Moore: America's Naval Challenge, chap. VIII.) (海軍軍備及び太平洋彼岸の問題に關し、合衆國の進むべき路は本書の著者には極めて明瞭である様に見える。吾人は亞細亞海面に多數の軍艦を維持するを必要とする様な太平洋彼岸の領地を領有するの理由を持たない。遠隔の地、東洋は吾が國人に依りて餘り了解せられず、且つ吾人の享くる物質上の利益も比較的尠なるを以て、吾人の外交代表や海軍士官が特殊の政治的勢力を振ふべき地帯ではない。モンロー主義の布かれてある地域は吾人にして之を欲せむとするも既に充分である。)

と喝破して居るのも全く同一の主張である。然るに日本は自己の内在的需要を高調し、石井・ランシング協定を固執し、且つ該協定が門戶開放と不可侵とを對等に置くの矛盾を指摘して其の内容を有利に變容することを忘れ、米國の

只で何物かを得よう(タイラー)、兎に角自國の標榜せる政策に他國を引摺つてやれ(ノックス)、外交協定の手段に依つて維持し得る限りは維持しよう(ルーズヴェルト)と云ふ政策に極めて容易に追隨したるが故に、今日の客觀的情勢より判斷するときは、米國の外交は必要以上に成功して nothing を以て everything を得、芦田博士も議會に於て指摘したる如く、日本の外交は顛落して日本は唯だ高價に購はれた當然の權益を維持する爲めに國命すら賭することとなり、日本の外交は日本の需要に應じ得ざるものとなつた。其の結果として米國の妄想たる(國際政治の現實界から見た場合に)疑似國際主義は翹翼を張りて高翔し、大洋國際帝國主義は泥土に委せられた。此の鬱園氣に包まれた爲めに、帝國政府が過去十五年間、内閣の如何を問はず一貫して誠實に墨守し來りたる、而して幣原外交の名に依りて特色づけられたる、論理的には間然する所なき隱忍自重の協調政策は、何等の收穫を收め得ずして、悲しむべき亞細亞の嵐は生れた。日米の人道平和製造業者、祈禱業者、女流白人政治家達、若し駁論あらば請ふ與り聽かむ。

滿洲事變は人類物理学の法則に従つて起つた。米國が標榜せる九國條約、不戰條約に現はれたる疑似國際主義は置々として日本を攻撃し、眞黒の陰慘なる米國新聞紙面は氣の弱い者を氣絶せしむるに充分であつた。然らば米國の言行は一致したか、斷然否(尤もこの時日本の海軍が米國海軍の三四割で米國大海軍の面白き狩獵の目的物であつたならば“something for nothing”の慾望に驅られて同海軍はやつて來たかも知れぬ。冷鐵は感情的理想主義から理性的大洋國際帝國主義に轉向せしむる最良の下熱劑であつたのだ)、始めから一致しないことに約束されてゐる。夫れは余輩の今迄縷述した所に依つて文書の上で明證せられたことで、又今次の事實が之を裏書した。萬雷の轟くが如き日本攻撃の裡に、米國外交の全責任を負

ふ政治家の口から、滿洲の爲めに米國青年の血を流すは罪惡なりとの聲は聞えた。自國最良なるが故に日本移民排斥の急先鋒であるハースト系新聞紙は、此の自國最良を發揮して、經濟封鎖は戦争に導くぞよと警告した。米國は落着くべき眞の重心に落着いて、上海事件の時にすら動く色はなかつた。此の時に當つて米國國務卿の地位程困難なものはない。當然期待せらるゝが如く、措辭激越の抗議は太平洋の彼方から東京に霞下した。然し夫は感情的理想主義疑似國際主義より國際帝國主義に對する抗議であつて、其の内には米國自身國際帝國主義に轉向する準備と見做すべき節さへある。そして結局米國の聯盟臨時參加、合法性否認政策に到達した。支那青年の期待した米國の對日武力干渉は夢幻と消えた。弱點の暴露にあらすして何であるか。果然米國は理性的大洋國際帝國主義の重心に引付けられた。此の過程に於てスチムソン卿は氣の毒にも米國の言行不一致を一身に體現するの役目を擔うた。一方彼は、或は日本に向つて或は國內に向つて、言葉の上で、日本が九國條約、不戰條約に違反したことを暗示し、侵略の果實を承認する能はずと斷じ、國內より揚がるスチムソン・ドクトリン排撃の聲に直面しては疑似國際主義の看板、九國條約、不戰條約の手前、日本に對し不愉快の言を爲さざるを得ざるの苦衷を訴ふるものゝ如くである。他方スチムソン卿及び米國は實行上に於て米國が滿蒙に於て日本と競争し、日本の既得權を否認し、日本の行動に干渉するが如きことを敢てするものにあらざることを證據立て、居る。滿洲國の承認が最早や確乎不拔の現實とならむとして居るのに、米國側が何等の反作用を示さざるは之が爲めである。スチムソン卿は日本で不評判であるばかりでなく、米國々内に於ても孤立を氣遣はれて居る。疑似國際主義と大洋國際帝國主義との中間に彷徨しつゝ、而も後者に引摺られて居るのであ

る。眞意を汲んで見れば斯くの如き眞實の友情の披瀝が何處にある。余輩は此の意味に於て、同胞より唯一人孤立するとも、敬虔なる態度を以て米國及び其の國務卿の前に脱帽するものである。

由來傳統的古武士的日本人は深刻なる意味を掴む人種であつた。忠臣蔵の加古川本藏の芝居を見た者は記憶するであらう、彼は淺野内匠頭を抱き止めた自身の所爲の不覺であることを知つてゐた。彼は大石の宅を訪ねて其の本心を明かさず、悪口雜言をついて、自分の女婿たる力彌に刺し殺される。其處に大石良雄が出て来て、死に依つて自身の過失を贖ひ、且つ女婿に功を樹てさせる彼の衷情を憐む。古人の歌にも「底ひなき淵やはさわぐ山川の淺き瀬にこそ仇浪はたて」とある。米國の疑似國際主義は尙ほ仇浪を揚げて日本を攻撃して居る、併し「明白なる運命」に従ひ一大陸と二大洋の大半とを掩ふ米國の國際帝國主義は底ひなき淵の内に沈黙を續けて居る。門戸閉鎖主義者米國は日本に許すにカリビアン海政策を以てして居る。太平洋の米海軍も望むらくは間もなく一部は大西洋に歸るであらう。深刻なる現實は自己主張を爲す必要なきが故に把握頗る困難である、幸にして余は之を發見した。觀じ來れば日米提携は宿命である、太平洋國際帝國主義は昔より既に現實界のものである。吾人の任務は唯だ之を發揚するに在る。日米戦争は斷じて宿命でない、否寧ろ日米兩國人が其の宿命に背くならば日米戦争の來る處れがあるのである。此の見地に立つとき吾人は始めて前途に拓ける担々砥の如き外交國難打開の一路を發見するものである。

日本は今や清算しなければならぬ。感情的理想主義や疑似國際主義の尻馬に乗つて亞細亞の嵐を繰り返すか、それとも國際帝國主義特に太平洋國際帝國主義の大旗を翳して列強の領導者となるかを。而して日本は金剛不退轉、其の

後者を選んだ。日本外交界の耆宿内田伯が日本は焦土となるとも滿洲國は之を承認すと云ひ、石井子が若し米國にして日本人の大陸發展に干渉せば戦争は必至の勢に置かれると云つたのは此の意味に解すべきものである。滿洲國は我輩の命名した賭戦地域であつて、米國より以南パナマ運河に至る地域の米國に於けるは滿洲國の日本に於けるが如きものである。大觀すれば世界政策に於ける日米協調は宿命である。石井・ランシング協定は宇宙自然の理法に基礎を置いてゐる。余の老師石井子爵が「石井・ランシング協定は猶生く」と云はれたのは此の意義に解すべきである。太平洋國際帝國主義の立場から云つて最も遺憾に堪へない事は、日本が此の主義の爲めに華盛頓會議に氣を吐かず、従つて米國人をして何等日本人の好まざる所を強ひて日本に押付けたとの感じを抱かしめずして日本が九ヶ國條約に加入したことである。日本外交の一大蹉跌は實に茲に在る。

余の確信に従へば、究極する所平和の原因も戦争の原因も共に生命に内在し、本來平和愛好國民も戦争愛好國民もない。唯だ環境に對する生命の反作用が行動の差異を生ずるだけである。其の證據には如何なる人間にも一面闘争本能と憤怒情操、他面逃走本能と恐怖情操とがある。今米國人の對支政策の本質は分析の結果最惠國條款と、「只で」而して「外交協定」丈で貫徹され得るものなれば維持しようとする不可侵——現實の存在でない所の一丈けである。換言すれば九ヶ國條約は感情的理想主義と重商主義との産物であつて、闘争本能生起の原因、従つて戦争生起の原因となり得ざるものである。嚴興著「東北各省の國際關係」は述べて曰く、「合衆國の亞細亞に對して門戸開放主義を抱き、南北兩米大陸に對してはモンロー主義を抱く、其の肺肝燭見すべきにあらずや」と。之に反し日

本の生命線否賭戦地域は、本質上極度に鬭争本能を激發するものであることは何人も既に經驗した。若し大政治家があつて、一九二一年に我が鬭争本能を激發して米國の逃走本能に拍車をかけたならば九ヶ國條約は出来なかつたであらう。其の結果石井・ランシング協定は效力を存續し、不可侵は結局「不可侵の殘餘」を意味するのだと云ふことが明瞭となり、國際帝國主義の對支統一戦線は維持せられ、支那人は理性を保ち、亞細亞の嵐は起らず、日本は米國の顔に泥を塗らずに済んだであらう。併し米國人は記憶せねばならぬ、吾人は米國の眞骨頂たる大洋國際帝國主義の巍々たる温容に泥を塗つたのではない、米國が謬つて假面として採用した疑似國際主義に泥を塗つたに過ぎない。けれども吾人は謝すべきである、而して米國は恕すべきである。此の儀禮は彼の大西洋を渡つて英米不戰の主義を確立したマクドナルドの手腕に學び、帝國の宰相が須らく太平洋を渡りて果たすべきであると自分は確信する。夫れは大洋國際帝國主義は絶對又は準絶對帝國主義と異なり、虚心坦懷 *"live and let live"* の原則を互認することに依つてのみ成立し得るからである。此の點に就ては間もなく更めて今一度論及する。

九ヶ國條約は如何に變容又は解釋せらるべきであるか。余の私案に従へば、第一は、最も簡明直截に新滿洲國の全領域を本條約の適用區域より除外するに在る。既にヘイの公文に對する獨逸の回答は露國の滿洲占領に鑑み、滿洲を除外して居た。英獨協商また然りである。華府會議の時ルート決議案は支那本部のみに適用する趣旨に起案され、支那代表の反對で漫然支那に適用することとなつた。ルート自身此の位無關心であつた。第二は、門戶開放なる文字は最惠國待遇の意味に解し、不可侵なる文字は不可侵の事實上の殘存部分の意に之を解すべきである。何れの場合に於て

も公文交換を以て必要の手續を完了するを可とする。

斯くの如くするときには大洋國際帝國主義は確立し、之より結果する軍縮條約の公正妥當なる最終的解決と相俟つて始めて國際平和は鞏固なる基礎の上に置かれ得る。國際間は無政府状態を原則とするが故に、九ヶ國條約は日本が正當なりとする意味以上の意味を有すること能はず、國際政治に於ては合法性否認なる文字は之を好まざる默認の意と解すべきものである。

宇宙の理法は最惠國待遇感情的理想主義が生命線(賭戦地域)の原則に譲り、*"something for nothing"* の國際政治的奢侈的慾望が、自國を焦土となすの危険を冒しても達成せむとする慾望に譲ることを要求する。宇宙の勢力均衡の法則は鬭争本能と逃走本能とが衝突しないと云ふ原則の上に立つてゐる。此の理法に従ふことこそ即ち國際政治經濟關係の調整であつて、平和に貢献する所以であるのだ。米國は自然の攝理に従つて *"evasion of problems by withdrawal"* と *"development of its own policy with an ultimate use of force if necessary"* との間で最終的に選擇を爲さねばならぬ。余は確信する、宇宙の理法は米國をして此の前者を選ばしめ、大洋國際帝國主義を再び時代思潮の表面に現出せしめるに到るべきことを約束して居ることを。

□ 軍縮條約 軍備の本質は軍縮條約が軍備の量を縮少又は制限するのみならず、其の用法を定むることを要求する。軍縮條約が平和に貢献する程度は其の制限縮少よりも寧ろ其の用途協定に依存する。一國の軍備は直接に國策の内に根を下して居るのであるから、兩者は不可分の關係に置かれて在る様に見えるけれども、國策は本で軍備は末

でなければならぬ。之れ余輩が倫敦會議前「直接軍備制限と政策」なる一文を草し、滿蒙に於ける日本の特殊權益が今何處にあるかを明確にした後でなければ「軍備の自由」を抛棄し難き所以を説き、且つ帝國海軍の三大原則を支持して置いた所以である。賭戦地域滿蒙に於ける日本の自由行動を認めるならば、此の事實は干渉をしないと云ふ實證、即ち日本に七割を許すことに依つて裏書せられなければならぬ。日本は「脅威せず脅威せられず」との言葉を軍備と政策との兩者に引掛けて主張すべきであつた。然るに遺憾ながら倫敦會議に於て日本海軍側の三大原則の内二大原則は歪められ、特殊權益には、滿蒙に關する國際無政府状態には觸るゝ所がなかつた。軍備の多少の縮少が平和に貢獻する筈はない。

米國の海軍當局がモンロー主義維持には守勢的海軍を以て足るも極東門戸開放主義の維持には攻勢的海軍を要すと聲明して居ることは事實であつて、結局米海軍の唯一の存在理由は門戸開放主義の爲めに存在すると云はねばならぬ。此の場合門戸開放主義が不可侵を含んで居ることはヒューズの聲明で疑ひなき事實である。然らば何たる一大矛盾であるか。米國國策は國祖の遺訓を奉じ、唯ならば、國際約定文で行けるならばと云ふのに、軍備は刀に掛けてもと云ふ。米國は此の精神錯亂より回復せねばならぬ、吾人は此の回復を助長せねばならぬ。其の機會は現在より一九三五年末迄の期間に必ず與へられねばならぬ、吾人は英國の傳統を棄て、大西洋を渡つた英首相マクドナルドに學んで其の機會を掴むことすら出来る。

此の機會に於て余の主張せむとするは勿論九ヶ國條約の問題が余の提案の通り解決せられ、後段に述べる様に

日米不戦の原則が確立すること、相俟つて、海軍條約を余輩の太平洋國際帝國主義に合致するやう變容することである。

第一に、軍縮條約は本質上締約國が非締約國に對する同盟を形成し、此の同盟國の一部が他の一部に對抗して同盟するを禁止するものである。此の事實はエスカレーター條項、條約改訂に關する條項、非締約國の軍艦注文に關する條項、最近壽府に於ける日、英、米の「主力艦は攻撃武器にあらず」との共同宣言に明瞭に現はれて居る。然らば日、英、米三國間の海軍條約が、其の内の一國が他の一國に對して同盟しないことを默示の條件として居ることは全然疑ひを容れない。余は英米同盟して來るも恐るゝに足らずとさへ主張する人々の正氣の沙汰なるやを疑ふ、若し然らんに「六割よりも七割」と云ふやうなことは問題とならぬではないか。以上の理由で余は此の默示の條件を海軍條約の劈頭に明文を以て掲記せむことを要求する。

第二に、西太平洋と東太平洋との間に一線を劃し、太平洋海上霸權を日、米の間に分配し、其の近接海面に於て互に警察權を行使し、米國は渡洋作戰を抛棄し、日本は若しあれば、パナマ運河を驚かす虞れある渡洋潜水艦等を廢棄し、日、英、米共に航空母艦を廢止する等技術上讓るべきを譲り、共に守るに足るも攻むるに足らざる海軍力を保有するに留め、太平洋に永久の泰平を君臨せしむべきである。(拙著「國際軍備縮少問題」第十章參照)。

ハ 不戦條約 九ヶ國條約と海軍條約とだに太平洋國際帝國主義に従つて調整せられるならば、其の他は第二義的意義を有するに過ぎない。併し茲に一言不戦條約に論及する。英米戦争のみ “unthinkable” で日英、日米戦争は “thinkable” であると云ふ状態は實に不満足である。米國は門戸開放主義の理由で日本と戦ふ意思なきのみならず、

不戰條約に由り日本と戦ふの權利を抛棄して居る。日本の領土及び勢力範圍内の何處に米國が自衛權を發動せしむる根據があるか。米國のモンロー主義は余の見るところには既に過去のものだ。汎ラテン主義、A・B・C同盟は米國に對抗する。米國の生きたる動向を示す政策はカリビアン海政策あるのみである。而してカリビアン海地方の門戸閉鎖及び不可侵權蹂躪は日英の太平洋國際帝國主義に基く退讓に依つて充分に發展した。米國軍事専門家の「モンロー主義は米國の戰爭統系の中核を形成す」との言は、カリビアン海地方は米國の賭戰地域を形成すとの簡明なる形式に改めらるべきである。日本も英國も同一の賭戰地域を持つて居る。太平洋國際帝國主義は日、英、米の三者の賭戰地域神聖化の原則となつて發現しなければならぬ。疑似國際主義の表現たる不戰條約は外觀は不戰を看板とするが、内實は賭戰地域に關する豫備宣戰條約である。故に太平洋國際帝國主義の要求に従つて之を宣戰條約に改むるか、それとも外觀と内實との矛盾を清算する爲めに之を廢棄したる上、國際法學者の研究資料に寄贈せらるべきかである。

以上を充分了解すれば、日本が特派大使、能ふ限り首相外相等を米國に派遣することは自信と打算との結果であつて、突貫論者の憂ふる如き弱點の暴露でも讓歩の承諾でもないのである。余輩は日本が獨自一貫せる太平洋國際帝國主義を翳して先頭に濶歩すれば、他國が之に従つて來ることは宇宙自然の理法に依つて保障されて居ると確信するものである。併し若し此の理法に従はぬ彼の指鬣外道の如き狂人があれば已むを得ない。其の時は神がノアの洪水を起した様に、第二次世界戰爭の呪ひは全世界を阿鼻叫喚の巷と化し、北方から來る妖雲は全亞細亞を包み、十億の有色大衆は檻を出でたる虎の如く吼え、白人は白人と殺戮し合ひ、日本は太平洋國際帝國主義破産の結果、余輩が本論に於て

極力排撃したる人種主義、東洋モンロー主義等に立歸ることを餘儀なくせらるゝであらう。但し今日から斯かる最悪の場合を前提する必要はない。吾人は飽迄自然の理法の支配を情誼の籠つた政策で翼賛せなければならぬ。而して余が日米危局匡救の爲め日本から余の提唱する太平洋國際帝國主義に基ける平和の發案を爲すべしと主張する有力なる理由は澤山ある。

第一に、ホーンベックも云つた如く米國は日本の恩人であつて、忘恩は日本の傳統精神に反すると云ふことである。偶然の理由で日清戰爭直前の條約改正は英國が領導したが、開國よりポーツマス條約締結に至る迄、日本の外交關係を領導したのは米國であつて、重商主義の米國に日本は深き世話になつてゐる。其の事例は一八八三年馬關外國船砲撃事件の賠償金返還を始め、枚舉に追がなぬ（川島伊佐美著「日米外交史」四、八、一一、一二、一五、一六、二〇、二一、三六、六四頁等參照）。

第二に、假定された日米戰爭に於て日本は政策上は全然防禦的であるのに、戰略上はどうしても攻撃的でなければならぬと云ふ點である。之れ日本が平和の發案を繰返し攻撃者でないことを高調する必要がある所以である（池崎忠孝著「米國怖るゝに足らず」第三章、第十章、第十三章、第十四章）。

第三に、日本は米國の聯盟規約以下不戰條約に及ぶ疑似國際主義、即ち *pax americana* に餘り深く釣込まれたが爲めに外交戰の敗者となり、外觀上世界より孤立し、囂々たる輿論の非難を受けてゐる、之が爲めに現實界に内在する平和の親石太平洋國際帝國主義は愈々埋没せられ、余の既に述べたる如く米國の矜持をいたく害した、此の際之を是

正する必要がある。

第四に、米國が宇宙の理法太平洋國際帝國主義に従ふか、それとも理性を失つて第二のノアの洪水を招致せむとする狂的發作の徵候たる太平洋軍艦集中等を續けるかどうかを確める必要之れである。

第五に、若し眞に己むを得ざれば、第二次世界戦争に對し全國民を精神的及び物質的に動員武装するの必要あること之れである。支那有識者や米國人の一部には日本が現に經濟上困難し、國內の政情も亦不安なるに、今や滿洲國支持の責任を負ひ、南京や北京政府の策動及び歐米諸國の不援助を前にして或は滿洲經營に失敗し、其の自主的滿蒙經營策より退轉し、自然に米國人や支那人の思ふ壺に落ちて來るであらうと考ふる者がある。而して不幸にして國內にも階級鬭争を高調して自國の破滅を待望するが如き國內の敵マルキシストもある。帝國政府は此の難局を打開するの信念を有するばかりでなく、萬一の變に備へ、戦争が内閣や階級の戦争にあらずして眞に民族の戦争たることを實證し且國內の敵を完全に撲滅する爲め戦争が外部より強ひられたるものなることを明かにせねばならぬ。而して之を爲すには我方より想像し得る限りの一切の平和のヂェスチュアを用ふべきである。

第六に、米國からはグラント、タフト、ノックス、スチムソン氏等多數の大統領及び首相級の人物が度々日本に來り、日本に眞摯なる忠言を寄せて居るが、日本からは左様の人の行つた例が殆んど無いことである。

二 日英關係 大英帝國の崩壊は論策家興味を中心であつて、ジグフリード氏、池崎忠孝君の如き興味ある著述を公にして居る。英國が既に過熟期に入れるの徵候は歴然たるものがあつて、今の中に活を入れて置かないなら

ば、到底大厦の覆へるを支へ得なくなるであらう。國際政治の見地よりするときは、英國の疾患は、日英同盟より太平洋國際帝國主義に轉換せずして、米國の疑似國際主義に追隨し、社會主義のイデオロギイを對外政策に用ひて居る點に存する。

人間動物學の原則に従へば、回復も、維持も、添加も全く同一の方法に依らねばならないのであつて、英人の印度人統治の如き、物理力以外に何物もあるわけではなく、日本、米國、伊太利、佛國、獨逸等が或は同一のフ、シスト的傾向或は軍國主義的傾向を示す所以は茲にある。然るに英國人は餘りに文化人になりすぎて居る、波濤を征服したノルマン人の剛勇を失つて居る、支那人の爲めに長江上流より驅逐せられ、動く印度をどうすることも出来ない。然るに英國安全の一路は米國と同一路を歩むにありとて、日本二十一箇條要求の過失もあり、旁々日英同盟を廢棄し、世界政策に於て米國の疑似國際主義に追隨し、南京事件では悲鳴を擧げ、セツパ詰つて漸く上海死守となつた。併し文明病の英人に支那人を制御する力がないのは明らかに立證せられ、世界大戰中佛軍の左翼にあつて獨逸軍の前に雪崩の如く崩れし英人は十九路軍の敵でない。英人が日英同盟を愛惜して居るのは決して偶然でない。見るべし、米國の疑似國際主義に追隨せむとする英國の世界政策と其の極東政策とは明瞭に矛盾して居ることを。英國は今や彼の米國追隨の世界政策と、日本と互に相救はねばならぬ極東政策との矛盾を清算しなければならぬ必要に迫られて居る。其の際用ふべきものは太平洋國際帝國主義を措きて他に求むることは出来ない。

國際政治上社會主義は、四海同胞主義的民族主義を執り得る小弱國には妥當するが、異民族を制御する植民國には